

住美人。上探ニ眞情。中探ニ幡桃。下探ニ月華。採而得之提運行功自ニ。兩道白氣直上挾脊透ニ入雙關。超ニ入泥丸宮。流ニ轉於口。化作ニ瓊漿。嚙下重樓復入ニ丹田。超ニ火。鍛鍊此黃河水過流此則延年益壽作ニ陸地神仙。

○子午流通

子午流通と云ふは、男の陽體にして午南方火に屈せり離の卦火に應ず。女は陰體にして子北方水に屈す。次の卦水に應ずるこれなり。陰陽和合の法にたがひて。時は、女子は陽にまけ、男は陰にまける也。故に腎虛して我身をやぶる。を以て。則は。陰神を以て。兩精。名づけ。て子午流通といふ。されば天地自然の。なるにより、やうさへ正しければ長生の樂み也。しかるを血氣にまかせとりたるによつて。することば慎むべきなり。密通は格別、その餘はかくすべき事にもあらず。べきものならんかし。

○黃河逆流

凡そ。おのづからひらき、れあがり、出るところはひ、一。丹田にす。是れ陰陽體に。此のごとくするときは腎尾關を穿ち背を狭みニ屢樓となり。名づけて黃河逆流といふ。流によつて轉運則は下部の疾なしといへり。常に心得べきことなり。凡そ人瘡毒下疳等を病は女の惡疾を爲たるとばかり心得て已に疾あるをしらず。女も男も瘡氣なきはなし。薄きと深ひのちがひのみ、たしなみにて惡瘡ある女を。受ぬことあり。あとの。瘡と爲る。ときは、男女とも病をうけず丹田をよく補ば瘡は勿論諸病を治し、氣もまめやかにして老者若やくほどの藥となるもの也。

○鼻竇結實

凡そ人の身の中、鼻は天關に通漏して。の門とする也。口は血の底とし濁氣出入の門とする也。口を開くべからず。口鼻ともに。ぬやうに心がくべ



し。ほな。ひがたし。鼻と口とを閉がごとくにして、  
ば年を延壽なし益す。名けて鼻塞閉といふ。

○鼻手 鼻

女の きたるを伺ひ、

ゆるくとして、抱て山へ登るがごとくにて、俗にいふ曲取なり氣をか  
へて面白き事あれども法にあらず。巧を用ひて採取名づけて撒取過關といふなり。

○調 經 子

凡そ婦人月々經水を見ること女により、三日ほどにて仕まふあり四日五日かゝるもあり  
七日を限りとす。月々惡血出るなり。其惡血出でおほりて後はあと清々となる子の留るは  
此時なり。濁氣のある所へは とも子にならず。清き所ならねば懐胎せぬもの  
なり。其月経七日をすぎへりめより ひらきて居るゆえきつと孕むもの也。

一三五日(半の日也)とまれれば男を種む。四六日(丁の日也)は女をはらむなり。原來交

合は難にあらず、子を授るためなれば、法をひくく 月水中には女の口のまはり  
黄色なるもの也。經水後五日の内は赤黄色のもの下る是濁血にあらず、  
するを隔海といふこの時行へば必ずはらむ也。月水中凡そ七日とみて、其後五日の間は孕  
むとおもふべし。六日たてば赤黄水たへて子宮ふさがるゆへ子止ることなし。世人子をほ  
しがる者あり子の多く出来るをきらふ人あり。何れも此説を考へ行ふべし。子を持たんと  
おもふ人は月水の日を知り右の法の如く行へば懐妊あること草木の實を結ぶが如し。試み  
るに極めて効ありと云々。

(右十有二條 秘傳畢)

(七) 六路三時の特傳 (逸題本)

三度食ふめしと からださへ丈夫なれば、いつでも悪くはないものなれども、めし  
もあんまり食ひすぎれば脾胃を害ふ。 あんまり れば腎を破る。されども朝



から晩まで

ぬやうに心掛くべし。

しにしておき、

のきらひな女なぞには、かぶとがた、あるひは、よろひがた、すべて四ツ目屋にて賣る女悦道具を用ふべし。

いんらんとも堪能するほど

(この道具は

後章の秘具秘薬篇に詳述してある)

○

一寸の心得—— 絆を正しゆうして心を靜かに はづなれども、人見をしのびて、たまさか逢ふには、ことあり。しかれども、神社佛かく、日月の照し給ふ所、或ひは、かまどなど凡て清むるところ忌むべし。あやまりておかす時は、必ず崇りあり。もつともつゝしむべきものゝ一事なり。

○

酒と肴に珍味ありと云へども、酌はとかく女でなければ春めかぬと、この宴席、かしの料理も、三味線のペンと云ふ音がなければ酒がうまくないとは誠の料理合ひ、酒呑み

の言葉にあらず。藝妓を色仕掛けにて樂むの下心なり。その藝者をくどくには金銀なくては出来ぬと知るべし。先に云ふ通り、惚れ薬の第一番なれば金さへ出せば、たとへいかやうにむづかしい固い親のある娘でも色にもされる世の中なれども、これは云はずと知れたことなり。義理にせまりて自ら色にならぬやうにするが肝心のことなり。その方には氣に入りたる女ならば、かくべつ金をつかはすとも折々よびてこれをひいきにしてさしきを引きつけ友達にも呼ばせ、人の使ふ金をとらせるがよし。度々かくの如く實にひいきにするやうに見せれば自ら女のかたにも可愛ゆるものなり。その時充分に口説くべし。

併し、いや味なしに氣のあるやう、すいぶん氣前を見せ、男らしく惚れてゐる情を云ふ時は、親切の恩義に迫まり、殊にうれしき心もあれば、たとへ、すいた男ほかにあるとも自ら惚れると思ふべし。さて、の段取りになりては、充分にさきにしるす如く、べし。こゝに於て、心よいことたのしみにすぐれたれば亦心をうごかし、少々氣に



入らぬことがあつても段々深く思ふのみにて、末たのもしに色になること容易に、あゝそのつきぬものなり。よくよく考へて見るべし。

○金石(かたいそん)を懸(か)はせる條

昔々評判ものゝ石都金吉と云はるゝかたぞうなる女にても是非くどき落さんと思はば何によらず、好きなものを自分も好み、その女のひいきな役者をば自分もひいきにするつもりにし、その女の好食物まで自分も好きなつもりと思ひ入れあるべし。これらは云ふに及ばず、心まで良く似たるやうにして、大のかたぶつと見せかけ、かりにもいやらしきことなど云ひ出さず、他に人なきやうなる時は、たゞ兩人にてはその處に居らぬやうにして見せ、ときどき友達などにたのみて、吾がうはさを一體かたひ入にて、如才のない男ぢやと幾度も云はせて、間を見て、開巻し、これを念入れて讀み、もつとも初手のうちはを讀まぬやうにしたり、つひ段々とよみかかせて自ら氣を乙にさせたる時靜かに口説くべし。かくの如く心を用ひ、この一書を六踏三略の如く秘して、

大體事の口訣にて女に傳れられる法なり。よくよく心をつけなば如何なる女にても吾がものなるべし。

(八) 臨御及び御法 (洞女子「素女經」「玉房指要」)

洞女子云。凡 之時。先坐而後 定後令女正面

伏其上 即以 堅施於 森々然若偃松之當遠谷洞前。更施

勒鳴、口明、舌。或上親 下視金溝。推柏肚乳之間。摩瑤瑤台之側。於是男情既或

女意賞遠。即以 或下 或上築金溝。擊 憩息於瑤

台之右。(已上外遊未内交也。)女當姪 即以陽鐘

上灌于神田下流于幽谷。使往來 楷磨。女必求 乞命。即

以扇子 後乃以 至於陽台。由々然若巨石之擁深谿。乃

之法。於是 傍牽側拔。乍緩乍急或深或淺。

意也。男即疾撞急刻(刺)確動高捷。候女 即以陽鐘一攻其盤實。投入



不可死還必須生。返

女當

自不煩細々

如死出大損於男。特宜慎之。

素女經云。黃帝曰。陰陽貴有法乎。素女曰。臨時先令婦人

入其間。銜其口。吮其舌。拊搏其。擊其。東西兩傍如是食項。徐々

肥大者。半弱。小者。勿。徐出。除百病。勿令四傍。王

自然生熱。且急婦人身當自。上與男相得然後。男女百病消滅。

當閉口刻之一二三四五六七八九。因深之至昆石傍往來。口當婦人

口而吸氣。之道於乃如此。

(八) 王房指要云。道人劉京言。凡

之道。務欲先徐々嬉戲使神和意感。良久乃

弱而內之。監急退進之間欲令疎。亦勿高自投擲。頭倒五臟。傷絕絡脉。致生百病也。

五〇

但接而勿施能一日一夕。而不失精者諸病甚愈年壽日益。玄女經云。黃帝曰。

之時。女或。其實不動。不出。不強。小而不務。何以爾也。玄女曰。陰

陽者相感而應耳。故陽不得。陰不得。而女不樂。

而男不欲。應不和精氣不感。加以卒上暴下。愛樂。男欲求女。女欲求男。情意

合同俱有。故女質振感。營控俞鼠。弛縱乍緩乍急。開禽

或虛或實。作而不勞。強敵自佚。漑朱室。今陳九事其法。備悉神

脚屈折。帝審。慎莫違失。

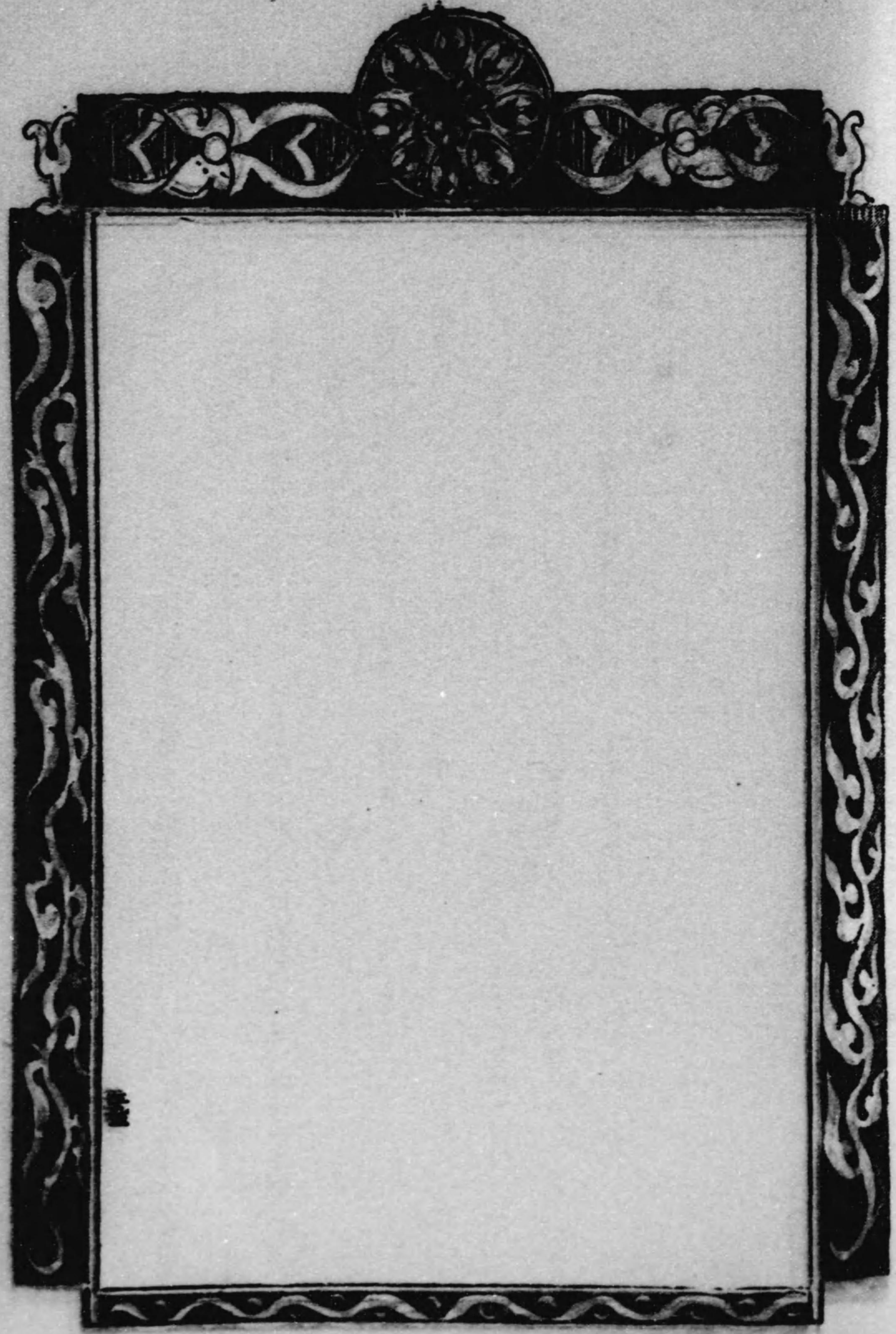
(九) 未だ年いかざる娘にて泣くことも知らず。只ちゆうちゆうばかり言ふを泣くやうに仕込

む秘術なり。

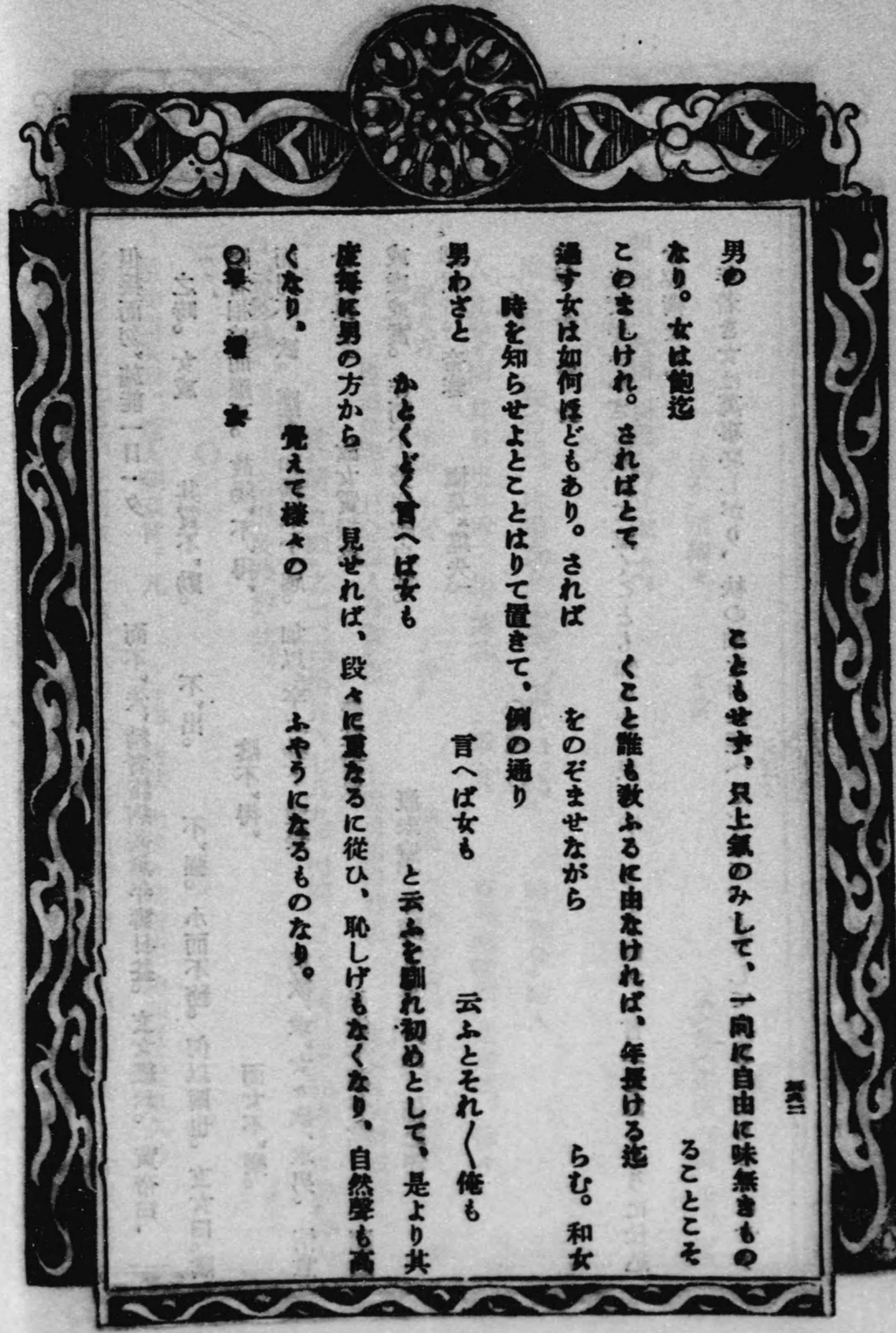
年若き女は萬事恥しがり、袂の袖を口に唾へなどして、どうして鼻息などもろくにせず

五二





書



三

男の こともせず、只上氣のみして、一向に自由に味無きもの  
なり。女は飽迄 ることこそ

このましけれ。さればとて くこと誰も教ふるに由なければ、年長ける迄  
通す女は如何様どもあり。されば をのぞませながら らむ。和女

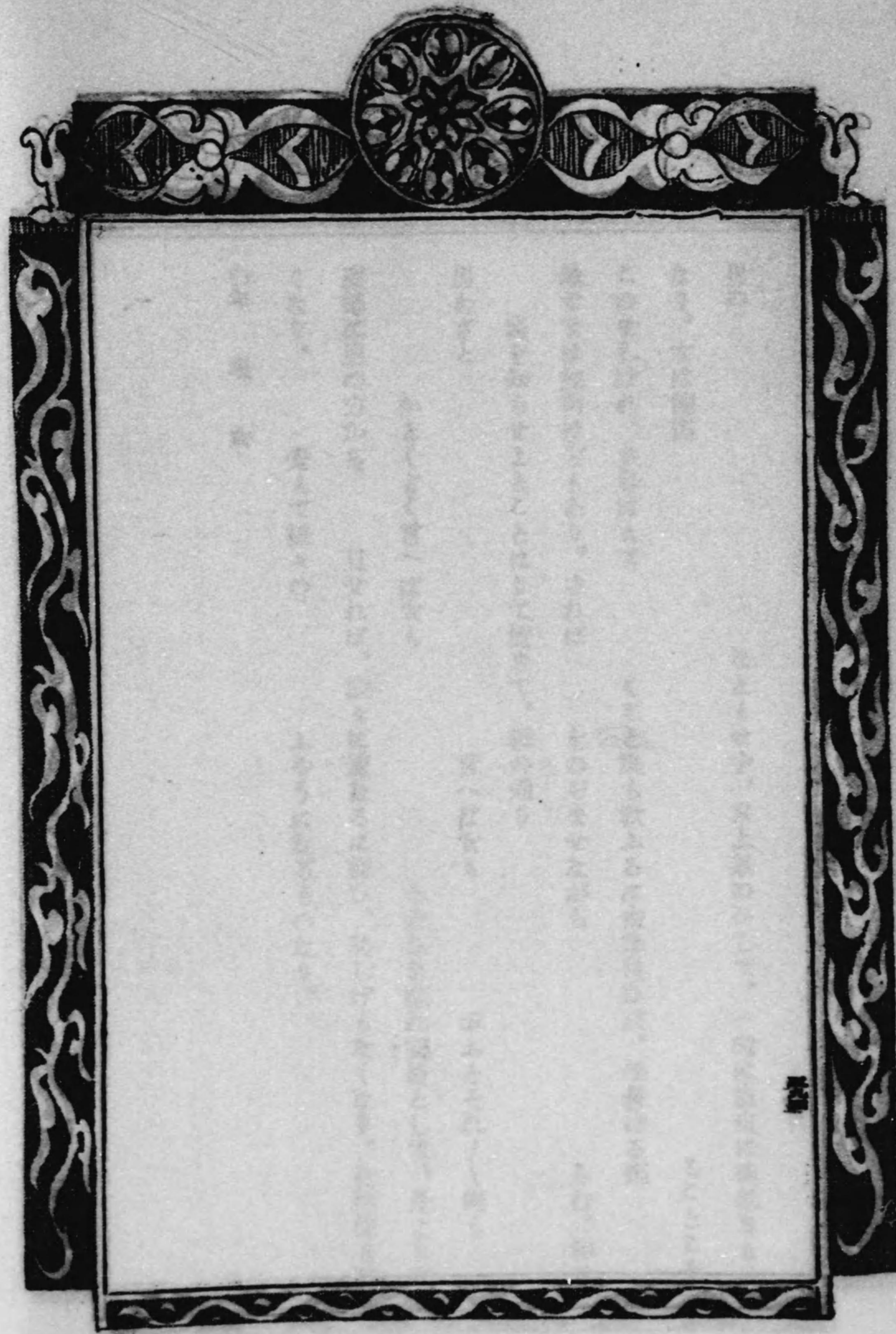
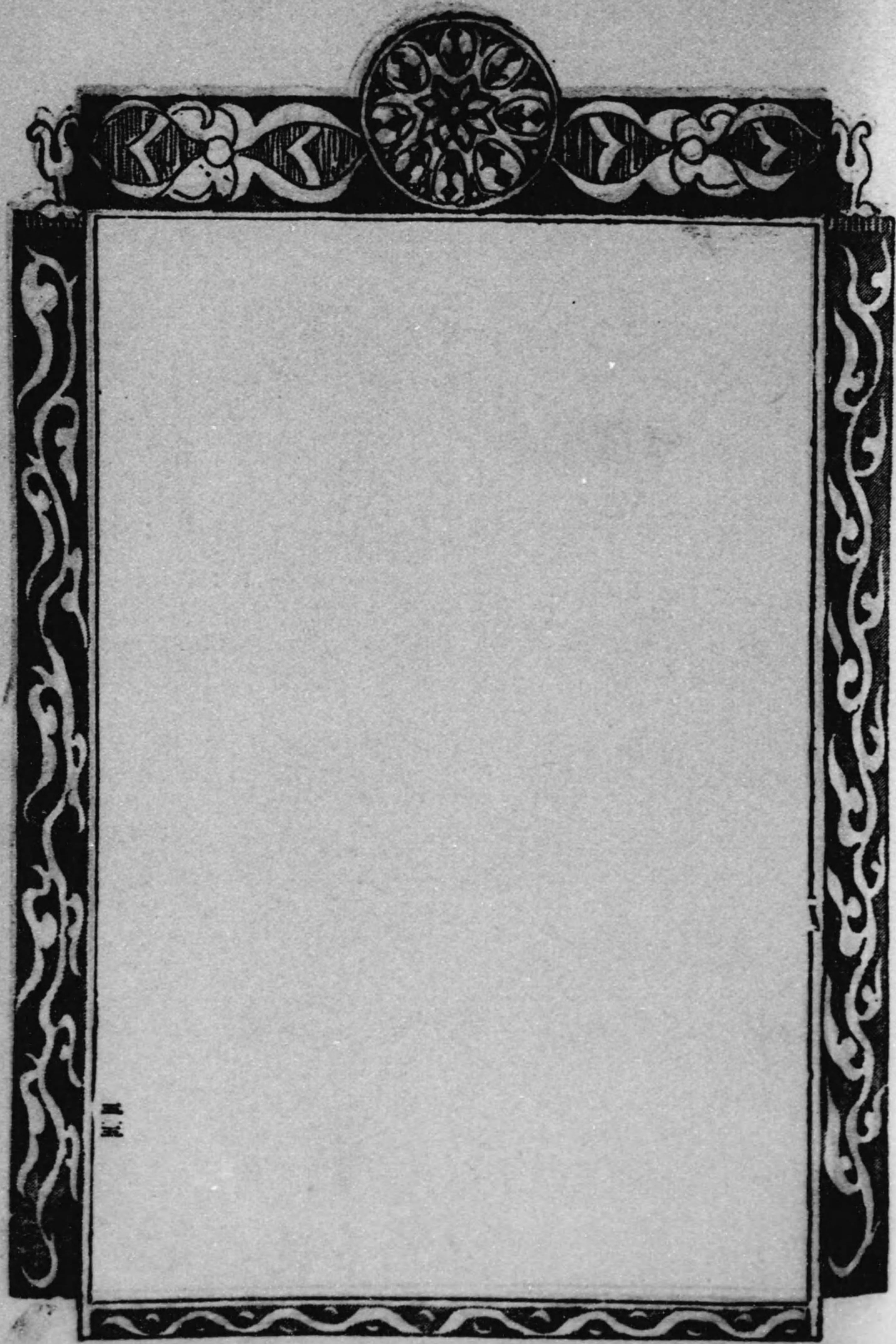
時を知らせよとことはりて置きて、例の通り  
男わざと 言へば女も 云ふとそれ／＼俺も

かとくどく言へば女も と云ふを馴れ初めとして、是より其  
度毎に男の方から 見せれば、段々に重なるに従ひ、恥しげもなくなり、自然聲も高  
くなり、 覚えて様々の ふやうになるものなり。

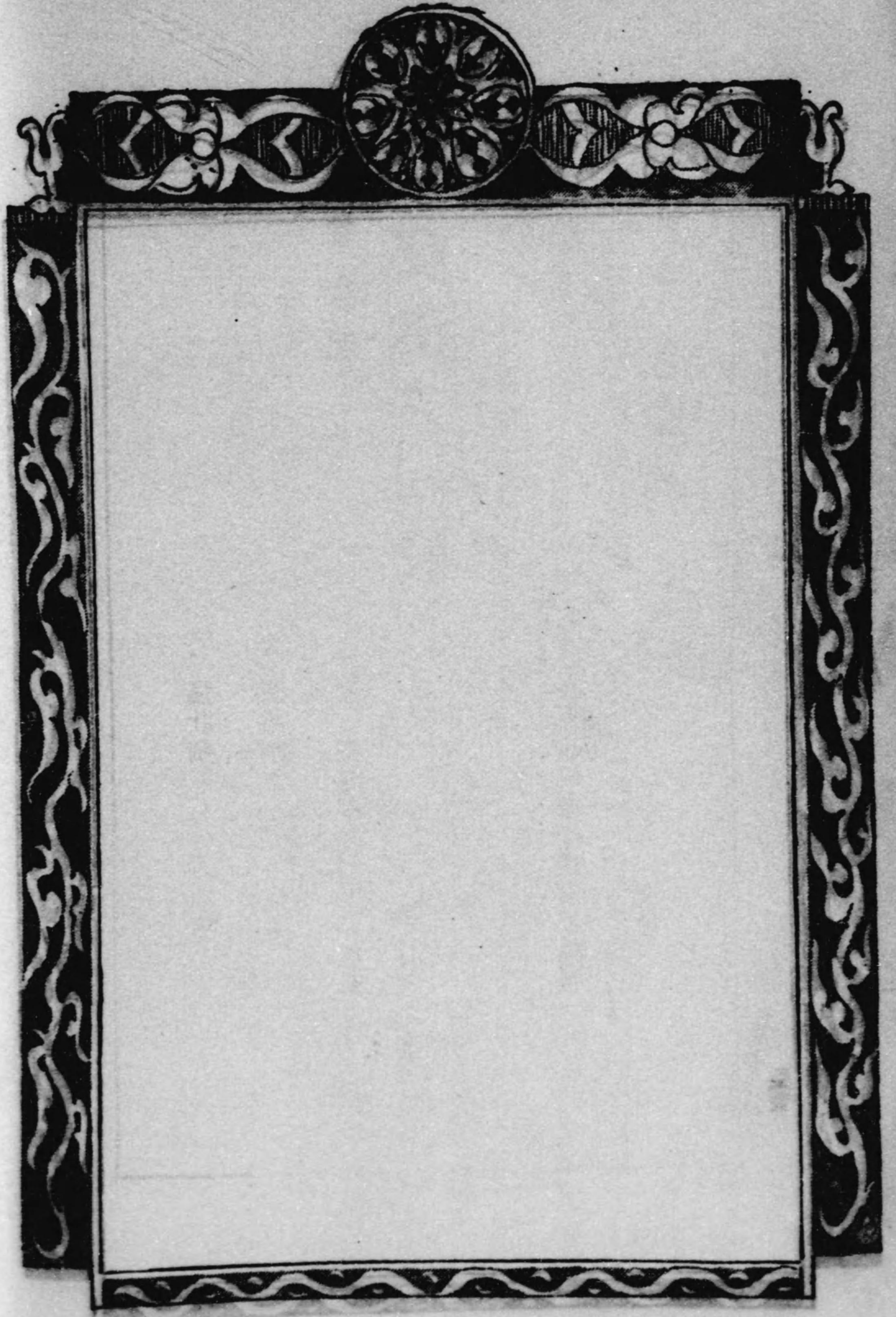
○事 〆

...









(第四部)

秘藥方一般

- 一、強壯劑としての秘藥
- 二、催淫劑としての秘藥
- 三、増進劑としての秘藥
- 四、男根の、女陰の に関する秘藥
- 五、陰萎の治療に関する秘藥
- 六、 保留の秘藥



六、 婦科の秘薬

正、 調經の秘薬に關する秘薬

秘薬

# 秘薬六一類

(第四種)

- 一、 調經の秘薬に關する
- 二、 胎前産後の秘薬
- 三、 血虚の秘薬
- 四、 畏寒の秘薬
- 五、 女科の秘薬
- 六、 調經の秘薬

古今東西に亘りて、色んな閑な人達が發見製造したところの無數の秘薬中より、私は今左に、強壯、不老長生、に關する五ツの區分のもとに、其處方を發表する程度に止めたいと思ふ。秘薬に關して、より以上のものを欲する人は、酒井潔の「らぶ・ひるたア」を熟讀してほしい。

## (一) 強壯劑としての秘薬

飲食物では牛肉。羊肉。黒ビールと牡蠣。章魚。海膽。海鼠等が宜しいやうだ。薬品では鱈が最も有効らしい。この鱈と云ふやつは、その極少量を攝取する場合、即ち傳播性刺戟劑の程度に止まる範圍に於ては(量を越すは生命に危険)幼者には骨を、老人には、を増さしめるからである。

- 鱈 油 一オンス
- 肝 油 七オンス



右、漸時に増して一回茶匙一杯宛を用ふ。

又、その他の原因に依つて、

に陥入りたる場合には、極少量のストリ

キエーネの服薬は卓効を奏する。或は強壯劑として、卵の黄味、西洋獨活、蜂蜜、沒藥、肉桂、胡椒等が有効と證されてゐるのは、人の皆よく知るところである。アラビヤの奇書「老人若返法」に依ると、「小豆蔻、生薑、大茴香、獅子の膽、蜥蜴、カメレオンの類と思はれるイスカンコーの腎臟、野驢の鼻丸」等が列擧され、強壯劑としては、

鷹曹汗、樟腦、サフラン、肉豆蔻、肉桂、丁子ノ木、白檀、高良薑、ヘレボア（毛茸料の一種）等に白砂糖を加へ、清淨な蜜を振り掛け、堅固な器に入れて三ヶ月間放置して製する。又、その強壯劑としての最も効果ある油脂に就いては、「ソロモン蟻と稱する蟻を取り出し、かみつれ草を三ドラクムと雄雀の腦髓三個を入れ、この混合藥で局部、恥骨、足の、する。」それに今一つは一寸惨酷な製法で、「雄雀を取つて、生き乍ら毛をむしり、十匹の地蜂の間へ放し、死ぬまで嚼ばませる。次に牛脂に入れ、肉が片々になる

迄、それを瓶に容れる。かくして  
の靜脈を摩擦する」のださうである。

の場合、これを以つて

の周圍の一筋

尙、同書の十三章を見ると、「強壯を目的とする繃帯及び束縛」と云ふ所がある。これは先づ、駱駝の陽根の黒燒きと、瘡病の駱駝の瘤とより作つた練藥を左の足の親指にぬつて繃帯せよとある。

更に支那方面に轉じて古書を獵ると、「秋石」が殆んど強壯劑の材料となつてゐることに氣付く。「支那の珍藥秘藥」を見ても、此の「秋石」が擧げられてゐる。それに依れば、「秋石」は補腎の聖藥と呼ばれ、強壯劑中の強劑となつて居る。而も其材料は人間の小便といふから面白い。「秋石」は「秋泳」ともいふ。其製法は

秋月に童子の溺を取つて缸に入れ、石膏末七錢を入れて、桑の棒にて攪き廻し、澄むのを待つて、其上水を捨てて、斯くて二三回した後、秋露水を入れ、更に攪き澄して其沈澱せるものを、灰の上に紙を鋪き、それにあけて乾かすのださうである。「秋石」といふ名



稱は斯ういふところから來て居る。又單に、男の小便を壺に貯へ置いて、約三ヶ月後に上澄みを明けると、底に沈澱した固形物が殘る。

ともいつて居る。其實は白くして堅い。淮南子「丹成號曰、秋石言其色白質堅也」とある。「人中白」と殆んど同様であるから、これを混同するものもあるが、玄人には確然たる區別があるらしい。秋石は童子の溺に限らず、少女の溺をも材料とするといふ。本草綱目（卷五十二）に

嘉謨曰、男用童女溺、女用童男溺、亦一陰一陽之道也。

とある。男は少女の溺を材料とせるを用ひ、女は少年の溺を用ゆる。一陰一陽の道といつて居るが、なかなか理窟がありそうである。

其効能に至つては、實にたいしたものである。虚勞、冷疾、寢小便、夢に遺精する即ち身體が衰弱した者に効能があるが、其他滋強の効能に至つては本草綱目（卷五十二）に

腎水を滋くし、丹田を養ひ、本を返し、元に還り、根を歸し、命を復し、五藏を安んじ三焦を潤し、痰飲を消し、骨を退き、軟を蒸し、塊を堅くし、目を明にし、心を清め、年を延べ、壽を益す。（嘉謨）

とあるから、たいしたもの、「補腎の聖藥」の所以である。効能中「三焦を潤す」といふことは、漢方にて六腑の一で、上中下に分れ、上焦は心臓の下に在り、中焦は胃の中脘に在り、下焦は膀胱の上口に在りて、排泄をつかさどるといふ。難經に「胃上口以上爲焦主内而不出、胃之中脘曰中焦、主腐熟水穀、膀胱上口爲下焦、主出而不内」とある。秋石を材料とせる滋強劑に七種ある。何れも支那の藥店に於て賣つて居る。何れも絶妙な効果があるといはれて居る。

(イ) 和石還元丹……秋石に棗と、綠豆、酒等を加へて煮つめるのださうである。老衰者が服すれば壯者をしのぐ程性慾旺盛となる。（經驗良方に據る）

(ロ) 陰陽二鍊丹……陰陽の二種に分ける。秋石を煮つめて作るのであるが、陽煉法と



陰煉法共に、時間と火の加減に據る。其方法は詳しく葉石林の「水雲錄」に掲げてあるがこゝには略する。之を服すれば陰陽共に強壯となる。

(ハ) 秋水乳粉丸……秋石に麝香とか乳香とかを加へて釜を以て煮つめる。其方法は揚氏の「願真堂經驗方」に詳しい。其効能は元陽を固め、筋骨を壯にし、延年不老、百病を却くとある。

(ニ) 直指秋石丸……秋石に鹿角、膠炒、桑螵、蛸灸、伏苓を加へ粉末となし、糕糊を以て丸となし、人參湯にて嚥下すれば濁氣を治して精を増すといふ。「仁齊直指方」に詳しく。

(ホ) 秋石交感丹……秋石に白伏苓、菟絲子炒を加へて粉末と爲し、百沸湯と井水とを以て煮、丸となし、鹽湯を以て服する。白濁、遺精を治すといふ。鄭氏の「家傳方」に詳しく。

(ニ) 秋石四精丸……秋石に白伏苓、蓮肉、芡實を加へ粉末となし、更に棗肉を和して

蒸して丸となし鹽湯にて服する。 による衰弱を治する。「永類鈴方」に據る。

(ホ) 秋石五精丸……秋石に蓮肉、眞川椒紅、小茴香、白茯苓を加へ粉末となし、之に棗肉を和して丸となし、鹽湯温酒にて服する。常に服すれば補益となる。劉氏の「保壽堂經驗方」に據る。

其他本草綱目には、腫脹忌鹽、赤白帶下、噎食反腎、服圓發熱に効ありと書いてある。薬店では單に「補腎水」として賣つて居るものもあるが「補腎水」とか「補腎膏」とか「補腎湯」とかいふのは、其名稱同じくして其材料に相違あり、秋石とのみ限つてない。

秋石は補腎薬として最上のものであるから、之を漫りに用ゐては其効力過度にして身を害ふ。瑣碎録に

此薬を服する者は、多く是れ 此れに藉つて放肆に陽を虚くし、妄りに眞水を作る。愈潤る。安んぞ渴せざるを得んや。陽薬を以て之を補ふこと甚しければ遂に身を亡ぼす。



とある、荒淫にして陽を虚くし、此薬によつて之を補ふの害を述べて居る。また五雜俎（卷十一）には

秋石を煉るの法あり。童男女の小便を用て熬煉して雪の如くにし、鹽を當て之を服す能く腎を滋し、火を降し、痰を消し、目を明にす、人天地の生を受く、其本來の精氣自ら一身の用に供るに足れり。少壯の時、酒色喪耗し、宴安耽毒、原味其内を戕ひ、陰陽其外を侵し、空しく皮骨を除して、自ら持すること能はず。而して乃ち腥穢濁の物に倚頼して、以て命を奪ひ、魂を返すの至實と爲す。亦己に愚なり矣。況んや此薬を服する者又年を延き、病を祛るの計を爲さず。而して之に藉つて志を肆にし。欲を縦にするの地と爲す。往利未だ得ずして、而し害之に随ふこと勝て數ふべからざる也」と。

「玉房指要」に依れば、「治男子欲令健作房室」

地床。遠至。續斷。從容。

右四物分等爲散。日三服。方寸七。

とあり、「極要方」に依れば、「療大夫欲健房室百倍勝。常多大方。地床子二分。鬼絲子二分。巴戟夫皮二分。肉從容二分。遠志一分。五味子一分。防風一分。

已上爲散。酒服半錢許。廿日益生精氣。」等とある。

又、「西施受龍丹」と云ふ強壯劑があるが、これは、

丁香、附子、良姜、官桂、蛤桂各一錢、白礬飛、硫黃、山茱萸各七分を

右爲細末練密爲丸如梧桐子大每服三丸空心温酒送下雖不衰弱壯堅大女羅其美如

歎治也」。

○七寶美髯丹

烏鬚髮壯筋骨固精氣續嗣延年。

大明嘉靖初郡應節真人上進此方。世宗肅皇帝服餌有對連生皇子。於是天下大行矣。



一、赤白何首烏 各一斤浸米泔三四日刮去皮用黑豆

一、赤白茯苓 各一斤去皮研末以人乳十盞浸旬候乾研末

一、牛膝 八兩酒浸一日蒸之晒乾

一、當歸、一、枸杞子、一、兔絲子 各八兩酒晒乾

一、補骨脂 四兩以黑胡麻炒香

皆忌鹹酸 煉乾丸空心酒服一百丸

○女老つ丸

この妙薬色々野色本にあれどもよくきくといふ事誰か其の徳を見る人なし。今どきの若衆第一氣短く薬をいれてやりくりを其まゝし(原本のまゝ)ゆゆへ、キかんとなり。我れ秘事をこゝにあらはしよく覺へ其の如くになし給はゞ女もよろこびの薬共いひつべし。きかぬといふ事なし。

一、丁子三錢。一、さんせう三錢。

右二色を粉にして、なるほど良き酢にて和らげ、  
くして取りかゝれば、 事甚し。

入れ置きしばら

○壯陽丹

一、丁子。一、ふし。一、りやうきやう。一、肉桂。一、蛤。一、さんしゆ油。各一錢  
一、明礬。一、いわう(硫黄) 各七分。

右八味を蜜にてねり、むくろじ程の大きに丸じ、すき腹のとき、三粒づゝあたゝめ酒にて吞べし。腎をおきなひ氣力をまし、 して老人といへども若きものゝ如く  
こと疑ひなし。しかし若き妻なきものは、うくわつに是を服すべからず。 過ぎて  
困るものなり。

等、こんな調子で拾つてゐたら、更に數十方も挙げねばならない。例へば、やれ「冰臥手  
事卷」に依れば、「羚羊角と桃仁と姪羊角とを各細末にして常に貯へ食前毎に白湯乃至薄茶  
にて用ふべし。精氣を増すの妙薬也」とか、或は「覆盆子に白胡麻に枸杞を各細末にして



毎日その少量を湯にて飲むべし」等々で、強壯劑の處方は此邊で結んで置く。

僕の経験では、強壯の目的を藥物に依つて求めるよりも、飲食物に依つて得た方が、何等の副作用も、或は藥物の服用後によくやる反動作用もなく、  
にも堪えられるばかりでなく、却つて積極的にさへ出ても差支へないやうだ。この飲食物の品目に就いては前述の如きものは有効だと信ずる。

藥品としては、目下、獨逸のフリードリツヒ・バイエル會社特製の新藥「ユベニン」が最も効果あると思ふ。参考までに其のパンフレットの一部分を左に示さう。

### 緒言

性慾官能障害は、實地治療よりすれば多くはノイローゼの一症狀たる生殖器能障害にして、其病理的本體を構成するものは、各種の異なる分子の總活動に因りて生じ、従つて之が治療に當りては、可及的各個の病性分子に觸るゝ要あると共に、之等に對し個別的に治療作用を及ぼす可く努力するは最も緊要なる事に屬す。

而して性慾機能障害の病理的構成分子は、生殖器の器質的神経質症狀、及び之と密接の關係を有する中樞神経系の肉體並精神的障害に對する一般的抵抗性なりとす。

此抵抗性は、其反射的興奮性及疲勞性の程度、生殖器官能の先天的及後天的素質、個人の神経的特異状態の發達程度等と不離の關係を有し、従つて性慾官能の故障に陥るべき素質を有する一定の個人的定型あるは已知の事實にして、刀圭家の特に注意すべき所とす。

されば之が藥劑的治療に當りては、須く精神治療にも留意し、先づ神経系統の一般的抵抗力を強靱ならしむるを主眼とし、延ひて之を生殖器領域に及ぼす中樞神経系統の局所的官能状態に作用せしむ可きものとす。官能性陰萎又は早漏状態に對する藥劑治療上の着眼點は

- 一、全身の強健を増進し、神経系の緊張度を昂進せしめ。
- 二、反射的興奮性を高め。
- 三、生殖器及生殖器に屬する脊髓中樞の血液環流に局所的變態を來さしむること。



等なり。

而して全身の強健を増進せしむるには宜しく砒素剤を用ふ可く、反射的興奮性を高めんにはストリヒニンを選び又局所の血管作用に對してはヨヒンピンを適用するを可とす。(現時市場に在る罌丸等より製作せる種々の臟器エキスは此三様の作用を如何なる程度迄發揮し得るや猶不可解に屬すと)

弊社は此方針に基き砒素、ストリヒニン、ヨヒンピンを實際治療の目的に最も適合せる比率に結合せしめたる新製劑を創製し、ユベニンなる名稱の下に市場に提供せり。

本品の治療作用は單に砒素、ストリヒニン、ヨヒンピン個々の數學的總和に非ずして、是等三者の微妙なる綜合作用に依り一層顯著に發現するものなり。

### 性 狀

ユベニンはメチールアルシン酸ヨヒンピンとメチールアルチン酸ストリヒニンとの結合體にして、砒素、ストリヒニン、ヨヒンピンの比率は弊社が幾多の動物並に臨床的試験の

結果確定せるものにして、各錠及び各アンブルレン中〇、〇一瓦のメチールアルジン酸ヨヒンピン及〇、〇〇〇五瓦のメチールアルジン酸ストリヒニンを含有す。

メチールアルチン酸はカコチール酸の如く呼氣に不快なる蒜様惡臭を來さず、且つヨヒンピン、ストリヒニンの共存の下に於て、最も之等と調和し適度の砒素作用を發現するものなり。

### 適應症

陰萎、勃起障害、早漏、精液漏、遺精、精神的陰萎、快感の缺損及減退、性欲減退、神經衰弱、ヒポコンデリー、自瀆、慢性中毒(アルコール、ニコチン、モルヒン等)及一般精神的衰弱に原因する上記障害。

各種の原因による月經困難、子宮發育不全(ヨヒンピンによる生殖器系に對する強力なる血流作用) 快味減退、性欲充進、交接不能。

男子に於けると同様女子に於てもユベニン療法によりて同時に一般的強壯作用を齎し元



氣を増進し倦怠感を除く。

#### ユベニンの使用法

ユベニンは(一)、錠劑 (二)注射管の二種の包装にて市場に提供せらる。而して其特長性は先づ正規の「注射及錠劑併用療法」の Kombinierte Injektions-Tabletten-Kür) 施行後に發現するものなりと雖も特殊の事情にて前記「注射錠劑併用療法」を行ふ事不可能なる場合或は患者自ら其注射の疼痛を厭ふ場合には「錠劑單獨療法」に依りても所要の目的を達し得べし。

注射及錠劑併用療法……隔日各一、二ccの注射を十回に行ひ、之に踵いで錠劑療法、即ち一日一錠より始め、五錠迄、向上しつゝ五十錠を服用せしむ。但し之は夜間服用するを可とす。頑固たる病症の場合には之を引續き更に十回の注射を行へば特に持続性作用を齎し頗る良効あり。

錠劑單獨療法……種々の事情の爲めに注射療法の遂行不可能なる場合或は患者之を倦厭

する場合に行ふものにして、之に依ても前述の適應症に對し持続性良奏効を得べしと雖も之は正規に且つ長時日に涉り持長連用するを要し、唯だ數日の適用に由て奏効を求めんとするは不可能の事に屬す。之が服用に際しては先づ夜間一日二錠より開始し四日ごとに一錠を増しつゝ漸次一日五錠に至らしむ。之を一日二三回に分服せしむるは最も良き服用法にして、常に食後一乃至二時間を経て服用せしむ可し。尚ほ服用には先づ錠劑を全部嚙下せしめ次で少量の水或は茶を服用せしむ可し。錠劑の服用に當り之を溶解し、又は嚙碎せしむべからず。

#### (二) 催淫劑としての秘藥

催淫的要素に富む食物は、玉葱、んにく、冬葱等が第一に屬すべきものとすれば、胡椒、生薑、芥子、蒲桃その他の香料は第二に屬すべきものであらう。

ヴァニラ。チロコレート。少量の酒精——皆催淫劑である。……  
薬品としてはカンタリスが一番だらう。アルコールで溶かしたのが所謂カンタリスチン



キで、これを  
たために、男子は、となり、女子には、となるものさへあるからである。その他阿片、麝香、琥珀、龍涎香等共によろしい。が、是等は勿論、嗅覚を刺戟することに依つて起る催淫的效果であるが、局所的塗布劑としてはサチリオンは最も有効かも知れない。

「カーマ・スートラ」には

若し男がダウトウラ、マリチヤ(胡椒)、ピツパリ(胡椒の類 Piper longum)を蜜で混和したもので、塗り、女と、時は思ひ通りに女を、しめる。

ウジュラ、ヌヌヒ、ガンダカ(Euphorbia Trigona)を細片に刻む。これらをマナフシラー(赤砒素)、ガンドハパーシヤナ(硫黄)の粉末と混和して乾燥する。この方法を七度繰り返し、後これも細片を粉末にし蜜で混和する。若し男がこれを、塗布してば女は、如くなる。

この粉末を糞の糞に混和して少女に投げかければ、この少女は他の男と結婚せぬ。と。

ところが、「アナンガ・ランガ」には

○第一 プラヨーガ(外用薬)

シヨバ、即ち大茴香の實(トンドスタンに於ける「サンヅ」)を細末とし、之を濾し蜜を混へて煉薬とする。塗れば、可能なだけに内部に達し、

婦女に、催起させて、これを男子の力に服せしめる。

○第二 プラヨーガ

淨めたルイ(ぶたくさ)の種子をチャイ樹の葉と共に臼で搗き擦つて汁を搾る。これを濾して前項の如くに塗る。

○第三 プラヨーガ

Tamarinda Indica の實を、蜜とシドウラ(鉛丹、朱砂、又は水銀の赤硫化物)と共に臼にて搗き碎き、前の如くに塗る。

○第四 プラヨーガ



樟腦、タンカン（硼砂、又は無感硼砂、俗にタンカン・クハアルと呼ばれる）、及び精煉した水銀の等量（サーマ・プハーガ）を、蜜と共に搗き碎きこれを前の如くに用ひる。

○第五 プラヨーガ

同上、蜜、グヒー（融かした酪若くは澄ませた酪）、無感硼砂、及びアガフター樹の葉の汁とを等量に搗きませ、前の如くに用ひる。

○第六 プラヨーガ

古いグル（赤ヂヤダリ、即ち煮つめた糖蜜）、タマリンドの莢豆、及び大茴香の花粉の等量と蜜と共に糊状とし、前の如くに用ひる。

○第七 プラヨーガ

黒胡椒の實、曼陀羅花、丈長胡椒の莢、ロドホラの樹皮を白蜜と共に搗き碎いて前の如くに用ひる。この藥は最大の効果を有する。

更に、アラビヤの奇書「老人若返法」第八章、「催淫藥調製について心得可き事」

を見ると、

乾燥したチツタ豌豆。アラビヤ人は是を嚙み下したらしい。腹中で發生する濃い瓦斯は精液と同質のものと思じた。まつばたんほほも同様の効ありと思じたらしい。これには生薑を加へたりして服用した。玉葱は辛くて湯氣があるが、滋養分を缺いてゐる。それを補ふために小動物の脂肪を加へる。と云ふやうなことが記されてゐる。そして、その第二十八章「催淫物の種々」と云ふところには、「玉葱、鶏卵、特に雀、鴨の卵は効驗あり。イスカンコーも大効あるが、これはカイロ地方では用ひてならぬ。それはナイル河の水質に因るからで、男子の慾望を減殺するが女子のは反つて増すと云はれてゐる。このイスカンコーの大効ある原因は、二つの生殖器を持つてゐるからだ」と云ふのである。その他蜥蜴、山羊、鴿鳩等であらう」と。

「醫心方」の第二十八卷房內篇を見ると「千金方」と云ふ催淫劑の處方が出てゐる。采女曰。之事既聞之矣。敢問服食藥物何者亦得而有効。彭祖曰。使下人丁強不



老。房室不勞損。氣力顏色不衰者。莫過藥角也。

其法。取藥角刮之爲末十兩。輒用八角生附子一枚合之。服方寸匕日三大良。亦可煎藥角令微黃單服之亦令人不老。然遲緩不及內附子者服之。廿日大覺。亦可內隨西頭茯苓一分等掃飾服方寸匕日三。令人長生。  
(今案玉房秘訣同之。)

▽「蘭房秘訣探戰春方」と云ふ寫本に、左の如き催淫劑の處方がある。

○貂蟬對爐入戶丸

柯子皮炒黃一錢、枯礬一錢、川椒末三分、梟腦三分、桃毛三分、母子香一個

右爲細末煉蜜爲丸如黃豆大每夜

內亦美緊亦趣。

▽「馳道通言文のゆきかひ」なる馳本に左の如き催淫劑の處方あり。

○開縮丸

一、てうじ三粒。一、さんしやう四粒。一、りうこつ。一、明ばん。一、かいへうしや

う。一、さいしん。この四味少しつ。

右藥名を開縮丸と云ふ。これを細かにして生蜜にてねり小さく丸めおきてする少し前につばにてとき、指の先にて、

戯れてゐるうち、かのくすり

とけゆき渡ると等しく

となり、

なる故、

と出して少しせき立つ様子に見ゆる

なり(以下略)

▽「枕文庫」にも催淫劑あり。即ち左に掲ぐ。

○女の心亂す秘藥

一、狗骨灰三錢。一、肉桂二錢。一、陽起石。一、熟地黄。一、桑螵蛸。一、破故帛各三錢五分

右六味を細末にして鶏の卵をもつて○ほどに丸じ酒にて女に吞ましむれば夫ある女は夫のそばへ行きしなだれ夫なき女は男ほしくなる也。



○嗅て女の心を亂す藥

一、丁香二粒。一、甘松二粒。一、紫梢花八分。一、白檀三分。一、附子三粒。一、五八霜一  
麝香六分。一、龍腦八分。一、海狗肝八分。

右九味細末にして煉蜜にてねり土器に入地中に埋め七日ほどへて取り出し香氣のぬけさ  
るやうに貯へ置き女に對して何氣なく焚たくべし。

▽「教訓女才學繪抄」にも左の如き催淫劑二方を掲ぐ。

○鶯聲丹

一、せきりうひ。一、もつこう。一、ごしつ。一、じやじやうし各五分。一、右四色粉にし、つばきにてよくねり、  
ふべし。

一、じやじやうし。一、ごつのはい。一、につき。  
右等分つばきにてよく練り、  
て使ふなり。

▽「實娛教繪抄」の一節に

(一) 三ツ角銀杏を嚼み破りつぶして其の露を  
受合なり。時は遊女たりとも

(二) せんそ一味よく細末にして、  
つばにてふき落して、  
保ち如何なる  
につけ置き、  
思ふ時  
ことも多けれ

は其の...を忘れかねること長命丸にまさりて、  
くなる稀代の法なり。

(三) 一、狗骨灰三粒。一、肉桂三粒。陽起石二粒五分。一、熱地黄二粒五分。一、桑螵蛸二粒五分。  
一、破胡帛二粒五分。

右六味細末にして鷄卵にて練り○程に丸し酒にて吞ましむれば心うつくと上氣して云  
々。

▽「婦美のはやし」の一節に、

○喜陰方



一、じやじやうし。一、肉桂。一、狗骨灰。

△右等分粉にして唾にてねり合せ

使ふべし。

△「文のしなん」の一節に、

○剛勢散

一、せんそ<sup>三錢</sup>。一、こしやう<sup>五分</sup>。一、じや香<sup>三錢</sup>。

右三味細末にして行はんと思ふ一時程前につばにてとき

にぬり置き洗ひ落し

て 云々。

△「逸題」の艶本

○催春香

蟾酥。龍腦。薄荷。各少量。

右三味を細末となし鶏卵のあま皮を干して刻みたるを加へ、これを煙草の中に交へて其煙を女に嗅せる時は急に淫情を云々。

(三) 劑としての秘藥

△「アナンガ・ランガ」第六章の一部に

○第一 プラヨーガ

ラツチャール<sup>れりて</sup>即ち含羞草の根に牝牛の乳を混へて粉末とする。又牝牛の乳がなければパンチャ・ドハリニヴァルンダ、角の鋭い乳樹の濃い樹汁を用ひる。これを、男

の足趾に塗れば ため抱擁は大いに

○第二 プラヨーガ

ルイーの根(大馬利筋の根)を粉末とし、これを紅藍の種子の油で糊状とし、前の如くに用ひる。

○第三 プラヨーガ

カインダ又は白稷と蓮花の纖維に蜜に混和して、前の如くに用ひる。

○第四 プラヨーガ



シシユの樹、皮樟腦及び精煉した水銀の等量を上の如くにして糊状としこれを臍(男の)に塗る。

○第五 プラヨーガ

白タール・マクハーナー(藥草)の種子をプシユヤ・ナクシヤトラ即ち第八の月の宿(十二月及び一月の一部に相當する)の日に採集し、これを腰の周りに赤い撚絲で結び付ければ望み通りの効果を得る。

○第六 プラヨーガ

サプタバルナ又は七葉の *Scholaris* を土曜日に招いでおき(祈禱と共に呼ぶのである)日曜日にこれを探り、口中に含めば、所期の効果がある。

○第七 プラヨーガ

白いアンヴァルリ(訶梨勒屬)の種子を、プシユヤ・ナクシヤトラのうちの日曜日に採集して、これを處女が綯つた絲にて腰の周圍に結べば、所期の効果が果がる。

○第八 プラヨーガ

榕樹の樹液に浸して粉末とした白タール・マクハーナーの種子を、カランヂの種子と混和し、これを口に含めば、望み通りの効果があがる。

○第一 ゴアーヂーカラナ

プフーヤ・コハリ(仙人掌科植物)の樹液を、陽に曝して乾し、これを精煉した酪、糖果、蜜と混和する。この處方は十人分の精力を與へ、十人の婦女を征服することを得させる。

○第二 ゴアーヂーカラナ

アンヴァリ(滋味ある堅果)の樹皮を煎じて汁液を萃り、陽に曝して乾し、同じ木の粉末と混和して、精煉した酪、糖果、及び蜜と共に食する。その結果は驚くべき増進を見、老人も壯者を凌ぐに至る。

○第三 ゴアーヂーカミナ (略す)



○第四 ヴァーデーカラナ

ウリツド（有名なムングと云ふ豆類）の粒を牛乳と砂糖とに浸し、三日間陽に曝らす。これを粉に碎き捏ね上げて丸め、精煉した酪で揚げ、毎朝服用する。服用者は假令年をとつて弱つてゐても、絶大な精力を得、  
を享受することが出来る。

○第五 ヴァーデーカラナ

モー樹（この樹の花より有名な酒精飲料を採る）の内樹皮ナマーシヤー（百五十グレイン）を臼にて碾き、これに牝牛の乳をかけて喰ひ且つ飲む。効力は上に述べたところと同じである。（以下、六、七、八略す）

▽「匂へる園」第十三章

この章中に、増進法として、乳香樹の果實を搗き碎き、泡を除いた蜂蜜と植物性油で伸ばし、飲食を絶つて吞めとある。

就寝前に濃い蜜一杯、二十箇の巴旦杏、百粒の松の實を服用せよ。之を三日間続けよ。

又玉葱の實を搗き碎き、篩ひ、揺り動かし乍ら蜜を混じ、絶食して服用せよ。とある。

▽「老人若返法」自第十四章至第二十章

第十四章 精力を増し を強める摩擦についての一節

六、七種の處方あり、五六十種の藥品を擧げてゐる。其成分の或物はカキリ（蘭の根の一種）「印度木」シリアア林檎「シリアるりぢさ」等——詩人ロバート、ブラウニングの「アラビヤの醫師カーシッ」の不思議なる見聞」に現れるかの「アレツボ種」のものか——其他皆變つた物ばかりである。

第十五章 精力増進の練藥の一節

此の章は、及び を増進する砂糖菓子とそれと加へる藥味に關して述べてゐる。更にこゝでは胡桃を煮て喰べると同様の卓効ある事を云つてゐる。

「此の砂糖漬は素晴らしい作用を有し、上記の目的に有益なものである——神のお助けを以て。おゝ神よ榮光あれ！」と記されてゐる。



第十六章 精力増進の散薬中の一節

交接力増進の散薬に就いて記してゐる。これは葡萄酒で嚥下する。葡萄酒はコーランには明らかに禁ぜられてゐるから面白い。

「煮沸した鶏卵十個をとり、殻を破つて卵黄を取り出す。別に牝牛の牛乳を鍋に入れ、其の中へ「たがらし」の種子を振り掛け煮立てる。そして此の牛乳へ前の卵黄を入れ、牝牛の脂と混ぜ合せ、粉末になる迄放置する。そしてそれだけを食つてゐる。」

鳥獸の卵も仲々重要である。

「黄色の鹽の鹽漬にし、乾され、碎かれた物は大きい 誘起する。」

又牝牛の陰莖粉も同様の効果があるが、これは、牛乳、又は葡萄酒で嚥み下す。

第十七章 の注入薬

注射に先つて灌腸に依つて腸を洗つて置かねばならぬ。用ひられる物は「かみつれ」(菊科植物) 亞麻仁、明礬、胡蘆巴(豆科植物) テレピン、薊、無花果等である。腰部を肥ら

す物には胡桃油、牝牛乳、ペラドンナ、生薑、アスパラガスの種子其他の成分である。

此等の注射は七晩連続的に用ひるものである。

第十八章

ならしむるための坐薬

エスカンコーの腎臓の脂を胡麻の油に浸し、亞麻仁「かみつれ」、生薑と混じた物が坐薬として推稱される。

第十九章 種々なる練薬について

モカイドの處方に曰く、「かみつれ、胡椒、生薑の各一オカと、煮た黄卵二十個を取り、耶子蜜百二十ドラクムと混和する。此れを食前、食後に内服する。」と。

第二十章

を増し、男性を強壯ならしむる香料

こゝで香料といふのは焚く香でなく、口中に入れる錠劑の事である。シエイク・アブデユラズイズが最初の處方を殘してゐる。それに依れば埃及の王が之を用ひた。テレピン油に浸した檳如樹オキシリの皮を或る牡の動物の胸の部分等を含んだもので、水盤の中で煮られると



ゴムの様な物質になる。口中に入れて嚙んで居り、唾は飲み下すが、薬は嚙んではならぬ。  
▽「エル・クターブ」第五章の一部に

「コーラン」第二十六章、第八十三節にも、

「汝麝香の香を籠めし、うまし酒を女に與へ吞ましめよ」と出て居る。

著者は更に麝香の効能を上げ、最上のもものは Khorasan のもの、其の次は支那、印度のものがいゝと云つて居る。

麝香に純粹な没薬を加へて、熱せられた石炭の上に置く時は、  
が出て來るとも書いて居る。 に當つて非常な勢力

乳香の細粉 一・五〇瓦

麝香の細粉 〇・五〇瓦

没薬の細粉 二・五〇瓦

樟腦の細粉 〇・五〇瓦

枝端に咲くサリエツトの花房 二・五〇瓦

タイムの花房 一・五〇瓦

右を五百瓦の薔薇水に混ぜる。これを罫の中へ密封し、四十日間太陽に曝す。それから  
搾つて上澄みの液を取り、更に濾過して、同じ罫の中に貯へる。

此の秘液を長く貯へる爲には、七十五瓦のアルコール（精製した）を加へ、更にバグダ  
ツドの薔薇の精三滴を注入せよ。

この香は神経、心臓、性慾を強壯にする。そして記憶力を非凡ならしめる。此の香を衣  
服に用ゐれば心地よき芳香を放ち、虫害を防ぎ、悪魔等の悪影響をまぬがれる。

部屋の中で焚く香は

前の材料を等量に混ぜて、少量の薔薇水及びアルコールの中へ入れ、よく混り合つた粉  
を作り、これに普通分量六分の一のアラビヤ・ゴムを加へ、皿の中で前後左右に揺すつて



混合する。それから榛の實程の丸薬を作る。

豌豆大の香を部屋の中央、北、南の三ヶ所で焚く。これは男女が此の室へ這入る二十五分間前に焚かねばならぬ。そして男性の方が虚弱であつたら、香の二倍量を焚け。

アルビーは例のコーラン萬能主義を發揮して、言葉の魔術に言及して居る。いゝ言葉の暗示を與へられると、身體上にまでいゝ影響を及ぼすと説く。が此の章は大して秘薬には關係ないから飛ばす。(飛ばすと云つても此處は一頁許りだから大した事はない)

此の著者は當時(十九世紀中葉)トルコに於ける有名な醫者だから、精力減退に對する實際的忠告も書いて居る。

先づ、冷水浴だ。これは全身浴及び局所浴つまり非常に冷たい水を男の性器に注ぐ。

三十分に行ふ。或は朝夕勵行すれば精力を得る。それから、此の方法で頑強な淋疾も癒ると云つて居る。

次には所謂食膳春薬である。此の食料による強精法と云ふのは、藥品なんかによるより

も一番自然的なやり方だ。アルビーは色々の材料を擧げて居る。卵、魚類、松露、扁豆、羊肉、蒔蘿(植物)、茴香、牛の罌丸、鶏、椎茸等々である。

然し「コーラン」にもある通り、第一には自分の腹の具合を整へて健康を保たねばならぬ。「コーラン」第七章、第二十九節。

「食へ、呑め、適當に」

次に出した處方は少しも危険なくて甚だ効果あるものであるさうな。

ストーシヤスの枝端の花房 一五瓦

桃金娘の漿果 二五

茴香 二〇瓦

野生人參(よく還元された) 二〇瓦

サフランの花 一〇瓦

よく乾いて、ひどく割れた海藻 三〇



卵の黄味

四

清麗な泉の水

五五〇瓦

右を陶器の皿に入れて、火にかけ、二十五分間嚴封して置く。次に火から降し、汁を搾り去つて、中味がやゝ冷へてから、

純粹な蜜

五〇瓦

鳩の生血

二滴

を加へ、よく混合する。一晝夜よく浸して置いて、三四度揺り動かし、普通の籠にかけ、て漉す。

斯うして出来た練藥を七日間、コーヒの匙で一二杯宛、寝る前に七日間續けて服用せよ。何んと此の出来さうに思へる秘藥を試みる有志者はありませんか？

▽「杏花天」の一節に

○第二回封悦遇師求力。萬衲子秘授房術。

「悦生が萬衲子から久戰三子丹と云ふ秘藥を授かる。我今汝に授く。凡そ丸を吞下し、

その處方

鬼絲子、蛇床子、五味子、各一兩共に末となし、酒を以て豌豆大となし、用ゐる。

▽「蘭房秘訣探戰春方」の一節に

○早苗喜雨膏

杏仁。丁香。草麻子。白礬非止以上各二錢

右爲細末用蠟酥並煉蜜爲膏調付

女人如早得

矣。

○飛燃喜春散

丁香 香附子 石灰末 胡椒 烏魚骨 鹿茸 金毛狗脊各五錢 蛇床子 紫稍花 鬼絲子各錢 麝香三分

右爲細末煉蜜爲丸如梧桐子大每服一丸津化塗

雨情成心勤

喜不勝



二美相並也。

○安祿山徹夜恣情散

膽酥二錢。胡椒二錢。乾柱三分。射香三分

右爲細末以二三厘用唾津子前午後調塗

洗法一夜不泄久久藥自散不必解。

○太平公主萬聲嬌

遠志去心二錢。蛇床子一錢。五倍子一錢

右爲細末以二三厘津調粒末玉莖肚陽久戰雙美曜仙秘藥方歌曰。

七粒丁香八粒椒細辛龍骨海漂硝枯礬少許蜂蜜合十八橋娘閃斷腰。

右爲末煉蜜爲丸梧桐子大行事納一丸入。

○薛敖曹進武則

留粉一錢二分。蛇床子一錢。白礬一錢五分。紫稍花一錢。木香五錢。川椒五分。吳茱萸一錢。

○楊妃小浴盆

官桂、木別子各一錢。白礬七分

右用水五碗煎三碗男女

不盡述。

▼「黃素妙論」の一節に

○壯腎丹 (男の衰へたる腎を補ひ氣分を増し

一、丁香一錢。一、附子一錢。一、良薑一錢。一、桂皮一錢。一、由菜萸一錢。一、蛤蚧一錢。一

礬石七分。一、水飛七分。一、硫黃七分。

右八藥細末にして蜜にて練り、むくろじ程に丸め空腹の時に三粒づゝ温酒にて飲むべし

但無妻の男子は卒爾に飲むべからず。

○寸陰法 (女人の心底を喜ばしめ、その男を永く忘れざらしむ)

一、蛇床子十二粒。一、狗骨灰三粒。一、肉桂三粒。

右三藥細末にして

にてねり、

浅深の法を行ふ時は女の男を思



ふ事浅からず誠に千萬無量なり。

○綠鶯膏 (心の深き女用ふべし)

一、丁香<sup>三</sup>。一、山椒<sup>四</sup>。細辛。龍骨。海螵蛸。明礬。各少量。

右六種各細末にして生蜜にて捏ねて行ふ時は、

て無限。深く慎しむ女も不覺聲を出して

○如意方

一、石榴皮。一、木香。一、山藥。一、蛇床子。一、吳茱萸。

右等分細末にして

べし。老女たりとも誠に壯女の

▽「修真演義」の一節に

○始皇童女丹

一、石榴皮。一、青木香。一、茱萸。一、蛇床子 各等分。

を現すなり。

暖かにして

出し

てねり にトロリと

深淺の方を行ふ

如くなるべし。

右爲細末用津調入陰戸勝如童女。

○金屋得春丹 (金屋得春湯として枕文庫にあり)

一、石榴皮。一、菊花。各等分。

右爲細末一碗煎七分温洗<sup>二</sup> 狀如童女真得一刻千金之美也。

▽「男女懷中體用集」の一節に

○ 藥の方

大きな蛤を灰のいろぬ様に焼きて身をしぼりて彼の汗を又貝がらに入れ焼き灰の上に置きこげぬ様に自然に貝殻へひつかせて、こそげ落して其中へ丁子の粉を耳かきに半分入れに少しつけて法の如く

○阿蘭陀人の傳授奇妙女悦丸

一、じゃしゃうし。一、くこつ<sup>三</sup>の灰。一、肉桂。

右三色おのゝ等分粉にして

ば女その



男を一生忘れず喜ぶ故に此薬名を「萬年思悦丹」と云ふ。

▽「閨中必用の奇薬調製法秘傳」

○（薬名なし）

一、蛇床子。一、肉桂。一、狗骨。各等分

右三味粉にして玉莖にぬりとぼす時は

となし。

其男を慕ひ一生忘るゝこと

○（薬名なし）

菊黄の花を火にてあぶりよくたゞき、そのしぼり汁を

こと奇妙なり。

常にすぐれて

○（薬名なし）

しきみの葉をとりよき酒にひたし土に埋め置く事五日程、さて取出しその

ことたとへがたし。又しきみの葉を焼きてその灰に焼明礬を少し入れつゝ

妙也。

○（薬名なし）

女の乳汁をしぼり古井戸の水垢をませ合せ

くぶつくとふくれ、

なること本味の

いぼの如

如何程つゝしみのよき女なりとも前後を忘れ取亂して泣きよがる事奇

▽「逸題」

○長崎唐人秘傳

一、しやうさん。一、ぶし。一、りうこつ。一、さいしん。一、いかの甲。一、明礬。

一、山しやう三粒。

此七色を粉にして水にてこね、かの時少し

▽「艶道日夜女實記」の一節に



○女悦きめう丸

一、にんじん。一、りうこつ。一、いかのころ。一、ぶし。一、さいしん。一、さんせう。一、こしつ。一、みやうばん。一、じゃころ。一、てうじ。一、につけい。一、せきりうひ。

右十二いろをとろぶんにして水にとかし、又もちのりを少しませ合せ、むくろじほどにくわんじて  
るべし云々。

▽「秘歌國字解」の一節に

○石 錘

大鵬の遺精也。粟粒許を含む時は  
べしとぞ。

▽「枕文庫」の一節に

○紅毛長命丸之製法

一、丁子。一、阿片。一、蟻酥。一、紫梢花各二錢。一、龍腦。一、麝香各五分。

右七味細末にして練り、  
ぶばかり前に  
り洗ひ落して、

▽「教  
調女才學繪抄」の一節に

○喜命丸

一、にんじん。一、ぶし。一、りうこつ。一、いかの甲。一、さいしん。一、めうばん。一、じゃころ。一、こしつ。一、てうじ。一、さんせう。一、肉桂。一、せきりうひ。

右十三味を各々等分に合せ粉にして蜜に糊をませ練り合せむくろじの大きさに丸し  
べし云々。

▽「花  
救天のうきはし」の一部に

(一) 石榴皮。菊花。等分

右二味細に刻み水五合入れ薬分目に煎じ  
十四五の處女の如く狭り温り有て

其味はひ言語にはのべがたし。

(二) 奇法煉丸輪の玉薬



一、母丁香七分。一、龍骨四分。一、燒明礬。一、細辛一分。一、麝香三分。一、海狗油四分。  
一、樟腦三分。一、山椒五分。

右八味極細末にして蜜にて丸して一粒宛に  
▽「好色秘術集」の一節に

○婦人感情の秘法

五味子。遠志。蛇床子。各等分。  
細末にして唾に和して

○太眞喜悅丸

蟾酥。阿片。丁香。各等分。

右三味を細末となし蜜にて煉交へ適當の大きさに丸め置き此れを唾にてときし云々。

昔の増進薬は此程度に止めて、扱て現代人は、如何なる薬品を使用しつゝあるかを一瞥

して見やう。

普通民間では、  
を助長せしめるものに、仁丹。メンソレタム。メント

水。毛髪一本。(薬品に非ざれども)及び里芋をねり紙に塗りて干し、その小片を

れ等して喜んでゐる状態である。筆者の経験に依れば、ほうづき(海のものに非ず)の赤

い實をつぶし、その汁をたくはへ、  
に塗布するか、(但し此場合、

共洗滌を要す)乃至は、サイダー・ラムネの類を五グラム程注入すれば、前述の諸薬に比較して卓効あると思はれる場合が多かつた。性病豫防薬としてのシクロヤセモリやサーナ1等も、多少の刺激性を含有してゐるので幾らか効果のあることは無論だが、豫防薬としては怪しいものだ。

一體、薬物乃至は、それに代るべきものを用ひて、相手をより満足せしめやうとするのは男子として卑怯な方法ではあるまいか。吾々は、薬品その他を用ふることに骨を折る前に、實際の  
に、即ち  
に通曉すべきだと思ふ。この  
に自信あれば、如何



なる場合でも、素手にて相手を、得るからである。想ふに亦、これが最も技巧的色彩に富み、従つて無害だと云ひ得る。が、後者は、ともすると副作用が伴ひがちであるこれ即ち不自然な技巧の然らしめる結果であらう。

(四) 増大、に關する秘藥

(A) 男根増大法

▽「アナンガ・ランガ」第六章の一部に、

○第一 プラヨーガ

チカナ (*Hedysarum lagotoides*) と、レチーと、コシユト (*Costus Speciosus* 又は *Costus Arabicus*) と、ヴェクハンド (香ひしようぶの根) と、ガヂヤビム・バリー (*Physalis officinalis*) と、棒狀アスクハンド (*Physalis Hexуса*) と、カンヘルの根との等量を搗き碎き、酪を入れて煉り、錠附すれば、ニグハリ (四十八秒) の後には、それは馬のやうな大きさを呈する。

○第二 プラヨーガ

ラクタ・ボル (没藥) を粉末にしたものと、マナシル (砒素の赤硫化物) と、コシユト (*Costus Aradicus*) と、大茴香の實と、礪砂との等量を、胡麻油 (*Sesamum Orientale*) にて煉り、これをこめば、所期の激情昂進を見る。

○第三 プラヨーガ

サインドハヴァ (岩鹽) と、胡椒と、ガダ (*Castus*) と、リンガムの根 (茄子屬) と、アグ・ハーラーの葯莖 (*Achyranthes : spers*) と、アスクハンド (*Physalis Flexuosa*) と、大麥と、ウリツド (*Phaselus Mungo*) と、ビツバリと、白シラス (芥子の一種) と、テイル (*Tringile* 又は胡麻) との等量を搗き混ぜ、これを蜜と共に煉つて耳の外端へ塗附する。この藥劑を用ひれば甚しい。又若しこれを婦女に行へば、せしめる。

○第四 プラヨーガ

ビブツアー (一種の堅果。 *Semicarpus Anar Cadium*) と、黒鹽と、蓮の葉とを灰にし、



これをシンピー(Solanum Jaquinii)の汁液に浸して、マヒシ即ち水牛(牝)の分泌物と共にリンガに塗れば、それは直に米を搗く杵の如くに...となる。これが最も效能ある處方と考へられてゐるものである。

○第五 プラヨーガ

ロブラの樹皮(Symplocos Racemosa? Morinda Citrifolia?)と、ヒラーカス(酸化鐵綠)と、ガヂヤビシビリー(Pothos officinalis)と、チカナ(Helysarum Lago Padioides)とを、テイル又は胡麻油と混和して...に塗附すれば、...する。これを婦女に行へ...せしめる。

○第六 プラヨーガ

ドルリーの實(Solanum Macrorrhizon)と、ビブヴァと、石榴(實)の皮とを、苦味油(芥子油 Sinapis dichotoma 主として燃料に用ふ)に混和し、...すれば、それは甚だしく増大する。

○短小なる

する方法に就いて

の大きさを取扱つたこの章は、男子に取つても、亦女子に取つても重要なものである。男子に取つては、...は彼等に女子の戀愛の情を獲得させ、女子に取つては、事實...に據つてこそ、彼女達は烈しい情慾を静め、最大の快樂を求められる

のではあるまいか。この事實に就いては、男子が單に短小な圓柱を持つてゐると云ふ理由に據つて、...關する限り、女子の嫌惡の對象となることから證據立てられる。女子は

また...弱く、弛んだ男子に對しても同様の感情を持つ。女子の幸福は、

の使用のうちにあるのである。

を持ち、これを...爲めに大きくし、強くしようと思ふ者は、

微温湯をもつて...赤くなり、また増進する熱の爲に血液が集まり、充分に膨大するまでこれを...しなければならぬ。次いで、活潑に...乍ら、蜂蜜と熟した生姜とを塗れ。斯くして初めて女に近づくが宜い。斯くすれば著しく...せられ、女子は男子



の下りるのを好まないまでに至るであらう。

第二の薬品は、胡椒と、ラヴンド（唇形科植物の一）とガランガと、麝香とを適量に求め、粉末とし、籬に掛け、次に蜜蜂と、熟した生姜とを混ぜて作られる。先、微温湯を以て摩擦し、次に激しくこの調合劑で摩擦せよ。斯くすれば、肉づいて、

は女子に 驚くべき 二を與へるであらう。

第三の薬品は、微温湯を以て まで摩擦することにある。次に薄い、しなやかな獸皮を取り、これに熱い松脂まつたを伸ばし、これを以て を包め。その作用を受けて、圓柱は熱情に顛へる げらるであらう。松脂まつたの冷たくなるまで、また が休息に還るまで獸皮を残して置け。これを實行して屢々繰り返す時は、圓

、なるであらう。

第四の薬品は、水中に生摻する水蛭を充分に使用することにある。（原文の儘。）一つの壘に一杯にこれを入れ、またこれを植物性油で満す。次に、太陽に曝し、その熱を受けて、

完全な調合物の出来る様にする。次にその壘中の油を採り、數日間續けて、これで摩擦する。かく繰り返して實行すれば、 長さ太さを増すであらう。

なほ他の方法として、驢馬の 使用を記さう。先づ驢馬の圓柱を求め。これに玉葱を加へこの調合物を大量の麥と共に煮る。これを以て牝鶏を飼ひ、この牝鶏を次に食用とせよ。或はまだ驢馬の圓柱の上に油を浸し、次にこれを飲み、また 塗れ。

或はまた、水蛭を油と共に搗き碎き、これを以て 摩擦し、或は、若しその方が宜いならばこれを壘に入れ、熱い寢蓐層の中に埋め、一つの塊となるまで置き、一種の塗抹膏とし、數回繰り返して圓柱に塗れ。直ちに 強力となるであらう。

なほまた、管珊瑚と、シヤグマユリと、靴屋の糊とを、松や蠟の樹脂に混ぜ、これを以て 摩擦する。これは 大きさを増大する結果を齎すであらう。（註、一、二、三）以上の薬品は總て有名なものであり、私はその實驗を試みた。

▽「玉房秘訣」の一節に



○欲令鬼子陰大方

蜀椒。細辛。肉從容。

凡四味分等治下飾。以內<sup>イ</sup>狗膽中<sup>ニ</sup>懸<sup>レ</sup>所<sup>ノ</sup>居屋上<sup>ニ</sup>卅日。以磨<sup>ル</sup>。三寸。

▽「洞玄子」の一節に

○長陰方

肉從容<sup>三</sup>。海蓬<sup>二</sup>。

石搗篩爲末。以和<sup>ニ</sup>正月白犬肝汁。塗<sup>ス</sup>。三度。平旦新汲水洗却。卽長<sup>三</sup>三寸<sup>ニ</sup>極驗。

▽「黃素妙論」の一節に

○西馬丹

一、沈香<sup>五</sup>。一、乳香<sup>五</sup>。一、沒藥<sup>五</sup>。一、木香<sup>五</sup>。一、兔絲子<sup>五</sup>。一、茜香<sup>一</sup>。一

破故帛<sup>二</sup>。一、桃仁<sup>皮を去る</sup>四十。

右八藥を各細末にし練りたる蜜にてこね胡桃程に丸くし、空腹に一粒宛温酒にて用ふ。

一ヶ月に及ばば

長く成りて一段と強くなるなり。

▽「男女禮開節用集」の一節に

一、ちんかう。一、にうかう。一、もつやく。一、もつかう。一、とし<sup>一</sup>（各々五分づ

し）一、はこし<sup>七</sup>。一、うる香<sup>一</sup>。一、とうにん<sup>十</sup>。

右八色粉にして水にてこね、くるみの大きさに丸じあため酒にて一粒づゝ毎朝用ゆ。

一月に及びて

強くなること妙なり。

▽「懷中要辭」中の一節に

○（藥名なし）

乳の徳ある事陰をおきなひ、陽をまし、氣血をめぐみて腎を濕ほすの妙最も廣大なり。

毎日これをば茶碗に半分づゝ食後しばらくして服すときは目を明にし、氣根元氣をやしな

ひ、無病長壽ならしむ。さきものも次第に太く筋くれだち、勢ひあたかも龍の如く五

十の上を越ゆるとも壯年血氣の人にまさりて云々。



▼「艶道日夜女實記」の一節に

一、ちんかう。一、にうかう。一、もつやく。一、もつこう。一、としし。右各五分。  
一、うゐきやう一か。一、はこしせき。一、たうにん<sup>四十</sup>。

▼「春の若草」の一節に

(イ) 蜂房<sup>はちま</sup>を刻み、酒にひたしてあぶり使ふ事醫書にしるせり。戯れにあらず。蜂を黒  
饅<sup>まんぼ</sup>にして車前<sup>せんぜん</sup>艸をすりて汁をしぼり和して  
...なり。  
年老なへたるもの忽ち陽氣發して

(ロ) 小き男根を太くする法は、八月の中旬ごろ蜂をとりて生絹の袋に入れ蔭干にし  
て二百日ありて半分にして土器に入れ白<sup>しろ</sup>焚<sup>やき</sup>にし温酒にて吞べし。半分は唾にてとき  
ぬるべし。四十日過ぐれば其の驗し現はれ日ごろに  
くなり勢さかなり。是れ秘  
中の奇方なり。人々つゝしんで製し用ひ給へかし。

▼「賞娛教繪抄」の一節に

一、蛇床子。一、ごみし。一、じやこう。少々。  
右三味一ト廻りの間、朝、さ湯にて吞むべし。

要するに、局部的に血行の循環をよくすることに注意せば、

するは理の當

然であらう。毎朝冷水摩擦を行ふ時、特に  
ぬれ手拭にてよく摩擦することに心掛  
けるのが最も良き効果を齎すと云ふことである。

(B) 縮小法

▼「アナンガ・ランガ」第六章の一部に

○處方 第一

蓮の莖と花とを牛乳と共に搗き混ぜ、これを捏ねて小さな丸薬に作り、  
ゝば、五十の婦女と雖も處女の如くなる。



○處方 第二

ヒマラヤ杉 (*Pinus deodaru*) の樹皮の少量に、鬱金と、ダール・ハラツド (我求) と、蓮花の纖維 (花粉?) とを搗き混ぜて、これを内部に塗用すれば、筋肉組織を大いに收縮せしめる。

○處方 第三

タル・マクハーナーの種子を搗き碎いて、同じ種子の汁液と混和し、これに塗布する。その結果は即刻、硬化となつて現はれる。

○處方 第四

トリフアラ (前に記した三つの阿梨勒屬) と、ドハーヴァーテイの花 (*Grislea tomentosa*) と、チャームプフリー (ひめふともいの木) の内實と、サーンヴァリー樹 (*Bombax heptaphyllum*) との等量を蜜と共に搗き混ぜ、これを  
用ふれば、その未婚の婦女の如くなる。

○處方 第五

カル・フホンバリー (南瓜の一種) *Cucurbita lagenaria* の種子を、ロドフラ樹 (*Symplocos racemosa*?) *Morinda cilifolia* の樹皮とを搗き混ぜ、これを  
分挽後に感じられるうづろは直ちに補充される。  
用ふれば

○處方 第六

アスクハンドの嫩核と、チカナーと、オンヴァー (又はアチヴィニ。蒔蘿又はわたくわかうの一種) と、我求と、青蓮と、ガダ (*Cotus*) と、ヴァーラー乃至クハスクハス (もろこしがやの一種、その根で蓆を造る。 *andropogon muricata*) とを各々等量づゝ混和し水を加へて搗き碎き、これを毎日内部に用ふれば、思ひ通りの收縮を見る。

○處方 第七

モー樹 (*Bassia latifolia*) の樹皮を煮つめて作つた鹽を蜜と混和して、毎日坐薬として用ひ、  
達せしめれば、皮皴と同様の効果がある。



▽「玉房指要」の一節に

○令<sub>三</sub>女 小<sub>二</sub>方

硫黄<sub>四分</sub>。遠志<sub>二分</sub>。

爲<sub>レ</sub>散。絹裏盛著<sub>ニ</sub> 中即急。

○又 方

硫黄<sub>二分</sub>。蒲華<sub>二分</sub>。

爲<sub>レ</sub>散。三指撮著<sub>ニ</sub> 升湯中<sub>二</sub>洗<sub>ニ</sub> 一廿日如<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>嫁之<sub>レ</sub>儘。

▽「女令川」の一節に

一、うりう<sub>四分</sub>。一、にんじん<sub>三分</sub>。

是<sub>二</sub>色を粉にしてす<sub>レ</sub>しの袋に入て

▽「文のまこと」の一節に

一、 大きなるものまなみくの ことばすとも事足らずして女よろこば

必らずせばくなるものなり。

ず、其の廣き 山青竹を破り、中にうすき紙のごときものあるをとりてよく口にてか

み、そのつばを 行はば（筆者の経験に依れば、竹紙の儘入れたり。効果顯著。）

忽ち ことくなること妙也。

▽「枕文庫」の一節に

○金屋得春湯（洗滌劑）

一、石榴皮。一、菊花。各等分。

右細末水一杯を七分めに煎じ

の如し。

▽「實娛教繪抄」の一節に

○行はんとする時、黄菊の汁を

まくなること奇

々妙々なり。

▽「匂へる園」第十八章中の一節に

○ ようとするのが目的ならば、女子は明礬を水に溶き、これに收斂性特効を



有する胡桃樹の樹皮の煎劑を適當に混ぜた溶液で、  
すれば足りる。

實驗の結果、明礬水の微温湯で洗滌するのが最も良効である。又極少量のストリキニーネ（ストリキニーネ〇〇一。過マンガンサンカリウム〇〇一、水一〇〇グラム）にて洗滌するもよい。

（五）陰萎の治療に関する秘藥

▽「醫心方」第廿八卷房內篇の一節に

○「千金方」に曰く

治痿而不<sub>レ</sub>起。起而不大。大而不長。長而不熱。熱而不<sub>レ</sub>堅。堅而不<sub>レ</sub>久。久而無精。精薄而冷<sub>レ</sub>方。

從容。鐘乳。蛇床。遠志。續斷。薯蕷。鹿茸。

右七味各三兩。酒服方寸匕。日一。欲<sub>レ</sub>多房。倍<sub>レ</sub>蛇床。欲<sub>レ</sub>堅倍<sub>レ</sub>遠志。欲<sub>レ</sub>大倍<sub>レ</sub>鹿茸。欲

多精倍<sub>レ</sub>鐘乳。（廿九日三服）

▽「玉房秘訣」の一節に

治<sub>レ</sub>男子陰萎。而不強。就<sub>レ</sub>事如<sub>レ</sub>無情。此陽氣少腎源微也。方用。

縱容五味（各二分）。蛇床子。菟糸子。枳實（各四分）。

右五物搗篩。酒服方寸匕。日三。蜀郡府君年七十以上復有<sub>レ</sub>子。

○又方

雄蛾未<sub>レ</sub>連者干<sub>レ</sub>之三分細辛蛇床子三分搗篩。雀卵和如<sub>レ</sub>梧子<sub>レ</sub>臨<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>一枚。若強不止以<sub>レ</sub>水洗<sub>レ</sub>之。

▽「玉房指要」の一節

治<sub>レ</sub>男子<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>健作<sub>レ</sub>房室<sub>レ</sub>一夜十餘不<sub>レ</sub>息方。蛇床。遠至。續斷。縱容。右四物分等爲<sub>レ</sub>散。日三服<sub>レ</sub>方寸匕。

▽「洞文子」の一節



秃鷄散。治男子五勞七傷陰痿不起爲尸不能。蜀郡大守呂敬大年七十服藥得生三男長服之。夫人患多。疼不能坐臥。即藥乘連中。雄鷄食之。即起上雌鷄其背。連日不下。喙其頭冠。冠秃。世呼爲秃鷄散。亦名秃鷄丸方。

完縱容三分。五味子三分。菟糸子三分。遠志三分。蛇床子四分。

凡五物搗篩爲散。每日空腹酒下方寸七。日再。三無敵不可服。六十日可御冊婦。又以白蜜和丸如梧子。服五丸日再以知爲度。(今案千金方有八味。蛇床子三分菟糸子二分。縱容三分。遠志二分。五味子二分。防風二分。巴戟天二分。杜仲一分)

○又云

鹿角散。治男子五勞七傷陰痿。卒就婦人。不成中道痿死。精自引出小便余瀝。腰背疼冷上方。

鹿角。栢子人。菟糸子。蛇床子。車前子。遠至。五味子。縱容(各四分)

右搗篩爲散。每食後服五分匕日三。不知更加方寸匕。

▽「色道禁秘抄」の一節に

秃筆頭を灰とし酒を以て空心一二錢を服す須くあつて起る事を得たりと。愚按に秃筆頭は敗筆也。訓曰男子交婚治。時珍曰不用新筆可用敗筆。取其膠筆墨沾滋。又曰上古以兔毛作筆後世以羊鼠毛作筆惟兔不可藥用宜心得。

▽「懷中要辭」の一節に

○るぞ松前の海に臘臍臍といふものあり

雄一疋にて雌九疋をひきて。なす。その性のつよき事無双也。もつとも得難きものなれども是を服し用ふるときは男女腎精を潤ほしていかほどとぼすとも虚することなく長生不老の良劑也。故に腎虚に用ひて即効あり。

○  
現代では獨逸の新藥「ユベニン」の服用乃至は注射が最も効果あるやうである。尤も此れは筆者の経験に依るのみで、萬人向きとまで行かないかも知れぬが……。



この「ユベニン」について、吾が賀川博士は左の如き實驗報告をしてゐる。

●ヒンピンは腰髓の勃起中樞を興奮させ膝蓋髓反射中樞の如く同じく腰髓にある中樞を興奮させないで右の作用を現はし同時に血管殊に

作用があるから兩々相俟

つて陰萎に對して治療的效果があることは古來周知の事實である。又ストリヒニンは少量を用ふれば反射傳達路を興奮させ運動反射のみならず、感覺領も亦本劑の作用を被るのであるから陰萎の原因が陰部神經機能殊に反射機の衰弱に存する場合には必ず効を奏するものと考へられる。因て余は是等の兩成分を成るべく濃厚に神經の中樞に作用させたならば皮下注射のやうに血液の媒介に因つて中樞に達する場合よりも一層著明な効果を收めることが出来るだらうとの想像に基いて、カテラン氏法即ち硬膜外注射としてユベニンを用ひて見たのである。カテラン氏法とは薦骨管裂孔から注射針を薦骨管内即ち脊髓硬膜外腔に刺入して此處に藥液を注入するので夜尿症や陰萎の治療、  
肛門領域の麻酔などの目的を以て屢々行はれる技術である。

余の試みた方法は○・五%の割合にノヴォカインを溶解した生理的食鹽水一〇・〇錢中にユベニン一筒を混和したものを一回注射量として用ひたのであるが今までの經驗では十數回(隔日一回宛注射)反復注射しても不快の反應や副作用は起ることなく其効果は極めて顯著であつた。或一例は此方法を二回行つた爲に

困ると言つたほどで

ある。併し余の實驗例は未だ多數ではないから必ずしも常にこんな好結果が收められるといふ事を斷言し得ない。併しユベニンの皮下注射や従來行はれて居るノヴォカイン食鹽水のカテラン氏注射などより一層著明な効果があることは余の確に信ずるところである。

余は尙ほ多數の經驗を爲した上で症例を詳細に記載し報告しやうと思つて居るけれども余の現在勤務して居るやうな小病院では報告し得るだけの症例を集めるのに多大の時日がかゝることであるから、余は今豫報の意味で之を記載し全國の實地家諸君が此方法を試み其眞價を決定されんことを希望するのである。(テラピー第一年大正十三年十一月十日發行所載)



(六) 保留の秘薬

六六

▽「黄素妙論」の一節に

○玉瑣丹

一、龍骨一分。一、訶子イリチカハナチヤカ炮去皮三分。一、縮紗二分。一、辰砂五分。

右四種各細末にして餅の糊にて小豆程に丸くし、

七粒温酒にて服すれば女人

三人五人に

さる也。

▽「男女懷玉禮開節用集」の一節に

○止淫丹

一、りうこつ四分。一、かし二分。一、しゆくし五分。一、ちやうじ二目。一、しんし二分

三人五人に

右五味を粉にして、もちのりにて小豆つぶ程にして

温め酒にて七粒用ゆ。女

といふ事なし。是れを號して止淫丹と云ふ。

○足納散

せんそ。

右一味を粉にして常に懷中し、

思ふ半時前に

拭きとるべ

し。

○臍薬

白銀粉かけ目一分。

右を飯つぶにて練り、たしなみ持つべし。

思ふ時は、臍に入れ、紙で塞ぎて

その上を帯にてしかとしめ行ふべし。

○同名方

一、蝸牛一名かたつむり なめくじり 一、たうごまの實。一、しやうぶの根。

右三色粉にして唾にてねり臍に入れ

▽「逸題」

○久しく

心の儘にする薬

六六



一、しゆく砂。一、丁子。一、りゆう骨。一、しん砂。一、訶子。  
右五色を粉にし、餅のりにてほどよく丸し、あたため酒にて呑むべし。

▽「婦美のはやし」の一節に

○ひましを臍に一杯入れ上を紙にて張りおきなるほどとれぬ様に、のりにてはりてよし。

○蝸牛(死したるもの)一、たうごまの實。一、菖蒲根

右三味粉にして睡にてねり交ぜ、丸じて  
ふべし。

○

こんな所で勸辨してほし。

一、女性觀識法

二、愛を受くる法

三、處女の信賴を得る法

四、媒介者なく男女相接近すべき法

五、他妻の信賴を得る法

六、

(第五部)  
戀愛術



(一) 女性観識法 「何へる圖」

人生の大半は戀愛であり、戀愛の大半は人生であると云へやう。人生にとって戀愛ほど懐しい存在はあるまい。

吾々は人生を愛するがために戀愛をし、戀愛をするがために人生が幸福なのである。

斯う云へば、諸君は、「戀愛至上主義者」だと云ふであらう。で私は答へる。「何とでも云ひ給へ」と。私は敢て「戀愛を得る秘術に就いてのみ述べれば、私の役目が果されるのだ」とここで云ふ所の戀愛術とは、

(イ) 互に愛し合ふに至るまでの過程を築く法

(ロ) 既に愛し合ふに至りて、如何にすれば、互の愛を益々強固なるものになし得るや。

(ハ) 戀愛を遊戯化し、彼女の凡ゆるものを奪ひとる法。

(ニ) 性愛の商品化(主として女子が男子に對する場合)。

等に就いての特別の方法や術策を巡らす學問である。



そこで先づ吾々は、男子の立場より、女子を知る法をきわめるのが、何より必要な第一条件だと思ふ。

この點についてアラビヤの奇書「匂へる園」にも、次の如き挿話を用ひてゐる。

會つてモアール・ベダと呼ぶ一女性が居た。彼女は其時代に於ては最も知識ある、そして最も賢明な女性だと云はれて居た。此女哲學者に向つて人々は様々なる質問を與へた。彼女の答の中から茲に若干を採録して見たい。

(女の魂は一體何處にありますか。)彼女はそれに答へた。

(股の間にありますよ。)

(享樂の場所は何處です。)

間に……。)

(男の愛と憎しみの場所は何處です。)

(總てあります。)

彼女はさう云つた上、附加へた。

(私達は愛する男に

へます、そして憎む男には

づけませぬ。私達は愛

する男とは財産を別ち又與へられるものがどんなに僅少であつても、それで満足します。よしんば其男が丸つきり、財産を持たなくとも、貧乏人であつても、私達は唯あるが儘の彼で充分満足が出来ます。其代りに嫌ひな男と來た日には假令どんなに私達に財産と富を與へて呉れやうと、私達は其男を嫌ひます。)

(女の知識、愛、富は何處にありますか。)

(目の中に、心臓の中に、そうして

聽手がそれに就て説明を求めた時に、彼女は答へるのであつた。

(女の敵は眼の中にあります。何故と云ふに形の美しさ、外から見る見榮とを判別するのは眼其ものだからです。此器管の中で愛は心の中に入込みます。愛が心を捉へるや愛が心の中に棲み、そして心を占領してしまふのです。女が愛情に燃え、其愛の對照を追駈け、



そうして、有ゆる毘をかけやうとします。そして彼女が其れに成功すると、愛するものと辨曳をします。好いか悪いかを味合ひ、又識別しやうとします。

實際　は其の好みで　とか悪いとかをはつきり區別出來得るからです。

(どんな　が女に好かれませうか？どんな女が最も　でせうか？　そうして

又どんな女が其　ひますか？　女から好かれる男はどんな男でせうか、又嫌はれる

男は？)

(女と云ふものは同じ恰好の　ばかり持つてやませぬ。戀の遂げ方も亦様々です。其

物を好むと否とに就ても同じなんです。男と亦、同じ様に、　の相違があり又好みも

違ひがあるでせう。肉付の好い豊富な女は即ち　ない所にある女は短くて太

い　を要求します。此種類の　は丁度具合よく　のですが、其處に達し

ませぬ。若し　かつたなら、彼女はそれに堪へる事が出來ないからです。

から遠さかつて其結果、　なつて居る女は、非常に長く、そして、太

しか好みませぬ。こんな　を滿すことが出來るから

です。況して短かく華奢な　居る男はこんな女には無慈悲な目に遭はされて

しまひます。　其女を満足させることは不可能だからです。一體女にはいろんな氣質

の者があります。例へば、膽汁質、神經質、多血質、粘液質、そうしてそれ等の折衷者と

云ふ風に。膽汁質及び神經質の女は、一時の　ない。彼等は自分達と同じやうな

性質を持つた男のみを求めやうとするからです。多血質並に粘液質の女は、一時の

耽け過ぎる傾向があると思ひます。そして其種の女が　にすることが出來た時に

は、其　何時迄も何時迄も　置かうと焦ります。従つて同じ多血質

の男でなければ逆も彼女を満足させることは出來ないでせう。そうして若し此種の女が膽

汁質や神經質の男と結婚したなら、彼等は御互に自分自身を不幸にしてしまふでせう。又

是等の諸性質の折衷した女は、進んで　ともせず、又別に嫌ひもしないでせう。

身體の小柄の女はどんな場合でも、大柄な女より　又リングに對してもより



目立つた愛着を持つものです。

でなくてはこんな女は絶対に満足しま

せぬ。彼女はそんなリングを得て初めて、生活及

愉悅を得る事が出来ます。

次に しか を行ふことを好まない女も居ます。そんな女は男が

とした時、彼女の上におつかぶさり、リングをヨニの中に押込め様とした時手で以つてそれ

を てしまふからです。又女の或る者は、腕力で殴つたり酷い目に遇せたり

しないと夫の言ふ通りに女を満足させない者が居ます。是等の態度は する嫌悪、

若くは夫に対する反感から生れたものだと言ふ人が居ます。併し此解釋は間違つて居やし

ませんでせうか？ 何故なら實際は此事は氣質及び性格の問題として考へなければならな

いからです。女の中には、 對して極めて冷淡な者も居ます。或は虚榮熱に浮かされ

てゐるものも居ませう。名譽に全身が傾いて居たり、野心だの、他人の俗事の心配等に囚

れてゐたり、又心身が純潔過ぎる爲だとか、或は嫉妬の爲、乃至は他の世界のことばかり

に浮身を賣して居る爲だとか、過去に嘗めた悲哀の爲だとか、 冷淡は總てこ

んな所に原因して居るのだと考へます。男にしても女にしてもこんなことに精神を没頭し

て居ては、 絶対に不可能です。だから 依つて女が得る快樂と

云ふものは唯 依るばかりでなく、彼女等の 依つて居る形にも依ると

思ひます。一體 ばつたものと、或は ものと呼ばれる種類のものがありま

す。其特徴は女が立上つて股ぐらを押付けると此ヨニは外にはみ出します。此種の

にかけては實に猛烈で、 ぶ人も居ます。所が此

つて居る女は、太い厚ぼつたい きなんです。而も少しだつて待つと云ふこと

が出来ない女です。

是は又女性一般の性質でもあると考へます。それから男の に対する嗜好に就ても、

それが多かれ少なかれ其氣質に關して居ると云ふ事が言ひ切れます。何故なら女の場合で

もさうですが、是は同じ五種類に分けられるからです。そうして是等の男女間の相違はリ

對する女の熱心さが 熱心さより、より大きいからです。



そこで聽手の男が（缺點のある女とは？）と尋ねた。すると女哲學者は答へた。

（一番悪いのは夫が生計の必要からホンの少しでも彼女の財産に手を付けやうとする大膽さを始める女達、それと同じに悪いのは夫が秘密にして置かうとすることを何でもぶちまけて喋り散らす女達です。）

（其他にありませぬか）と云はれて更に彼女は附加へた。

（妬もちの酷い女、大聲を出して夫の言葉を聞えなくしてしまふ性質の女、悪口家や、しかめ面の女、それから男達に自分の奇麗な所を見せやうと一生懸命になつて居て、何時も自分の家にゐない女等々、其他序でだから言つて置きますが、非常によく笑ふ女や、何時も自分の戸口に寄りかゝつて居る女を見たら、それは確に淫賣婦です。それからまだ悪いのがあります。他人の事に喙を容れる女や、一年中愚痴ばかりこぼして居る女や、又夫の財産を盗まうと狙つて居る女や、生れつき荒つほくて怒りっぽい女や、人に對して感謝と云ふ氣持を知らない女。

さうかと思ふと夫婦の

嫌ふ女。

ことが出来ない女。

偽りと策略と嫉みのみを常に考へて居る女。企てることは何一つ成功しないと云ふやうな女も困り者です。裏切られたり馬鹿にされたりばかりして居るのも同じです。自分に都合の好い時ばかりに夫婦

つとして夫を呼ぶ女や、

やかましい女、

厚顔無恥でお喋りをする女がいます。斯う云つた女達は女の中での屑だと思ひます。云々。

併し、大體に於て、これは、如何なる女が如何なる、

如何なる男が如何なる

る。ゐるかに就いて説かれたもので、女性全體を知るホンの一部分にすぎないと考へる。先づ吾々が、女を自分の術中のものにしやうと欲するなら、相手の女が如何なる種類に屬する女で、その年齢、その性質、その嗜好、その趣味、その思想等々を、豫め充分に呑み込んで然る後、彼女に接近することである。



例へば、吾々が揃つて藝者買ひに出掛けるとする。で、お互に酒を飲んで唄つてゐるうちに、自分は一體、どの女を選ぶべきかを、酔はぬうちに見當をつけて置くべきである。そこで若し自分が、その中で、最も年若い謂はば一本になつたばかりの藝者を選んだとする。そしたら、一同が座席に騒いでゐるうちに、色んな冗談まぢりに、先づ彼女が如何なるものに趣味をもつてゐるか？ 次に、彼女は如何なる性質の男に最も好感をもつてゐるか等々について、さぐりを入れて置くことが先づもつて必要なのである。年若い女なら大體に於て、勇敢で柔しい男。人生に絶えず一種の憧憬をもつて、快活で而かも何處かに過分のセンチメンタリズムをもつてゐる男。一同が駄洒落や に花を咲かせてゐるうちに彼は、これに氣附かれぬ程度に顔をそむけ、心持ち赧むことが必要である。そして時たまこれらの話と全然別な話題をもち出して、上品な冗談口を叩く。朗らかなお坊つちやんになり済ますことが何より肝要である。そして、自分の選んだ女に對しては、他の女よりも多く、色んな愉快な話を持ち掛けることである。その話は、彼女の趣味嗜好に合致したも

ので、例へば活動が好きなら、そして其の活動も西洋ものが好きなら、アドロフ・マンチユは、どうですか、ヤニングスはいいか、パーセルメスの眼がいいとか何とか、彼女の好みさうなものを持出して、彼女がどの役者に一番愛と執着を感じてゐるかを発見しやうと務める。そして、それが誰れであるかを知り得たら、もう他の凡ゆる問題を棄て、その話に總ての中心を置いて、その人物を様々の點より讚美すべきである。この際決して、彼女の禮讚する役者を輕蔑したり、或は、彼女の嫌ふ役者を禮讚してはならない。つまりこれは一例に過ぎないが、その對手をして常に愉快ならしめ、彼女が喜ぶ時、自分も喜び若し彼女が或るものに對して、極度の憤怒を感じてゐたなら、自分も共に憤慨すべきである。そして、彼女の顔、容、姿、乃至は着物等のうちに、特に、これならと思ふものがあったら、それについて、ウンと誇張して稱讚すべきである。眉がよいとか、目元に上品で高雅な愛情があるとか、鼻筋が高尙で何々様（これは、誰れでも知つてゐる高貴なかたでその時代の憧憬の中心となつてゐる人）そつくりだとか、或は、その着物の柄は、何々様



好みのもので、まるでお人形様のやうだとか、等と云つたやうに彼女を愉快ならしめることである。そして、この場合、見えすいたお世辭や、又おだてたりする事は禁物である。彼の稱讚する一言一句が、彼の誇張しない魂の眞の發露であるかの如くに取り繕らうべきである。

斯くして愈々おひげとなり、互ひに定められた

そこで今度は、彼女の朋輩も先輩もなくなり、又自分の友人達もひなくなると、彼は多少、彼女に對して大膽になることが必要である。

彼女が、自分の

來ても、すぐに、彼女の股

などのことを

したらお仕舞である。

と違つて、すぐに局部へ手を觸れるのは、如何なる場合でも彼

女等の嫌ふところである。故に、茲に至りて、先づ前章にて述べ盡した「性交の準備」に入らねばならない。花柳界の、殊に年若い女は、髪を亂れることを極度に氣にするものである。故に、彼女と向き合つて横臥する場合にも、そして片腕を彼女の頸下に廻して抱擁

してやる場合にも、髪を崩さぬやうに細心の注意を拂はねばならない。

先づ彼は、彼女と愉快的會話を始めべきである。故郷を聞いたり、年齢や名前を尋ねるなどの月並なことは絶対に慎むべきである。彼女をして、徒らに、故郷の悲惨な場面や、恐ろしい養父母の幻影等を描かせるのは、折角の寶の山に入りながら、これを幻滅の悲哀に陥れる最大の原因である。出來得る限り、愉快で無邪氣な話を持ち出し、彼女の氣持を天上に登らしめることである。少しでも彼女の苦界にある現状について反省させてはならない。そして彼の巧みな暗示術（會話）に依つて、彼女がウツトリもかけた時、はちめて、彼は片手を延ばして、先づ肩より背中へかけて、靜かに擦つてやるのである。次にその手が、胸にあらはれ、擦ぐりを感じない程度に、

時たま色ん

な話に紛はして、傷のつかぬ

つてやつたりするのである。そして其手

を漸時、

こゝでも、時偶、

やつたりする

のである。そしてつねつた時、彼女の眼に、ちらりと流し目を呉れて、上品に微笑んで見



せないと、却つて愛の刺戟も、嫌惡の念に急變する場合がある。又若し、  
 静かに擦する時、彼女に果してあるや否やを、でチラリと鑑定をつけて置くことである。そして若し想像通り、彼女は俗に云ふかはらけであるとか、或は  
 とまで行かなくとも年若いために、極めてつたなら、正式に「前に、「自分は今迄、友人達に誘惑されて、ちよい／＼遊びをしたが、會つて自分の望んでゐるやうな、あのすべ／＼した奇麗なやうな觸覺をそよる薄毛の女性に出逢つたこと  
 はない。結局と云ふ存在は、色んな本にしか出てゐない存在物で實際にはないの  
 かも知れない。若し、そうした女性と出逢つたり、或は近き將來に於て持つであらう妻と  
 かに依つて、それが發見され、それを獲得することが出来たとしたら、嗚呼何たる僕は幸  
 せものであらう。」と云つたやうな意味の會話に移り、その間、手は再び背中に戻つて、そ  
 やるのである。女の如何に醜惡である事や。そして古來  
 はれる女に限つてなどと間接に、彼女の稱讚してもよい。此會話術に成

功したら、始めて

その刹那、自分は長い間、憧れ求めてゐたところの

あると直感した風に、彼女に力強く抱擁して見せるのである。

斯う云つた調子で、僅か一つのくだらない

れるにも、年若い女に對しては

斯くの如き面倒な段階を要するものである。

又、年若い女に對しては、

移つても、自分の身體の重量を彼女の胸や腹部に支へ

させることは禁物である。

自分の全身を支へべきである。又これを御す法

に至つては、既に、制御篇に於て述べた通りである。

ところが年増女に對しては、それと全然別な警戒を有するのである。

又、料理屋の女中とか、カツフェーあたりの女給なら、最も簡単に物にすることが出来るだらう。彼女等の多くは金銭で動いてゐる女だ。と云つて、無暗にチップをはづんだところで、彼女等は直ぐには物になるまい。過多のチップを費さずして、彼女を物にすべきが所謂戀愛術である。



僕の友人でカツフェー狂がある。彼は東京中の一寸したカツフェーやレストランなら大抵知つてゐる男だ。その彼が或る時、僕を訪づれ、つらく悲觀し乍ら、僕に訴へたことがある。

「今迄カツフェーで費した金は少ないものぢやない。だが俺は、その間に、  
二三人物にしたのみだ」と。 女を

そして又彼は云ふのであつた。

「大抵の女は、勤くとも俺が物にしようと思つた女の大抵は、皆金に困つてゐる女だつた彼等は、金持ちの坊つちやんをねらつてゐるんだ。ところが俺は見られる通りの貧乏人だ。貧乏人が金持ちに見せやうとするには、非常な技巧と無理を有する。それで、いつも俺は落第したんだ。」と。

そこで僕は、冗談に彼に教へたことがある。

「その技巧と無理とが即ち戀愛術なんだよ。成程、君の云ふ技巧と無理とは金銭の事だら

う。だが俺のは強ち金銭は要しない。先づ下手な洋服などは却つて何等の技巧にもならない。久留米餅の一寸氣の利いた着物一つで結構だ。ハンケチと下駄を少し持つこと。手を綺麗にすること。特に爪を美しくしてゐることが必要だ。そしてカクテルか何か一杯あふつたら、すぐ酔を出して、色んな雑談（この雑談は彼女の氣に入るやうな話。下手に高尚ぶることは、却つて彼女との間を思想的に遠ざけて了ふ）を交はし、かねて持参して來た風呂敷づつみを置き忘れて歸るのだ。歸つて了ふまで彼女が氣づかぬ場所へ置く事だよ。と云つて、歸つて了つても、あとで其風呂敷包を彼女が発見しても、それが、どの客のものやら解らないやうな場所へ置いてもいいけない。先づ彼が置き忘れたものであると云ふことを直ぐに氣附かせるやうにするんだ。そして其風呂敷が「愛の魔術」なんだ。先づ、その中にはスポーツに關した書物が二冊ほど必要だ。スポーツの書でなくば、映畫雜誌であつてもいい。下品に陥らぬ程度の本で、而かも女の好みさうな雑誌か本でなければならぬ。或は樂譜などなら尚更よい。その中へ、次の如き手紙の原稿を入れて置くのである。



先づ彼女は、その忘れ物を一度解いて見るだらう。そして、自分の好きな本が出たら、「あらッ」とか何とか感嘆詞を發して、その本に觸れて見るにきまつてゐる。そして、その中から、この謎の原稿を發見し、それを密かに盗み読みしやうと欲するに至る。そこがつけめなんだ。凡て心理學的に事を選ばせるんだ。で、その手紙の原稿には、こんな事を書いて置く。

つまり、彼が或る女に戀をし、その女に欺かれたので、最後の絶交狀を出す原稿のやうな形式にするのだ。即ち、

（もう僕は、お前の呼び出しに對して、何事も答へず其儘にしてゐやうと決心してゐたんだが、あまりお前の誘惑が猛烈になるんで、最後の一本を認める氣になつたんだ。

成程僕たちの戀は、其最初愉快の絶頂にあつた。そしてお前を喜ばすために凡ゆる方法を講じました。事實、僕と云ふ人間は、かうと一旦夢中になり出したからには、精神的にも財政的にも全生命を投ずる男だ。そして僕は一日も早く、僕達の公然に愛しもし、愛さ

れるもする世界を築くために、兩親（或は對手の女に依つて、兩親が居ないやうに見せるため後見人たる叔父とか伯母とかにしてもよい。）その他と、如何に闘つて遂に勝利を得たか？ この邊の事情もお前には百も解つてゐる筈だ。だが併し、嗚呼！ お前は遂に淫奔な女の種類に見出される一人のあばずれた女の本性を現はした。

あのカツフェーの二階より、お前を連れ出して、其は一つの秘密な小さい世界ではあつたが、楽しい旅行に十日間も費したではないか。温泉宿の二間續きの明い廣い部屋にお前を見出した時、浴場の湯氣の中にお前を見出した時、そして又、鏡の中に二人の愛し合つた似合ひの男女を見出した時、僕は如何にお前に身も魂も奪はれたことか。

もう何も云ひたくない。

些か乍らも新築した僕達の愛の巢。それは時の解決するまで忍ぶ秘密の隠れ家であつたかも知れない。

今は、もう其廢ものも不要だ。記憶に甦らすのも不快至極だ。



数多くの贅澤な着物。最新流行の洋装具一切。時計に指環に帯留めに、胸飾りに飾りたてた多くのダイヤに眞珠にサファイヤ。

それは一體、何のために求めたんだ。

一にもお前、二にもお前。お前と云ふ存在のためのみではなかつたか？

僕は、斯うしてお前のために費した金でも数万圓に上るだらう。だが僕は、それが惜しいのではない。それが僕達の世界に、何等の役立ちもしなかつた事が残念でならないのだ。お前には、既に愛する男がゐた。それを目撃した時、僕の魂は極度にかきむしられた。そして、それが自殺の世界にまでも引き入れやうとした。

毒婦！ 姦婦！ 俺はお前を罵る。極度に呪つてやるぞ！ なんて呪はずにゐられるものか？

だが僕は考へた。呪ひは消極的だ。俺は、もつと／＼本統の戀をして、お前を振りかへつてやらうと。そして俺は今、その對手を見つけやうと焦つてゐるのだ。

昨日も親友のHが、俺を訪ねた。そして彼は冷静に僕に言明した。

曰く「カツフェーの女などに純潔な處女がゐるものか？」と。そして豫ての注告を斥けてカツフェーの女に走つた僕を冷笑したのだ。僕は彼に冷笑されるために、お前を選んだのだらうか？俺は口惜しくてならない。そこで俺は答へた。

「カツフェーの女にだつて純潔な處女はゐる。確かにゐる」と。

そして僕は、所謂ガラス箱の花壇に育てられたお嬢様にだつて、不良はいくらもあると説いてやつた。

あゝ！ 俺は、野育ちの純潔な女を求めてゐる。體裁と偽善は眞つ平だ。……)

と云つた調子の手紙なんだ。この手紙が即ち魔術の正體だ。だから君も、この調子の文句を並べた手紙で一つやつて見てはどうだ。」

そこで彼は愉快になつたと見えて、微笑みながら歸つて行つた。



それから二ヶ月ほど経てからである。或る夜、珍らしくも果物の籠などをさげて私を訪ねた。そして座るか座らぬまに、さも待ち切れないと云つた様子で、

「かかる、かかる。どれもこれも、皆ねたは一つでかかる。あれから十人ほど女を引つかけちやつたよ。」と云ふのである。

「あきれたやつもゐたものだ」と、私が答へたことがある。

又、僕の學校の後輩だが、林と云ふ男がある。彼は今より五年以前、ある偶然な機會より發心して處女専門の不良となつた。今日迄に、僕の知る範圍のみでも、七拾人の處女と戀に落ち、二十幾人と云ふ子供を製造してゐる。この男の「情史」は全くカザノヴ以上で簡單ながら其傳記を物して見やうと思つたが、どうしても原稿紙でザツと八百枚を費さないとアウトラインを述べられないと云ふしるものです。又、同輩の尾崎と云ふ男は、年増人妻、未亡人専門で、それ等の女に依つて、月二千圓ほどの生活をしてゐます。彼を巡る女は、約二十五人程あります。この男の傳記、即ち彼れ獨特の戀愛術に就ても一言なかる

可らずと思つたが、これも悠に單行本一冊にせねば纏まらないので今回は断念することにしました。若し、この二著を、幸にして諸君が希望するならば、近刊「實際戀愛術集成」を御覽下さる。

最後に、男子の欲する女子について、反對に亦、女子の欲する男子について、「匂へる園」の教へを聞かう。

先づ、男子の欲する女子に就て、

「女の男に稱讚されむが爲には、彼女は完全な姿を有つて居なければならぬ。又ふつくらとしてすつきりした肉付きをして居なくてはならない。髪の毛は漆のやうに黒くて額は廣く成育して眉毛はエツチオピヤ人のやうに黒く、眼は丸くして大きく、黒目は飽迄澄んで、白目は透き通るやうに綺麗でなければならぬ。頬は完全な楕圓形のものが好まれ、高雅な鼻と優美な口、それに長い頸としつかり据つた頸、廣い胸と腹、そうして胸を擴充する締りきつた乳房、腹は何處迄も正しい均整が取れて居なくてはならない。臍は深か深



かと凹んで居る事が何よりも肝要だと云ふのである。下腹部は廣くて

に至る迄よくよかな肉體の所有者でなければならぬ。

つほくして觸れれば柔かに強い熱をもつて居て、腐敗した卵の様な

あの厭な臭ひがなく、堅く締つた方が宜い。而も臀部は大きくて肥えて

居ると云ふことが何よりの條件なのである。背の丈は好く釣合ひがとれて、手足は優雅に

腕はむつちりとして、肩は如何にも丈夫さうでなければならぬ。

斯う云ふ性質を備へた女でないといふ男は恍惚としない。彼女が寝て居る時は柔かい寢床の

やうな、そうして立つて居る時は旗竿のやうでなければならぬ。又歩行する時には、愛

それも理由ある時にのみ限られて居る。而も滅多に外出する事がなく、懇意な隣家であら

うと繁々と尋ねるやうな事をしない。それに女の友達を作らず、大事な事は一切他言しな

い。常に夫のみを頼りとし夫の身内以外の者には、誰をも部屋に通させぬ。友人なり身内

の者が尋ね來つたとしても其仲間入りなどしてはならない。人を裏切り、隠さねばならぬ  
いやな過ちを犯さず、従つて下手な言譯などする必要もない。人を困らせるやうな事は  
絶対にせず、夫が夫婦

は彼女は直ちに夫の要求に應じなければならぬ

い。又或る時は寧ろ彼女の方から進んで求めねばならない。常に夫の仕事を助け不平の涙

を見せることなく、夫が憂鬱である時には自分一人が笑ひ興する様なことをせず、彼の憂

へを別ち、彼の憤りが沈まる迄宥め諭し、夫の機嫌が直つて初めて安堵するやうな女でな

ければならない。彼女は假令禁慾の爲に死ぬ迄悶へたとしても、夫以外の男には操を許し

てはならない。而もして假令夫であつても之を見せてはならない。而して常

に身の廻りを清潔にして夫にいやな姿を見せるやうなことは絶対にしない。化粧にはアン

チモンを用ひ、スアクで齒を磨かなければならない。

以上のやうな條件に適つた女は總ての男に熱愛されるであらう」と。

更に、女子の立場より、如何なる男子が尊敬されるか？ これに就いて同書は左の如く



語つてゐる。

(或る女の歌つた詩である)

「私ですか。私の交りたい友は若人です。私の心理は彼のみであります。

彼は勇氣に満ち、私の唯一の望みの人です。

彼の　　そして彼は　　處女　　て居ります。

それは炭火にも似た膨れた頭を持つて居ます。

それは巨大であり、ありと有ゆる生物の比類でない。

それは強く堅く、そして頭部は丸い。

時が経つても常に若々しく、死ぬことを知りませぬ。

其愛は熾にして、眠りと云へど彼よりにけ去るであらう。

それは私の　　呻吟し、そして私の　　に涙を垂れます。

それは誰の援けをも借らず、誰の妥協をも要せず只一人で能く最大の疲労にも堪へられ

るからであります。

何物も其努力をした結果については知りませぬ。

それは強くて生き／＼とし、そして、

際限なくそして　かへします。

前に後に、右に左に。

或る時は逞しい鏡の如くに割込んで、或る時は私の狭い

それは私の脊を、そして私の腹を、そして私の脇を撫でます。

私の頬に接吻し、そして私の唇を吸ります。

彼は私を抱きしめ、そして私の身體を　　がします。

私は彼の兩腕に抱かれて、恰で命のない屍のやうになります。

私の身體のありと有ゆる箇所は彼の齒の爲に咬まれ、

彼は焰のやうな接吻を以て私の身體を庇ひます。



私の情熱を見た時に、彼は直ちに私に接近して参ります。  
 彼は私の股を開かしめ、そして、私に接吻します。  
 彼は私の手に、彼の舌を、そしてそれを以て、私に私の  
 とします。 たしめやう

馳て其れは、私の穴に入ります。併し快樂は是からです。

彼は私を揺り動かす、調子よく私に興奮を誘ひかけます。

そこで私も共に潑刺と階調を合せます。

彼は言ひます。(我が 　よ)と。そこで私は(與へよ、我が愛するものを)と。

それは私を此上もなく、愉快にさせます。お、我が眼の光よ!

お、主よ、お、主よ、我を孕ませ主よ。

お、我が心、我が魂よ、新しい元氣を以て起ち上げ。

御身はそれを抜き取らず、其儘にしといて欲しい。

斯うして今日は愁しみのかけもなく終るのである。

彼は神に盟つて言ひました。七十夜が間、私に飽かないであらうと。

彼は盟つたことを、毎夜、接吻と抱擁とを以て成し遂げました」と。

### (二) 愛を受くる法 (「句へる園」素女経「その他」)

先づ、愛を受くる法には、精神的と肉體的にとの區別をして掛らねばなるまいと思ふ。

そこで、精神的にも肉體的にも、若し其對手が妻なれば、後章に説く妻女篇に、又、他妻なれば同様他妻篇に於て、或は處女なれば處女親近篇について夫々述べてあれば、こゝでは、それ等を一切略し、性を知る女子が、肉體的に如何なる男子を欲求するものであるかに就いて、先づ一言して置く必要があらうと思ふ。

これに對して、アラビヤの奇書「句へる園」は、次の如く説いてゐる。

素嗜しく價值のある男に女が接近する時、其男の 　は大きく、堅く遅しく、而かも

潑刺として、



とが出来ぬ男なら、それは多くの女達に必ず稱讃される男子である。何故なら女が男を愛するのには、口舌の爲に外ならないからである。其故彼の形に於ても亦量に於ても豊富でなければならぬ。そして十分な快樂の爲めには、あると云ふことが何よりも必要である。又男子たる者は軽い胸と重い尻を持つて居なければならぬ。而も彼は、これを統御し容易に勃起し得る男でなければならぬ。其をして完全にするものは、それを完全に寒き、且つヨニの有ゆる部分に密着すべきである。さうした男は必ず女に熱愛されるであらう。だから詩人も歌つて居る。

女達は多くの若者達より自分に適した愛人を求めやうとする。さうして諸々のそれに附随する永續性を持った素質の若人を求めやうとする。

それは美、財産、自己抛棄、力、

水、  
股、重き尻、性急ならざる射精。

被女等の上を泳ぐが如く見ゆる軽い胸、其部度、愉快を限りなく永引かせる如き緩慢な

る 出。

さて又速かに再び勃起し得るリング、

さうしてそれがヨニの上に繰返し數次に亘つて飛躍する。

斯かる男こそ房事に際して、女を楽しませしめ、

女達の最大の尊敬を克ち得る男子である。

この技巧に就いては、既に制御篇に於て述べ盡してゐるので、これ亦略する次第であるが、これに依つて見ても、房事に際して、如何にリングの優秀なるものを所有せざれば駄目であるかがうなづかれやう。そこで若し、リングの短小な男は、リングをして増大ならしめるべく、色んな學問や方法を試みる必要に迫られる。これ亦、御法秘戯篇に於て述べつくした積りである。普通リングが女子の氣に入るためには「匂へる園」では、少くとも最長十二指、即ち拳三つの長さ、最短は六指、即ち拳一つと半分の長さが必要だと云ふの



である。そして此以上長くても短かくても

と云ふのである。日本では、

この問題に關して、昔より八寸胴返しが最も理想的なリンガだと云はれてゐる。

その周圍 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ は刀劍の如く鑄をはめ、短小なる場合は、

自分は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 捲くなどの技巧を要すると説かれてゐる。

その他、精神的に乃至は肉體的に、尙ほ幾多の愛を受くべき方法あれど、大體既に數ヶ  
章に於て述べたれば、これ亦略す。

尙ほ左に「素女經」の教へをきかう。そして女子とは如何なるものであるかを知りたい。

素女曰。十動之効。一曰。兩手抱人者欲體相薄陰相當也。二曰。伸云其兩趾者切

磨其上方也。三曰。張腹者欲其淺也。四曰。尻動者快喜也。五曰。舉兩脚物人者

欲其深也。六曰。七曰。側搖者欲深切左右也。八曰。舉身

迫人。九曰。身布縱者支體快也。十曰。見其効以知女之

快也。

素女經云。黃帝曰。貴貧交接而。可強用不。玄女曰。不可矣。

之道。男經四至乃可致女九氣。黃帝曰。何謂四至。玄女曰。怒和氣不至。

怒而不大肌氣不至。大而不堅骨氣不至。堅而不熱神氣不至。故怒者精之明。大者精

之關。堅者精之戶。熱者精之門。四氣至而節之以道。開機不妄開。

素女經云。黃帝曰。善哉。女之九氣何以知之。玄女曰。伺其九氣以知之。女人大息

而咽唾者肺氣來至。鳴而吮人者心氣來至。抱而持人者脾氣來至。滑澤者腎氣來至。

慙慙乍人者骨氣來至。足拘人者筋氣來至。香血氣來往。特。

至。久與。其實。以感其意。九氣來往。有不。不至者。則容傷。故不至可行其數以

治之。〔今檢諸本無一氣。〕案此蓋自記所謂一氣指肝氣。

(三) 處女の信頼を得る法 〔愛經〕「性愛秘義」自說

結婚を終つた男子は、二晩の間次の如き誓約を嚴守せねばならない。臥床なしに路地の



とに窮ること、を爲さぬこと、次に鹽とを糖分と揉らぬ事、又音楽を伴ふ聖式で沐浴せねばならない。さうして正装して音楽などの催しに臨み、新に出来た親族を款待し、贈物などを爲すことは四生の總てに通ぜぬ儀務とされて居る。此期間中、夜中に於て、而も人なき場所で男は出来るだけ愛すべき言葉と、親切なる注意を以て花嫁に親近せねばならない。若し之を怠つたならば、彼女が此三日の間、柱のやうに沈黙せる夫を見ては必ず厭惡の念を生じ恐らく両性者ならずやと思つて憎惡の思に陥るであらう。

男は斯して花嫁の信頼を受けねばならないのであるが、其間は重貞の誓を破つてはならない。又さうする間にも、男は何に由らず、強制的であつてはならぬ。思ふに女子の性質は一般に花のやうなものだ。之を心得て最初より必ず優しく親近せねばならない。若しまだ昵懇でない間に亂暴な取扱ひをされると、必ず若い女は、を嫌ふものである。故に必ず愛の言葉を以て近づかなければならない。男は花嫁に對して無理からでない開進を爲し得るやうな方法を講ぜねばならない。最初は先づ軽い抱擁をすることである。それは

一寸の間であるから、大して彼女に激動を與へない。そして最初は女の上體を賞めたがよい。上體の部分ならば女は可成り寛容な態度を執るものである。

十分成長しきつた女、若くは自分に昵懇である女であれば、燈火の下に、も、羞支へないが、非常に若い女や、又以前には全然相知らざる女の場合には、暗い部屋を選ぶがよい。抱擁した後、ベテルを口に含んでそれを女に提供せねばならない。若し女が受取るのを厭がつた場合には、先づ哀願し、誓言し、さうして足下に平伏しても常に之を受け取らせるやうに努める。思ふに女は羞恥をし甚だ忿怒を感じる場合であつても情人の足下に平伏するのを妨げるものではない。是は日常人々の經驗する所である。此ベテルを口移しにし、靜かに、而も柔らかな、接吻を女に興へる。女が此動作に従つた時には、何等かの會話を爲し始めるであらう。

そして男の言ふ所に女が傾聴するのを確めたなら、假令男はそれに就て、十分知り盡して居ることも、一切知らないやうな態度で、而も僅かに數語しか答へられないやうな程



度、質問をしたがよい。で女が答へなければ餘り女を、激せしめぬ程度に於て、親切に再三再四同じ質問を繰返し、それでも尙、答へない時は何故答へないか、軽く強ひて見るがよい。

誰でも處女は其性質として情人の言ふ所に喜んで耳を藉すものだが而も其間に、彼女は十分に數語しか語らないものである。若し答を強ひられても、單に肯くばかりである。尤も肯定的の場合は、上下に、否定的の場合には左右に、さうして若し女が男に不快を感じ其時男から怒つて居るのであるかと尋ねられると、更にその何れの動作もしないものである。此場合は不愉快の意思の證據である。

若し又男が「お前は自分を愛して居るか、自分は果してお前に好かれて居るかどうか」との如き質問を出したなら、女は長らくの間沈黙を続けるであらう。さうして答を強ひられて漸く、肯定的の答を示して肯くものである。併し若し其示した所のものを明瞭に説明するやうに求められると、其答をすることを止めるであらう。若し又、花嫁が既に男と昵

懇であれば、媒介者（此場合の媒介者は信頼するに足る女であり且つ其男女共に彼等の友人である場合）に依つて話をすることが出来る。斯くして居る間に女は必ず微笑むであらう。若しその友である女が豫期以上の事を口走つたとすれば女は之を窘め、さうして言つた事を拒否するであらう。友の方では「斯く／＼の事を言つた。」と極端に、實際はさうでない迄も云ふ場合がある。其時女は、其事に全然反對するやうに友を押しやり、さうかと言つて若し其事を否定する答に迫られれば沈黙をする。若し尙も強ひられれば、さうは言はないと途切れた不明瞭な言葉で答へるに決つて居る。さうして女は常に微笑みながら男に秋波を送るであらう。

斯して男と幾分親しくなつて尙女は沈黙の儘で男の求めに依つて、ペテル、香水、花飾りなどを男の傍へ置き、若くはそれらを男の衣服などへつけるであらう。其時男は爪傷を以て、

みる所の例の技巧で、  
れてやる必要がある。女が若し  
此場合それを拒んだなら、男は斯う言へば宜い。「若しお前が、私が今した如くに之を抱擁



して呉れるなら、私は決してこんなことはしないよ。」斯う言ひながら彼は、女を立ち乍抱擁する。斯うして彼は再三再四、それを引込ませ、漸次女を膝の上に坐らしめ、  
 るのである。若し女が拒む時は威嚇して之に従はしめて宜い。

次に男は斯う云ふべきである。「若しお前が従がはねば、私は齒を以て唇を傷け爪でお前の乳房を傷けやう。又同じ傷を自分にも施して、お前への友の前には是等自分達の身體の傷は、皆お前のした業であると吹聴してやらう。其時お前は彼等にどう答へやうとするか。」斯う云つて男は子供に對して負はす威嚇や束縛の如き態度を以て、女の心を恋はうとすれば宜い。

第二夜及第三夜に至り、女は一層男と接近するに際し、男は初めて、準備の爲の、  
 たがよい。次に男は女の身體の各部と接近せねばならない。基底部を壓するに置き、それを擦すらんとするもよからう。そして之を爲し得たなら

若し女が之を妨げたなら、彼は斯う云へば宜い。「氣にかけるな、何の危険もないのだ。」斯う云つて男は女を困らせ自分の行動を進めたが宜い。彼が女を此行動に依つて征服をした時、始めて女の、  
 てやるべきである。そして、める。

解き、基底部を壓迫する。是等の動作は第三夜の終り迄に行はれる  
 第四夜に於て初めて、に移し、女を喜ばしめてやるがよい。此時迄彼は童貞の誓約を破つてはならない。又此第三夜の間に、  
 を女に教へてはならない。此期間唯女に對する愛情を示し、結婚前に彼が期待せし所を述べて、それらの希望に一致して將來爲すべき事を約束すれば宜いのである。又彼は同棲せる妻女に對する女の苦惱を取去らなければならぬ。女が十分發育した年齢に達しない時は、彼は何ら刺戟を與へずにつても宜い。

彼は彼女の嗜好を觀察し、巧みな方法で其心を得なければならぬ。すれば彼女は彼を信頼し、話をするに至るであらう。彼は餘り彼女に慣れしめ、其希望を容れ過ぎて宜し



くない。又彼女に秘密危惧を抱かしても宜しくない。其中間を採つて彼女の心を得るに成功すべきである。彼女の心を得る術に通曉せる者は、普通女性間に愛される所の男である。女は餘りに恥しがると考へて、之を等閑に附するものは女の感情を理解し能はざる獸の如きものだと輕蔑される男である。女の感情を知らない情人に、馴々しく取扱はれた處女は、恐怖、戰慄、心配のあまり、男を憎むに決つて居る。女と云ふものは、若い夫に何等愛の取扱ひを受けなかつたなら、遂には他の男を求めるに至るものである。

(以上アッチャーヤナに關する處女を得る法に就てを終る)

大體、この説は處女と昵近を得るに、極めて妥當だと思はれる。が、尙ほ同じく印度の性典「ラテイラ・ハスヤ」に依れば、次の如き意見が述べられてある。

#### 處女を得る法——

先づ處女が選擇が必要である。富と愛と法を完全に成就せる正しき人は、法典によりて未だ會つて他に嫁せざる同種族の女と結婚すべきである。

正しき人は、結婚や同棲の愉快なども、或は慈善等も決して悪人や、その汚しき者とは共になさない。

手や足や爪に於て蓮瓣の如き愛らしさ、輝き、そして黄金の白き輝きのある、又眼が和らかく紅潮を呈し、齊正にして和らかき足、そして少食、少眠、手と足の蓮瓣の瓶、輪等の標相を有し、髪の色くない女、そして腹部、口の懸垂せず、身を持つことの堅い處女は此選擇の法規に定められてある所の女である。或は戶外に出て、或は泣き或は欠<sup>お</sup>びし、或は眠むれる女を聖者は採らないのである。

その名に、山、樹木、川、若くは鳥を有し、極めて瘦せた、そして身體の屈曲して硬い下唇の懸垂せる、そして機敏で、紅い眼を有する女、そして手足の硬い女等も、之を採らないのである。飯を喰ふ時、溜息し、笑ひ、そして泣き、或は乳頭の下垂せる乳房を有し鬚を有し、乳房の不動なる丈の低い女、或は箕の如き耳を有し、齒の悪く、言葉の亂暴な女等も採用せらるべきものでない。



情人と交際するのを樂む者、手、腕、胸の邊、背部、腰部、

へた、或は

歩行することに地べたを震動せしめる女、又笑ふ時、兩頬に波立つ女は、これ亦、採用しないのである。

彼女の足の拇指よりも、他の隣接せる指が大なる時、若くは中指が短く、或は小指若くは無名指乃至は兩者が地にふれないならば、選擇に際して、是等の處女は捨てらるべきものである。

惜て、處女を選んだなら、結婚の夜に於て、決して躡進してはならない。(ここはカーマ・ストラと同説) 此の三日は童貞を破つてはならない。又彼女の心に一致せずして、自分の欲する  
てもよくない。彼女は、その身體、花の如く和らかであれば、秘密を知らざる者によつて取扱はれては、無論、を嫌ふに至るであらう。先づその女友達と共に戯樂をなさしめ、充分信頼を得た後に、これを行ふべきである。

そこで、彼女の取扱ひに就てあるが、の経験なく、且つ若い謙美すべき處女に對

しては、成るべく暗い所で、且つ秘密に履行せねばならない。(カーマ・ストラと同じ) 上半身を以て、瞬間抱擁をなし、自分の口より口へ「タンブーラ」を與へねばならない。彼女が若し此れに反對したなら、彼は愛の誓言か、或は慰安を與へ、膝下に跪きなどして之を納得せしめる迄、謝罪すべきである。その場合明瞭にして穩和なる接吻をし、穩和なる愛と戯れの言葉を以て、彼女に接しねばならない。

或は又、若干の短い言葉、單語を以て尋ねるも宜い。答へをしなかつた時は、尙ほも強ふれば宜しい。

「美しき者よ、汝は我れを愛せるや、又愛せざるや」

斯ふ問はれては、返事の言葉の代りに彼女はきつと頭の動搖を示すであらう。

若し處女、愛を有する時は、徐々に侍女に對して秘密を語り、面を伏せて微笑するであらう。侍女は併し、

「斯くくの貴方の堅固な幸福が語られました」



など、愛する男子に就て尊敬し、或は嘘を交へてすらも語らせるやうにすべきである。彼女の乳房の窪みに爪を以て擦るが宜い。抱擁をし、

ぼして引く

のも宜しい。その時若し彼女が、之を拒まば、次の如く言つて手を取り去つたが宜い。

「美しき顔を持つ者よ、御身、若し我れを抱くなら、我れ決して之をなさず」と。

斯の如く和らかに言ひ含めて、之を抱擁し、益々強く結び付けつゝ、次第に彼女を恐れしめる。

「愛する者よ、我れは爪齒にて、汝を傷つくべし。

自分の身にも若干の傷を自ら造り、御身のした業なりと侍女の前に、これを告白し、恥かしめやう」と云ふやうなことを言つて、全身に接吻を與へる。次に腿の部に戯れをなし次第に羞恥心を除去させ、そして帯を解くが宜い。斯くして次第に恐怖と暗黒と不機嫌が愛の法則に依つて除法せられた時、適當に

が宜しい。

極めて温順にことを圖つても、亦亂暴を以ても處女は、之に従はぬものである。故にそ

の中間を採つて事に當らねばならぬ。

自ら悦びを生じ、又彼女の慾望を増加する（處女昵近の方法）を知るもとは彼女の情人となるべき男であらう。

彼の女の心知らない者が、突如として彼女に接近しやうとしても、唯徒に彼女を恐怖せしめるのみである。而して唯彼女の憤怒を買ふ以外に何等の効果もない。

女子は喜悅の情を生ぜずして、恐怖にのみ傷つけられる時、若くは男子を憎悪し、乃至は憎悪せられる時、遂に他の男子に行くに至るであらう。（以上、聖者コッコーカ述）

併し、現代の處女は、此他に尙ほ幾多の欲求をもつてゐると思ふ。

先づ、處女の昵近を得る男子は、不良やあばずれであつてはならない。

ロマンチックでセンチメンタルで、そのくせ、極めて勇敢なヒロイズムの把持者でなければならぬ。

彼の描く世界は常に平和であること。若き日の情熱に富み、快活で親切な彼。そして彼



には、人を妬んだり罵つたり等のいや味が微塵もない。

彼は充分獨立し、生計の道を講ずるだけの力をもつてゐる。

彼には一種の天才的閃きあり、或は特種の技能を有し、將來必ず名をなす人物である。

以上の如き男子は、處女に愛されるであらう。

殊に、現代の如き資本主義時代にあつては、先づ彼が、生活の道をもち、相手に此れを容易に諒解させることが、彼女の昵近を得る最大條件の一つである。

金持ちのお坊つちやんで、而かも獨立して生計の道を講じ得る能力を有し、而かも女性を尊敬すべきことや愛撫の如何に好ましいものであるかに精通してゐる男子。

實際に、さうでなくとも、以上の如き條件を心得、所謂お芝居の巧みな男子なら、必ず彼女の愛を受けるであらう。

關の歩行に於ては、わざと蹠つき易い傍路を選び、石ころなどに彼女が蹠づかんとした刹那、待つてましたと云はぬばかりに、彼女を支へ、その瞬間、強く抱擁するのであ

る。又、二人きりの部屋にあつたなら、愉快な談笑に事寄せて、益々彼女の身體近くへ接近し、冗談交りに軽く背部を叩く。或は手を握りしめて軽く引ツ張り乍ら、彼女に笑ひを強いるもよからう。

又、換め、計画的に物語へ成るべく戀愛譚を用意し、自ら其物語に熱し、悲劇の場面には涙を流さんばかりにし、或は、手振り足を鳴らし、又は、彼女の手を捕らへ、肩を撫で、そして部屋中をぐる／＼歩き廻り乍ら物語をつづける。即ち、何等かの術策を講じて彼女の觸覺を刺戟すべきである。

或る友人は、此觸覺を刺戟すべく、次の如き方法を探つたと告白したことがある。即ちそれは、掌の皺に依つて、彼女の運命を得るに得意だと稱し、その際、「僕は易は嘗つて一度だつて間違つたことなんかありません。或る時など、或る女子の皺に現れた運命が非常に憂慮すべき現象を呈してゐましたので、その善後策や局面打開策等に就いて極力注意してやつたんですが、彼女は一笑に附して顧みなかつたばかりか、僕の誠意に對して、却つ



て反感を抱き、極度に罵つたので、驚いて逃げ歸つたことがあります。所が如何です。間もなく彼女は或る男に棄てられて、投身自殺をしたではありませんか。新聞記事で此事實を知つた時、僕は、その全責任が自分にあつたと感じた位です。あの時、なぜ僕は、彼女が納得するまで打開策を講じなかつたか？ 一輩のもとに罵られて逃げ歸るなど卑怯此上もない。そして人類に對して熱意の缺けすぎてゐた僕自身が餘りに醜い存在となつて、その晩たうとう一睡も出来なかつたことがありますよ。そのかたの掌に現れた運命は、無理な戀愛を續行した爲に來る必然的な禍ひで、相手の男には既に妻とすべき女子がゐたんです。僕は其事實を観破したので、あなたは將來、必ず、その相手の女子を殺すか、或は、あなた自身が自殺をなさるやうな恐ろしい結果を生みます。あなたが、その男を愛すれば愛するほど、彼はあなたを輕蔑し、そして魂の抜けた人形扱ひにしてしみます。茲が運命の重大な轉換期にあるんです。今のうちなら、幾らも打開出來ますと、吾が事のやうに注意したんです。が彼女は僕をテンから侮辱しました。」

と云つた調子の辯舌を用ひ、巧みに彼女の觸覺を刺戟したとの事である。とかく處女と云ふものは、運命に對して極めて恐怖を感じてゐる。そして凶報が來たりつゝあるなんて知ることには戰慄さへ感じてゐるものである。故に、右の如き「今のうちなら如何なる打開策でも」云々の如き暗示が必要になつて來るのだ。

(四) 媒合者なく男女相接近すべき法 「カーマ・ストワ」

女が姿態其他の標號で、即ち顔を赧らむる事などで戀を示した以上は男は巧みな手段で自ら之に臨むべきである。賭事や、將棋を遊んで、次に起る爭論などに托して男は女の手を捉へればよい。それで以て女に對する愛を示すべきである。次に諸種の抱擁、例へばスプリーシユタカ（抱擁編参照）等を爲すもよいであらう。又女と一緒に木の葉を摘んで裝飾を作る。男は睦まじく遊べる雌雄二羽の鳥などを拵へる。それで女に對する愛情を示すのも一法である。或は水遊びなどして、男は遠い所から水を漕つて、後から女に達して之に觸れる。或は女の立つて居る場所へ現れたりするも宜からう。春の一日を若葉を摘み集



めつゝ、其葉で色んなものを刻み、其他色々な方法で自分の感情を女に示すもよからう。自分の煩悶を飽く事なく、再三再四女に物語らねばならない。或は演劇を觀たり、會合の席上に女と相接して坐はり何かに托して女に觸れるやうにする。又女に近く坐つて男は最初女の足に次第くんに凭れかゝる爲に、之を壓しつける。次に男は靜かに女の足の先に自分の足の先を觸はり、又足の親指で、女の足の爪先を叩くやうにする。それに成功したなら、男は益々躍進を續けて、女の秘密の部分にまで及ぼうと努力せよ。又女の本心を驗す爲に、男は此様な動作を益々繰返すことが必要である。女が男の足を洗ふなどの場合には彼は彼女の手の指を足の指の間に強く捉へるやうにする。何かを女に與へたり取つたりする場合には、彼はそれらのものの上に爪なり、其他の識しを何處にてもあれ必ずそれにつけ、若し女に觸れ、或は姿態其他の表情で其愛情を示さねばならない。

又女が男に水浴の爲に水を持ち來つた場合には、男は水の残りを女に振りかけてやるも宜からう。人なき場所、若くは暗まざれに、女と相接して坐はる時、若くは斯うした場所

一人だけ横わつて居る場合には、男は前述類似の躍進で女の忍耐を試みるがよい。此種の愛情は女の感情を刺戟せぬやうに女に對して爲されなければならぬ。何か秘密に、彼女に言はねばならぬことがあると云つて、而も女が彼の所に訪ね來つた時に、何等言ふことなしに、じつと意味ありげに彼女を見つめながら、彼女の心を觀察するのも一法である。彼に依つて彼女が愛して居ることを、彼が知つた以上、彼は人を遣はして病氣の口實の下に看護して貰ひたいと、家に訪ね來るやうに傳へるも宜からう。斯して自分の愛情を打明けければ宜い。そこで女が訪ね來たら、頭などを揉むやうに頼み、それを爲す間に彼は女の手を意味ありげに捉らへ、それを顔若くは眼などの上に置く。

彼は彼女に對して云ふであらう。「此現在の苦痛を除くために貴女は或る一つのことを爲すべきである。其事は、貴女のみが爲し與ふもので一人の處女にとつては、是以上の善事は又とないのです」。そこで女が去るに及んで彼は更に今一度、或る事の爲に是非訪ね來たるやうに告げねばならない。彼は夜會とか音楽會を準備する。さうして彼女は長く滯留す



るやうになり、益々彼と相知る機会を作ること心掛けねばならない。そこで一層其上にも親密を増す爲には、他の婦人を會合せしめて、彼女に對する躍進をなすのである。併し彼女に對する愛情は何等公けに話してはならない。假令彼女に對する愛情は深くとも、彼にして心弱く、大膽に躍進を爲さざる時は、決して成功するものではない。男が斯く躍進を繰返した後、その處女に對し成功せりと考へた場合にはガインドハルプの式で結婚を爲す準備をする。(ガインドハルプの式とは本人相互の同意のみで親族兩親に相談せぬ結婚を云ふ。)

又夕方或は深夜、或は暗まぐれには、女は幾分恐怖觀念より逃がれて居るものである。そこで

も多少傾いて居り、従つて其時はして居るものである。故に其時は男に近寄ることを敢へて反對しないものである。故に斯うした時に接近爲すべきだと考へられる。これが一般の場合である。若し前述の如き媒介者に依らない躍進を爲す事が不可能な場合には、親しき者とか或は乳母とか友人とかを利用するが宜からう。是等

の人達は假令愛情を知つて居つても、それに關しては彼女に何等談してはならない。是等の人に依つて彼は彼女を呼出し、さうして其計画を進める。或は最初から彼は自分の下女を彼女の友とする計画を立てるも宜からう。斯して此女に依つて彼女を容易に得る事も出来るであらう。或は祭禮の時、結婚式の時、巡禮の時、其他の場合即ち人の多勢見物に集まる場合などに於て、彼に對する愛情が十分明かになつた以上、彼は彼女が一人で居る機会を求めて躍進を爲すべきである。何故ならば曾つて彼に其愛情を示した女は、適當な時と場所に於て近寄れば、決して逃れ去るものではないからである。

斯くの如く媒介者なしに男は女に接近することが出来る。貧乏なる家に生れたるにも拘らず、技藝に長せる女、若くは家柄こそよくても、貧乏な爲、従つて同じ階級の者から求められない女、若くは兩親を失ひ、其爲に親類に養はれて青春期に達した女は、自ら、夫を求めんと努めるものである。是等の女は容姿端麗にして體力壯健であり一段に多能で有望な青年を友として交はるべきである。若し女が或る男に



對し、男の方で性慾に打ち克ち得ずして、自分に接近して來ると考へるならば、假令男の兩親は許可を與へずとも、贈物を爲し、愛情を示し、而も屢々會合して男を得んと試みなければならぬ。次に手に花や香水やベテルの葉などを持ち、彼女は一定の時に人なき場所、或は頭を揉むやうに頼まれた時、相當の遠慮と謹慎を以て遠ざけねばならない。さうして男との談話は又、其相互に一致せねばならない。性慾過多の女子と雖も男子に對して適當でない躍進をなしてはならない。斯くせば、其美を失ふものだからである。女は男の躍進を俟つて快く受くべきである。若し抱擁せられても、女は何等恐怖や混亂の表情を示してはならない。次に女は意味ある表情に對して、特に何等其意味を知らざるかの如く受けねばならない。接吻に唇を許すに當つても、女は恰で強ひて爲されたかの如く裝はねばならない。女が若し

るやうに強ひられても、恰で止むを得ざるが如くに裝ひ、其動作に従はねばならぬ。さうして非常に強ひられても結

婚が確實となる迄は、  
てはならない。女は自分の上に爲された情事に徴して男が確に自分を愛して居り決して反かぬと認めた場合には、其準備行動に終局を告げしめるやうに急がねばならぬ。  
斯して女は其處女性を捧げた以上、其事實を友人に打明けてはならない。以上は自分で情人を得る方法に就てである。

(五) 他妻の信頼を得る法 (「カーマ・スートラ」及び「ラタイラ・ハスヤ」)

(A) 他妻觀察法 「カーマ・スートラ」

他妻を誘惑する方法に就て、カーマ・スートラは左の如く説いて居る。先づ他妻を得やうとせば大體左の三點に就て注意せねばならない。即ち

- (一) 女を得べき可能性
- (二) 危険を免れること
- (三) 其他權勢、金錢などの利益

其他權勢、金錢などの利益



等である。若し男が女を見て強き愛着を感じ、一段より一段と情事を経験するならば、自分の破滅を防ぐ爲に、其女を手に入れる道程に進まねばならない。

男が女に対する愛着にはさつと十箇の段階がある。(一)チャクシユブリーテイ。目の享樂即ち女と會ふ快よさ。(二)マナマサンガ、女に心をむけること。(三)サンガルバ、交會せむとする慾望。(四)ニドラーチユヘトダ、睡眠不足。(五)タスター、瘦せること。(六)ヴィシヤエブヒョー、グーヴリツテイ、他の事物に無關心なること。(七)ラツジャー、プラナーシヤ、羞恥を忘れる事。(八)ウンマーダ、狂氣。(九)ムールチユハー、失神、(十)マラナ、致死。

等である。何れの場合に於ても女の外貌及び身體の特徴、性質、忠實、純潔から推して、その女を得べき可能性及其女の熱情を認めねばならない。併しヴツチャイヤナは次の意見を持つて居る。女の外貌と身體の特徴は必しも其女の行爲の確かな表現でないから、單に女の態度

と他の意味ある表情とが男に對する好意の情緒の間違ひなき表示であると考へねばならない。態度の好い男子を見て女は愛を感じ、男も亦美しい女を見て愛を感じるものである。若し男女が此愛を満足せんと企てない原因は、他の考慮が此動作を妨げるからである。女の場合には是が違ふ。女は其動作に徳義とか罪惡とかを考へて居らない。女は何れにしても男を愛するものだが、他の原因が其動作を妨げる。それは女の本來の性質が然らしめる故に男が女に近づくと進んで行けば假令女は心中にそれを欲して居ても男に反くものである。併し若し男がその企てを再三再四繰返すなら、遂に女は之に従がふものである。男は女を愛して居ても、其動作が罪惡であると考へ、醫者の規定した社會の法則に反くものであると考へるから之に反くのである。此爲に女の方が如何に繰返しても男の心を得ることが出来ぬものである。時として男はさうした理由なくして女に接する場合もある。斯くして、全く女から離れ去つてしまふのである。女を得た以上男は全く無關心となる。若し女が容易に得られたなら男は之を輕蔑するものだ。其の辭、得難けれ



ば男は非常に之を慾求するものである。是等は單に普通一般に言ふ所のものである。

女が其の夫以外の男に従がはぬ理由に就ては、(一)女が男を愛して居る場合、(二)小兒に對する愛情、(他の男子との亂交は母乳の量を減少するからである)。(三)年齢が進み過ぎて居る事、(其年齢で他の男と交合するには羞恥を感じるからである)。(四)親しき何人かの死去などの悲痛の感ある時、(五)夫婦離別の苦痛を経験せぬため、従つて他の情人の必要を感じない場合、(六)男に對して不快の念を有する事、例へば男が餘り女を輕蔑するとか、或は冷淡であるとかの爲、(七)女に對する男の感情が不明確である爲、男に近付くのを躊躇する場合、(八)男が直ちに女を捨てるかも知れぬと云ふ危惧、即ち將來此結婚は存續する確實性を缺く事、若くは男が他の女を愛するかも知れないと云ふ疑惑を抱く場合、(九)公衆を惧れること、即ち男が感情を發露するからである、(十)男が友人を非常に愛して居て、其女よりも友人を大切にすると云ふ事實、(十一)男が何等と云ふ理由なしに女とであること云ふ疑ひ、即ち男は熱心さを缺き、若くは女にとつて何等の利益もよ

い場合、(十二)女にとつて男が餘りに高位にあり勢力あるがために女が躊躇する場合、(十

三)殊に女がムリギリ(牝鹿族)であり、男が強烈な性質を有する場合、男のなすに堪へ得ざる恐れある場合、(十四)若し女が愛の技術に熟達し男は然らざる場合、

ことの羞恥を抱ける結果、(十五)女が従來男を親友として取扱ひし爲、爲すの

羞恥の情起りたる場合、(十六)男が適當なる時と場所を辨へざるを怒れる場合

(十七)若し男が貧乏である場合、其交りが友人其他に知れたなら、必ず輕蔑を受けるか嘲笑せらるべしと惧れる場合、(十八)女の表情や姿態を男が了解し得ざる時、従つて女を冷遇したる場合、(十九)若し女が(牝象族)の者ならば兎族や其他の低部族の、する

男に對する輕蔑の念を抱く、(廿)女が若し關して何等かの危険を知つて居る場合

自分の爲に男に何かの危害を與へて氣の毒に思ふ場合、(廿一)女が彼等の缺點例へば疾病等を自覺せる爲、避けて居る場合、(廿二)女の方の家族に知られた

場合、女は排斥せられるのを恐れ、(廿三)白髮の男、即ち老年の人、隨つて女の持つ一種



の輕蔑、(廿四)此男は夫から女の心を試みん爲に使はされたかも知れないと云ふ疑ひを抱いた場合、(廿五)最後に女の徳義を重じ、

さて數多き妨害となる條件の中で、男が其の何れかを自分の上に見たなら、次の方法を施して、之を除去する事に努めねばならない。

女の高尙なる感じから来る不快、即ち夫に對する愛の如きものに關しては、男は女をして自分のやうに熱情を増さしめ、遂には其力で女が打ち負けるに至るやうな方法を講じて之に當らねばならない。力の缺乏、適當な時と場所を間違へざるやうな缺點が男の方にあると女が考へて居る場合には、斯うした感情を女の心から除くやうな方法を講ぜねばならない。男に對する尊敬の餘りに、

好まない場合には一層女に親密になつて、之に當らねばならない。又老人であるなどの爲に輕蔑の念を抱かれる場合は先づ男らしさと其他の機敏なる動作に依つてこれに當る事が必要である。男が女を輕蔑してゐると感じて居るなどの場合には、女の足下に平伏しても、彼女をして、此念を去るやうに注意

せねばならない。女が情事の發見とか其他危険の惧れを抱く場合には、彼女が其動作を承諾するやうに、先づ以て其心を、翻すやうな風に宥めすかさねばならない。

次のやうな男は女にとつて容易に彼に従はせる事が出来るものである。(一)性愛の學に熟達せる者、(二)聽衆の面前に於て所作を巧妙に爲し能ふ者、(三)幼年時代より

る者、(四)成年期に達せる者、(五)遊戯などの仲間となり、女の友情、信頼を得たる者、

(六)其女に従順なる者、(七)愉快な話に熱練せる者、(八)其女に利益あることをする者、

(九)女と他の男との間の秘密を打明けた友である場合、(十)女の秘密を知れる者、(十一)

高位の婦人に望まれた男、(十二)其女の友と

藝の堪能な事でも有名なる場合、(十四)其女と一緒に育てられた男、(十五)

ける隣人、(十六)同じ氣質の召使の男、(十七)乳兄弟の召使、(十八)新婚の義子、(十九)

演劇を屢々見に行き園にて行はれる遊戯に通曉し、而も寛大なる者、(二十)

者として且つ名高き者、(二十一)冒險好きな男、(二十二)英雄、(二十三)學問、優美、技能及び



華美に於て、女自身の夫より優秀なる者、(二四)美服や、立派な習慣に於て名高き者、等である。

男子の中でも或る者は容易に得られるやうに、女子の中でも或る者は餘り努力をせず此れと近づくだけで容易に得られる女がある。之に就て次に述べやう。

(一)屢々家の戸口に立つ者、(二)露臺若くは階上から屢々街路を眺める者、(三)青年の居る隣家へ話などしに行く者、(四)屢々男を眺める者、(五)男に見られて秋波を送り返す者、(六)さしたる理由なくして、同棲婦に苛められて居る者、(七)夫を憎む者、若くは夫に憎まれた者、(八)區別なしに誰でも情夫とすべき女、習慣的の淫婦、(九)心なき女、(十)常に両親の家に在る者、(十一)夫との間に生れた子が次から次へ死したる場合、従つて他人に依つて生育する子供を欲して居る女、(十二)會合などを自分の家や、他人の家で催す女、(十三)男に愛を表示する女、(十四)音楽家若くは舞踊家の妻、(十五)若き寡婦、(十六)貧しき女、(十七)多くの人の享樂の目的たる者、(十八)義兄弟ある長兄の妻、(十九)貧乏

人にして無價値な夫を要する虚榮の妻、(二〇)技能に誇りを有し而も夫の愚かなる事、頭迷なる事、吝嗇な事に不満足を抱く女、(二一)處女時代に或る一人の男から熱心に求められ而も或る理由で他の男と結婚した者、前の男が後に女に

と智力、品性、學問、判斷を同じくするなら、此時は之に許すであらう。(二二)女が男を

本來好いて居る場合、其女は其男にとつて容易に得られるものだ。(二三)何等過失なきに其夫から侮辱された女、(二四)同等の位置の女に輕蔑された女、此理由の爲、他の理由の價値ある、若くは金持の男

其位置を高めんと欲する女、(二五)別居する意味に於て夫から遠く離れて居る女、(二六)下のやうな種類の夫を持つ女、(イ)嫉妬深き者、(ロ)汚穢なる者、(ハ)深癖家、(ニ)兩性の者、(ホ)痴鈍漢、(ヘ)吝嗇家、(ト)偏儀、(チ)倭人

(リ)醜男、(ヌ)寶石細工を爲す者、(ル)田舎者、(ヲ)惡臭を放つ男、(ワ)病人及び老人。

男に對して元來女が愛を起し、それで技巧と聰明とに危惧と恐怖が取り去られ、他の情事に依つて色彩を添へた愛は、長く將來に亘りて破毀されない性質のものである。男の方



では技能と他の都合よき情事を自覚し、而も女の方では色々な表情姿態を示し、其上巧妙な動作で不快となるべき原因を除く時は、男は容易に欲する女を手に入れることに成功するものである。

(B) 見知れるものに愛を得る法 「カーマ・ストラ」

處女は媒介者に依るよりも、寧ろ直接に之に當るのを可とするも、人妻にありては、感情を異にするを以て、仲介者に依る法が得策であらう。直接では却つて容易でないと思ふ何れの場合でも、若し出来得るなら、直接本人同志の交渉が最も望ましいのであるが、若しそれが困難なる場合には仲介者を使用した方が宜いであらう。初めて誘拐せむとする者及び自由に談話し得る者は直接に爲すべく、其他のものは仲介を使用すべきであらう。女に直接交渉を爲さむとする者は、先づ女の昵懇を得なければならぬ。女と會見するには、偶然的なものと、計劃的な會合とがある。前者は近隣に棲むやうな場合に行はれ、後者は女の友人、親戚若くは貴族、醫者などの近隣に住む場合、結婚、祭禮、葬儀の場合、若く

は女が花壇などを逍遙せる間に行はれる。

女が觀野の内にある時は、常に意味あり氣に之を眺め、髪を結んでやつたり、爪でいろんな所をむしつたり、裝飾物を鳴らしたり、唇を押付けて見たりする動作を要する。又友人と共に、女の前に居る時は、情人の物語りを他の誰かに當て篋めて話し、或は友人の膝の上に坐つて居る間に、身體を揃ふつて軽く欠伸をし、一方の眉を意味ありげに上げて見せるのである。低聲にオド／＼せる談話に對しては、之を最も嚴肅な意味に於て傾聴すべきで或は女の傍の子供などに彼は戀を含めた二重の意味を有する物語りなどを話するのも一つの方法であらう。他人に對する話のやうに粧ふて直接女に愛を示すのである。彼が女に爲せしやうに子供を抱いて接吻をする。又ベテルを口に含んで子供に與へるのも宜い。指で子供の頬を打ち、此種の出来得る限りの方法を用ひて之を機會の許す限り行ふのである。又女の膝の上の子供をあやしたり、其子供に玩具などを與へたりする。又女と話をする機會のある者と親しく交り其者と何か仕事を始める。或は口實を設けて、其仕事の爲に



訪問するも宜からう。女の居ない時には人に訪ね、女の来て居る所では性愛の學などを語り、自分の知識を示すべきである。さうして昵懇を重ねるに随ひ、女に贈り物等をする。或は何かを女に供托して歸つたりしても宜い。さうして彼は毎日それを取りに行くのである。公會の席上では自分の妻達の中に女を坐らしめ、さうして常に彼女を見、信頼を得るやうにする。又女が貴金屬商や寶石商や道化もの、紺染屋などを要する時は、男は自分で或ひは召使などに命じて其用を辨せしめねばならない。斯うした場合、時日がかかるので従つて女に屢々會ふ機会が得られることは一般の人達が知つて居る事實である。他の仕事に於て持越される此仕事に於て若し女が何かなさんとして、其方法や或は工夫を要するならば男はそれを何でもなく彼の努力一つで出来るやうに思はせねばならない。女が若くは其下女達と過去の歴史上の出来事と關係した問題若しくは、貴重品の性質等に就て論争してゐる場合、而もそれらに就て賭事を爲す場合には、彼女をして其審判者たらしめる。女と直接に論争せる場合には女に忠實な下女の一人を審判官とする。是等は皆昵懇となる方

法である。そこで昵懇となつた後、女が其表情姿態に依つて、其愛慕を示したならば、男は巧みに彼女と親近せねばならない。又處女は情事になれないから男が隣進する場合には甚だ注意を要する。所が處女以外の女に對しては、比較的容易な方法で行はれる。女が表情姿態に依つて彼女の意嚮と男に對する友情を示した以上、而も彼等〇間に愛の贈物を取交した場合には、男は女の許しの下にそれらを用ふべきである。男は女から香ひのある衣服、花、指輪等を受け取り、男の手からペテルを受取り、又男は公會に連る場合に臨んで女の髪に挿んだ花を貰ふべきである。男は女が乞ひ求めた品物を愛の表情を加へて例へば香料を匂はせ、爪、齒などのしるしをつけて與へるものである。是等に接近することに成功すればする程益々男の恐怖は少くなる。さうして二人は漸次密會等に赴き、抱擁し、接吻し、ペテルを與へ、

是等が接近の方法である。

若し家に於て一人の女と接近せんとした場合に、他の女とさうすることを企てゝはならない。若し家の他の男と

ことのある年長の女があるなら、其女は愛の贈物を



以て得ることが出来るであらう。家の中に若しも夫が他の女と戀をして常に何處かで落合ふ場合に、人は假令居易く共、其家に近づいてはならない。賢い人は自分の能力の範囲を知つて危懼を抱ける、守護せられた、若くは臆病な、或は姑のある女に親近することを考へてはならない。

(G) 女の心を試みる法 (カーマ・ストラ)

女と交るには其態度を観察せねばならない。其に依つて女の心が試みられるのである。心を表示しない女は仲介者に依つて得られるであらう。最初男の愛を受け容れないが、併し其男と會ふのを避けない女は、心が躊躇して居る場合で、是は漸次に得らるべきものと知つてよからう。女が最初男との接近を斥け再び同じ状態で其男に行く時は、其女は若し人の居ない場所で強ひられるならば直ちに得らるべき女と知つて宜からう。男の幾度かの躍進を忍びつゝ、而も長い間、心に従はない女は不感症の女である。男は此女と會ふ事を止めたが宜い。接近すれば斥け、而も更に自發的に男を求めせず、又男を斥けもしない

やうな女は自ら誇る所があつて、自分の相手に對して尊重して居るからである。斯うした女は一層昵懇を重ねて、若くは女の心を熟知せる仲介者の力に依つて幾分困難を感じるが努力すればものになる女である。

女が男の躍進を忌避し言葉で斥ける所の場合には捨て、置いたが宜い。嚴しい言葉で斥けた後に、愛の表情を示したなら、聽ては得らるべき女である。

男の口接觸を或る口實の下に忍従し、男の意志を知らざるが如き風を装ふものは、彼女が未だ躊躇して居る場合である。此種類の女は根強く努力を續ければ得られるに決まつて居る。

男は眠つたやうな眞似をして

之を  
しやり、同様にして男が足を

置く場合もある。さうした後、男は、まるで夢中にあるが如く女を抱擁せんと試むべきである。

女も眠れる眞似をして

覺めて居る場合には女は此動作の繰返されむことを希つて、之を傍へ押



男の方で何等計劃する所なきも、女が愛の表情を示す場合がある。又一方の手で心配あり気に擦すり、他の手で男の體に觸れながら同時に男を抱くやうにして押へつける場合もある。

女は人の居ない場所に於て愛情を示し、廣場などでは普通氣付かれないやうな動作で愛情を示す場合もある。又男が愛の表情を女に對して示して居るにも拘らず、女は其儘にして居たなら、そんな時に、彼女を心の儘に従がはしめることが出来る。嗜し其場合女が尙も固守せる場合には、到底成功覺束なしと考へた方が宜いだらう。以上は女の意志を試みる法に就てある。

最初男が女の昵懇を得ると云ふことが一番必要である。さうして次に談話を交へ、それと共に表情を交換するのである。若し女が男の表情を受け容れたのを知つたなら、男は更に何等恐るゝ所なく躍進を爲すべきである。もし又女が最初の表情に依つて愛を示したなら直ちに初對面に於てさへも之を得んと企劃しても宜い。男が明かに女に對して愛を示す

時に女も明かな應答を與へたなら、是亦情事に意のあるものとして、直ちに之を得らるべき所のものである。大膽、臆病、及び躊躇せる女の總ての場合に於て、是等の女の必ず得らるべき微細なる規定は以上に於て大體説いた積りで居る。

(D) 人妻を得る法 (ラテイラ・ハスヤ)

「ラテイラ・ハスヤ」を得る法に關しては、大體左の十個條の條件に起因して居る。先づ眼の優美を第一とし、心の染着、妄想、不眠、羸瘦、その他の事柄に對する無關心無恥、狂態、失神、致死、此十個條は情愛の十態である。

此の中には愛の成長する時、自分の防禦の爲に、他の女子に行くであらう。併し身體は二妻女、財産、土地、息子、幸福を來たす事業は、再び得られるであらう。併し身體は二度と同一状態にはならないのである。

娶つてはならない女と「バラモン」の娘に通ずる者は、常に生れながら不淨にして日毎に「バラモン」を殺すのである。「バラモン」の妻は、對境のない、併し五人の男に接した



婦人は、之を犯しても罪にはならない。だが教師や、友人や親類や、そして主人の妻は、之を嚴禁して居る。種族を失つたもの、友人や幼女や女行者、病女、放縱であるもの、或は狂氣せる者、又は惡臭を放つ者、老婦、秘密を破る者、赭き身體の者、乃至は極めて瘦せた者、預けられた女、以上は如何なる場合にあつても、是と通じてはならない。で、此の通じてはならない女を賢者は之を人妻と名付けて居るのである。

彼女の夫は自分の敵と結んだが故に、彼女は自分の敵を殺しても差支へなからう。自分と通じた、彼女は強力な本性の自分自身を殺すのである。彼女に通ずるのは破滅を免れるかも知れない。若くは貧窮なる自分の生計が原因である時、或は自分に戀着せる彼女は自分の弱點を知り、若し自分が之に従はなかつたならば、自分を害するであらう時。

彼女が自分に依つて樂まんと欲し、虚構せられた邪惡を以て自分自身を害せんとしたる時、若くは彼女と通すれば、自分は非常なる友義を彼女に與へ得べきと信する時、斯ふした場合に於て、斯の如く情慾に依らずして、先づその原因を考へて、然る後是与通すべき

が宜いであらう。若くは自分の原因の省察に堪へ得ざりし時、それは、愛に蔽れたからである。

人妻に通ぜんとする者に依つては、自在と富と生命と不幸の除去、是等を前以て考へねばならない。何故かならば、愛は希望に餘地があつて、是に勝ち難いものだからである。戀愛は本來意地悪で、而も除き難く故障が多く、そして得たいものであるにも拘らず、禁ぜられた境界にも進め入らうとするものである。

婦人は美しき男子を無論愛するであらう。男子も亦美しい婦人を見て愛するのは勿論である。唯兩者の異なる所は婦人は正義を顧慮せずして慾求する所にあると思ふ。男子に依つて愛せられた婦人は屹然として、本性に依りて、彼を顧みない。男子は又聖者の法則などを顧慮して、或は愛し或は愛さないものである。

彼は得やすきことを嘲り、得難きことを愛するものである。彼は又欺いて愛することもある。



以上に依つて、男子及び女子の行儀に就て、説き終るのである。次には女子の回避に就て、その原因を説いて見よう。

夫に對する熱愛、子供に對する愛、年齢の相違ある婦人に取つては正統に對する願慮がある。

夫と離居せぬこと、自分に缺點のあることを自覺すること、他の婦人に戀着せる男子は程なく他の又婦人に行くであらうと考へ、或は自分の此の愛が彼に對して苦痛でなければよいとの氣弱い願ひ。

情人は達し難しと云ふ場合、友人であるため、夫として交るには、尊敬を生ずる場合、女の表情に對して、男の無智なる場合、白髪な場合、低級な種族である場合、男子の熱心さの缺乏、時と場處を知らざる場合、斯ふした場合に輕蔑が生ずるのである。友人なるが故に、戀人の感なき、女子の心を知らざるが故に、粗喪を感ずること、貴重なること、秘密を暴露すること、知られたる時には親類より排斥せられるであらうとの恐怖。

以上で大體女子の通せんよ欲しても、之を回避すべき條件に就て、説き終つた積りである。

単性に對しては、適當に明かな方便を執るが宜い。尊重には親近を加へ、侮蔑には智を以て技巧と享樂を施し、粗喪には跪拜、恐怖には、信頼せしめて、之を回復したが宜いであらう。

勇者、その時宜々々に適せる對話をなす者、愛の技巧に達せる者、愛人の業をなす者、社交界の人、大膽な人、趣味に富める人、極めて若い、若くは富める人。

幼年時代より友達であり、或は物語り、手工に堪能なる或る他の者は、戀の使の役目となす。技藝なきも、彼女の弱點を知り、友と交り、共に衣服を着け、奢侈をなし、美しき家柄の人。

従者に愛の技巧があり、家に隣接して住むやうな人、義姉妹の家族、勤勉なる者、施しを好む者。



社交的趣味を知る者、牝牛族と知られたる者、彼女の夫よりも、遙に性醜の秀れたもの。戸口に立つ習慣のある者、夫に對して怒る者、夫に捨てられたる者、子なき者、過失なくして輕んぜられたる者等々である。

又恥づることなき者、石女、會合を齎す習慣のある者、子を失ひたる者、及び足りない者、若くは過失によりて、同棲婦より徒に虐げられたる者、此種の婦人は、絶対に拒むこととはないであらう。

十六歳までの女にして、夫を失へる者、快樂に耽ける者、貧しき者、夫に離れた者、夫の愚かさに困りきつて居る者、愛の技藝に熟達せる者。

長兄の妻、夫の兄弟多くあり、而も夫が旅に出た場合、同棲婦より劣りたる者、常に親類の家に生活する者、嫉妬の強き夫を持つ者、慢心せる者。

何等かの理由に依つて、未だ結婚するに至らざる者、若くは婚約したる者、その男に本來より愛を有せるもの。

旅藝人、不具者、ちつほけな男と、惡臭を放つ者、田舎者、癩病などの病を持つ妻、貧しき者、虚弱なる者の妻、是等の場合は努力を用ひずして得られるであらう。

婦人の左足に於て、拇指の尖端が第二指より長きか、若くは第三指（中指）の尖端の短かい、若くは最小指が地面に觸れざる場合、若くは此の中間の二指（中指と無名指）が地面に觸れざる場合、是等は總て不貞淑なる婦人であると「サームドラ」の賢者等は説いて居る。又理由なくして笑ひ顔する女もさうである。

最初に大膽であり、若くは言語に拘束せられない女に對しては、自分自身がこれに當るべきである。之に反する者は媒介者を要するのである。自分になすべき時の行事に於て情事に關せず、先づ愛を示さねばならない。そして、屢々愛の意味を含んだ秋波などを送るが宜しい。

髪の解き結びをなし、自分の身體に爪の痕をつけ、屢々下唇を噛むが宜しい。或は他事に託して、下婢と共にその話に依つて立つが宜しい。尊敬を以て彼女の言葉を聞かねばな



らない。又接觸や抱擁も必要である。或は子供の愛撫に託つて、彼女の膝を軽く擦るも宜い。或は毎日幾度となく贈品をする。それに依つて關係すべきである。それは自分の妻と共に、氣の置かれぬ會合に於て、彼女と相會すべきである。或は事に託して、僅かの間、美しい身體を示し、足を以て地上に描き、ひそかに微笑んで、緩やかに眺める。

愛を示して、膝の上の子供を抱擁し接吻して物語る。男子に觸れられて、言葉が明瞭ならず、笑ひにまぎらはせて物語る。殊更に長くその側に立ち、それに従ひ「我をして見せしめよ。」と。何等か聲高に物語る。

或は愛する友の膝の上にもたれて、色々な狂態を演ずる。喜劇、賭事、物語を、その下女等と共に之をなし、その下女より彼の話を聞き、自分の如く彼に告げる。又彼の友に信頼を置き、愛よりその友の言葉を實行する。裝飾を着けずして、彼に顔を見せず彼に乞はれて、始めて遅々として花飾りなどを下女の手に渡す。そして溜息をしながら、自分の胸を押へ、恥しげに曖昧に物語る。欠びをしたり、花などで打つたり、美しい嬰の花を飾つ

たり、下女の  
に觸れたりなどする。

斯ふした女子に對しては、單に接觸に止まるよりは抱擁を行ふと宜しい。又水中に入りては、彼女に知られないやうに、彼女の  
に觸れて宜い。

その他尙ほ數十個條あれど、「カーマ・ストラ」と重複する所多々あれば、之を略す。

(六) 娼妓認識法

(A) 娼妓の求める男子 「カーマ・ストラ」

娼妓は情人に  
を與へて生計の資を得る職業の女である。此娼妓も愛の爲に男を  
求めることは、他の女と同じく自然である。併し娼妓が金錢の爲に男に示す愛は不純である。併し娼妓は不自然な愛すらも、實際のものと見えるやうに動作せねばならぬ立場に置かれて居る。何故なら男は斯の如く愛を示すやうに女に愛着を感じるものだからである。娼妓は又特に男に示す愛が眞實なるものと見える爲には、金錢に無關心なるが如く装はねばならない。併し其品位を保持するには金錢を儲けねばならないから巧妙な手段を用ひて



愛人から之を得ねばならない。娼妓は毎日裝飾をつけ、美衣を纏ひ、家の戸口に立つて、外を通る者に見えるやうに、而も特に全身を見せないやうな風に、街路に面して居なくてはならない。何故なら、娼妓は商品のやうなもので、公衆の注意を惹かねばならないからである。併しさうかと云つて餘り曝け出してはならない。

次に情事をなすために娼妓の捉ふべき男子に關して述べて見やう。

娼妓がその後援者として自分の困難を救つて呉れるやうな女、若くは金錢を儲けることの旨い男を選び、情人の何人も之を妨害せぬやうにせねばならない。又次に示すやうな男から、此種の幫助を得なくてはならない。即ち警務の役人即ち警察官、法官、裁判官、それから、占相師、冒險家、武士、自分と類似の教養を受けし者、技藝を自分から學んだ者落語家、花輪を造る者、香料を鬻ぐ者、酒を賣る者、洗濯人、理髮人、乞食僧などの如き男は女を助けるに役立つ者である。

金錢が大なる目的であれば、女は次のやうな男を求めねばならない。獨立せる男、成年

に達せる男、富裕な男、収入の確かに知れて居る人、困難なしに金を付けた人、同一の女に對して他人と情事の競争を爲す男、収入の中斷せざる男、贅澤と美貌などで名高い男、高慢な男、互に競争せる同等の二人の男の中の一人、本來寛大に育つた男、知事や大臣などに關係のある者、運命論者、金錢を賤む男、長上の命令に反く者、社會上顯要の位置にある者、富める父を持つ一人息子、窃に女に昵懇せる偽りの行者、武士、並に醫者、などである。

眞の愛と名聲とを求むる者は次の如き徳を備へて居る人のみを求むべきである。即ち高貴の家に生れた男、學問ある者、國の法律に通じたもの、詩人、頓才ある者、色んな藝能に知識ある者、年齢と學識に相當の尊敬を致して學修の爲に賢者を訪れる者、寛大な心を持つ男、情熱のある男、女に忠實なる者、嫉妬せざる男、氣前のよき男、友の愛する男、習慣的に順禮する者、社交上の會合、音樂會などを催すことを好む男、健全なる男、強壯な男、酒類を好まぬ男、

仕遂げることの出来る男、同情に富める男、善き婦



人を作り得る男、女を可愛がるも而も之に隷屬せぬ男、獨立せる男、愉快に話す男、行動するに躊躇せぬ男、是等は皆適當な情人の性質である。

次に關しては、次の如きものでなければならぬ。娼妓は美貌、年少にして立派な愛すべき身體と、透明な聲音を有し、人物を重んじて、自然に愛すべき性質を有し、意志堅固にして、節を變ぜず、事理を辨へ、貪慾ならず、會合を好み、技能に對する趣味を有せねばならない。

次に擧げるのは情人と娼妓とに共通の好い性質である。智慧のある事、品性優良なる事、正直、恩を感じ、先見の明あり、生來人と争はず、動作するに適當な時と場所を知り、禮儀正しく、阿諛、懇願、高い笑ひ、誣告、惡戯、忿怒、貪慾、吝嗇、不從順、などの惡徳を離れ、移り氣でなく、知人に會ふや、先づ以て挨拶するに遅からず、性愛の學とそれに附隨した技藝に對して知識のある者等である。之に反對な者は絶対に過失であると知らねばならないのである。

又次の如き男子は娼妓と交はる可からざる者である。肺病の男、身體虚弱な男、癡脱衰に虫を交へる者、汚ない口の男、烏が善惡を構はずに食物を漁るやうに女を漁る男、妻を愛せる男、言葉荒き男、吝嗇家、殘忍な男、長上に見捨てられた男、盗人、自負心強く若くは虛榮心の強い男、好からぬ目的に藥草の根を用ふる男、名譽と恥辱との區別を知らない男、金の爲には仇きとでも交際する男、引込み好きの恥しがり家。

女が情人を選ぶ理由に就て説いて見やう。

自然的な眞の愛、危害若くは刑罰の惧れ、(若し男の意に従がはぬ場合) 金、競争、復讐夫を取られた妻などの復讐、男の伶俐さを試みんとする慾望、他人の場合に困難を経験せる事、立派な而も貧しき男への慈善、祭禮の時のやうな、或る一定の場所に 事に依つて女の名譽を感じる者、男に對する同情、女の尊敬せる誰かゞ女に愛を現す時に、斯る貴き人からの要求を拒絶するのは、餘りに厚かましいと思つて、之に同意する者、女の愛する情人にある男の似たる事、斯うした立派な男と關係する事はどんなに幸福である



かといふ考へや、慾情の満足、それも情人が同じ種族の者たる事、又隣り同志である事、従つて親密である。是等が情事を選ぶ理由となるのである。ヴツチャイヤナの意見では單に金錢の考や、女の困窮を除去すべき法、若くは眞の愛情が男を選ぶ決定的事實である。併し男に對して女が有する愛情が、金錢の原因に妨害となつてはならない。金錢が得らるべき主要目的であるからであると。

以上に述べた恐怖其他の原因の中にも比較的の輕重は注意深く考慮せられねばならない。斯の如く娼妓に求むべき幫助の色々、情人に正しきもの、願はしからざる者、それ等の中に選擇を爲す理由が記述せられて居る。男に依つて認められた場合にても、女は遽かに其望みを承諾してはならない。男は一般に容易に得られる女を輕蔑するものだからである。若し男の感情を驗す爲に女は其召使の斯の如き者をして女の用事を爲さしめる。例へば按摩術、音楽等に携はる者、道化者、男の召使ひ、それがなければ落語家など。

是等の者に關いて女は男の性質の善惡、自分に對する熱情の有無、自分に對する愛着の

有無、さうして寛大性の有無を知らねばならない。是等から男が相當の者なる事を知り得たなら、女は男へ愛情を示してヴィタ（召使ひにして幾分氣品を兼ねたる諧謔者）を遣はずであらう。又男の來る場合、女は愛の識しとして何か喜ばしい愉快な品物を與へる。それに添へて女は此品は彼のみが使用すべきやうにと云ふのである。或は、女が男の喜ぶやうな催しなどで歡待しても宜からう。又男が家に歸つた後、女は贈物を持たせて下女を屢々男の許へ遣る。そこで下女は、ピータマルダ（仲介者）乃至は藝人と一緒になつて巫山戯たり面白可笑しい話を爲し、遂に女自身もピータマルダと一緒に一家に行く。そして情人が訪ね來た時には、彼女は愛をこめてパンスリ、花、香料などを與へねばならない。男女間の愛情が深くなれば女は愛の印しとしていろんな物を贈り、又男と品物を交換するのにも効果がある。そして適當な時に男との

示すが宜い。

男と親密になる愛の印しの品物を與へて技藝上の面白い論議をしたり、又情愛のこもつたる取扱ひ等に依つて、其愛情を得たる後は、女は益々男を歡待するやうに努めねばなら



ない。是皆彼等の楽しい結合の原因となるものである。

(B) 情人を悦ばしめる法 「カーマ・ストラ」

女が情人を得たならば、彼を悦ばせる爲に、全く忠實な妻としての義務をなすべきである。併し彼女は男が彼女に戀着するやうに至らしむる様な態度に出でなければならぬ。併し、實際は男に戀着するのはいけないのである。同時に表面だけ、男に極めて戀着して居るやうに見せかけることが必要なのである。

女はその母親、若しくは母親がなければ養母に柔順でなければならぬ。一般に是等の女は頑固で、貪慾であるからである。

母親、若しくは養母は餘り男と親密であつてはならない。若し必要と思へば、是等の男は娘を強ひて男の手から惹き離さなければならぬ。例へば、他の情人の來たやうな場合に。

斯ふした場合には、屢々愛の不満足、不幸、羞恥、恐怖（更に他の情人に行くに當り）

を感じる。併し、女は母親の命に反いてはならない。その理由として、その場合を通じて女は或る説明すべからざる病氣とか、忌むべき性質のものでもなく、又肉眼では認められないやうな病氣と偽るべきである。さうして日を過すのである。若し、又何か言譯が必要ならば、女は男の方へ行き得ない理由を、此の病氣のためだと託つけるが宜いであらう。病氣などの爲に、自分で男の處へ行くことが出来ないことを示す爲に、彼女は男の方へ下女等を遣つて、男の使ひ残した花や、「ベテル」を貰はしむるのである。女は男の力強き

その他の情事に對する嘆驚、六十四藝を男から學びたき熱望、

す場合に教へられた 種々相を屢々用ひたこと、男と會するに際して、男の嗜好に従つたこと等を述べ、加ふるに、二人が相會はぬ前、自分の希望した所は、貴方と一緒にすることであつたこと、自分の身體の秘密場處の缺點を蔽くして居つた事、同じ寐床の中に男が女に反いて寐んとする時、女はこれに肯へんぜざりしこと、女が男の  
觸  
れし時、直ちに悦んで、それを許せしこと、男の眠むれる間に接吻し、抱擁せしことなど



を語るのである。

男が他の事に拘る間、女は熱心に之を注視せし事、男が街路を歩みし折、露臺の上から意味あり氣に眺めて、若し男に認められると羞恥を示せしこと、男の敵に對して、憎悪を友人に對しては愛を感じしこと、彼が好む所のものは何でもあれ、之を好みしこと、彼が悦ばば悦び、彼が悲しめば悲しむこと、彼が他の女に戀着することを心遣ひせしこと、

際し、男が早、

すれば、何時も彼を怒りしこと、男の身體の爪と齒の傷を自

分のなせしものなるを、他の女がなせしかと疑ひを起せしこと。

男が愛を語らずして、表情、姿態を以て示せしこと、酒などに酔ひし時、熱病の讒言には明らさまに之を語りしこと、女は情人の見事な動作に就て賞めねばならない。

男が話す間は、その言つて居ることを了解せんとするやうに、注意深く聞き入り、女子はその言葉を賞嘆の聲で賞める。女の知れる題目になると、その智識を示して語り、男が何かを尋ねると、若し女が男を愛して居ると思へば、相當なる返事をする。男の話を注意

深く聞くけれど、併し他の競争者である女の話になると、耳を傾けないやうにする。又男が深く溜息をし、欠びをし、蹠つと踏ふき、倒れる時は、それによつて害がなかつたか、どうかを心配して見せる。或は男が噁くしゃみをした時、話の間、笑ひ続ける時には、「ジイワ」(御機嫌宜ふとの呪まじなひ)を言ふ。女が何か心に辛さ、悲しさ、例へば、他の情人の死、若しくは病氣などに就て憂を抱く時、男には其悲しみの眞の原因を言はず、唯何か病氣、若しくは女の敵の爲に、苦しんで居るやうに言へば宜しい。他の男の技能の事を言はず、情人の上に見られる過失に類した他人の過失のことで、その人を非難してはならない。又男が何か、さしたる原因もなく、女を疑ふ時、若しくは男が何か悲しんで居る時は、女は裝飾をつけず食を採つてはならない。その爲に泣いたり何かして、悲痛の態度を現す場合、例へば女の母親が非常にがみ、言ふとか、何か困つた事のある時には、男と共に寧ろその地を去ることを云ひ出す。又女が王宮で演ぜられる舞踊や、唱歌等の爲に、王様に雇はれて居る場合は、賠償金を支拂つて、釋放せらるゝやうに、彼に請求したが宜い。



彼のやうな技能の熟達した男を情人として、自分が持つことの幸福を述べるも一法である。男が何か仕事に、或は富、又は成功し、若しくは身體が強健になつた場合などには、神に捧げ物をして、前に掛けた神に對する誓約を履行すべきである。

女は毎日裝飾を身に着けて、少量の滋養物を採らねばならない。

歌つた時に、その歌の中に情人及びその家族のことを入れて歌ふも宜しい。そして、歌ひ疲れた場合には、男の手を取つて疲れを慰さめるやうな仕方、胸や額の上に置くが宜しい。その手の接觸の快感で眠りに入れる態度を粧ひ、或は男の膝の上にあつた時には、其處でのみ、眠りに入るやうに努めたが宜しい。男が何處か友人の家、乃至は神殿等へ行く時には、恰も一瞬間と雖も、彼に離れて居ることが耐へられないやうに、之に従ひ行かねばならない。

女は男の胤たねを宿して、男子を産みたいと言はねばならない。そして、男より長く生きて居たくないことを言ふのである。女は男の知らないことを他人と秘密の場所で相談しては

ならない。女は又男を助けて、その企てた斷食等の誓約を完全に果たさしめる。若し男が病氣、其他の事項の爲に、是等を成し遂げることが出来ないと見てとつた場合には、之をなさしめることを止めさせ、その罪を悦んで、自分で引受けることを言はねばならない。併し、若し止めることが出来ない場合は、男も努めて此の行をやるのである。

女は男の所有物に對して、自分の物と何等差別なく注意せねばならない。又女は彼を伴はずには、決して社交上の會合や、その他の集會などには出席しないやうに努める。そして、男の使ひ捨てた花や、その他のものを身に着けて、或は食事に残したものを食するのを許して貰ひたいと願ふも宜しい。

女は男の家族、品性、技藝、學問、容貌、富、出生地、友人、性質、年齢及び人を悦ばせる話振りを賞讃せねばならぬ。若し又、音樂等に堪能なれば、歌を唱ふやうに進めるのも宜い。何か善根、功德の行ひをなすに當つては、死後に生れて此の男と同一の男を持つたんことを願ふと云つたやうな祈りをするのも一つの方法である。



男と同じ趣味、感情、娛樂などを追はねばならぬ。男が女をものにする爲に、何か藥草の根などを用いたのではないかと云ふ疑ひを述べるのである。これは非常に男を愛せることを知らしめる爲めで、自分は斯く迄に他人に戀着せしことは珍しいことであると云ふ意味を強調さす必要があるからである。

男を愛する餘り、事毎に男の通りにする女の動作に、母親が異存を言ひ立てる場合には喧嘩をしてやつたと男に言ふべきこと。若し、その場合、母親がその事のために、他の情人の下に強ひて連れて行かれるやうな場合は、その爲に寧ろ毒を飲むか、斷食するか、或は何か武器乃至は縊死する爲に繩で死ぬであらうと云ふ。假令、心の中では何等此等のことをなさうとは思つて居なくとも、一つの芝居として、之を演ぜねばならない。

金の支拂ひ等のことに關して、男と論議するのは最もいけない。それに彼女は母親に許しなしに何事をもしてはいけないのである。

男が長く留守にして遠い地方に旅立つ場合には、若し長く歸つて來ないなら、命を懸け

て彼を呪ひ殺すであらうと、眞剣に言はねばならない。不在の間は、願かけをして安全に早く歸るやうに、男の爲に祈りと供物とを捧げて居ることを装ふのである。裝飾も、夫が安全であることを現す「マンガラ」(吉祥)の外は一切使用してはならない。若くは唯一條の貝の頸飾りを用ふるのも一法である。

過ぎたる日の快樂を想ひ起すこと、朝早く、占ひ女の處に行くこと、若くは男の星宿、月の吉凶を相談しても宜しい。若し又吉の占ひを得れば、翌朝之を告げ、幾許もなく男の歸り來たるべきことを言ふのである。若し悪夢を得れば、男に關する極度の恐怖を装ひ「シヤンテイ」(災ひを攘ふ法)をなさねばならない。そして、男が歸れば、愛の神に禮拜するのである。又女は他の神々にも供物をする。そして飯の一握りの供物を戸口に置いて、鳥に喰はしめるのである。是は男に始めて合つた時にも鳥に喰はしめたがよい。

女は寧ろ、情人と共に心中することを言ひ出して宜からう。

次のやうな場合は情人の方で戀着せる標しである。



全然事を女に委せ、全く女の動作に従ふ場合。女の欲する所を満足せしめ、女に利を與へやうとする男、他人を恐れず女と會ひ、惜しむ所なく金錢を與へる男等である。

是等の事實を確める爲に、女は一般に男の品性や動作を観察して「ダツタカ」の教へる所に従はねばならない。戀愛の状態にデリケートなること、一般に娼妓の本性の貪慾なること、及びその本性の無智なることより、娼妓の悉くの性質は最も總明な人に依つても知り難いものである。

娼妓は時として、男を愛し、又忽ちにして、之を憎み、又再び戀着し、次には捨て去るものである。假令、情人より悉く金錢を引出すとも、その動作は不可解である。

(C) 情人より金錢を引出す法 「カーマ・ストラ」

情人から金錢を引出すに二つの方法がある。一つは普通支拂金であつて、他は一定の勘定以外に巧妙な手段に訴へて、之をなす所のものである。前者に關しては、約束通りにその額が支拂はれても、若くは通常以上に支拂はれても、女は何等策略を施してはならない

併しワツチャイヤナの意見では、男は前に一定の額が約束せられた場合でも、何等か巧妙な手段で接近せられたならば、その額の二倍すらも與へるものである。次に示す所の方法を行ふならば、娼妓は、假令男から金錢を騙しても、貪慾であるとは見えぬであらう。

女が次のやうな種類のものを買ふ爲に、男の前で現金を商人等に支拂ふ様に準備する。此の場合、情人は自分で支拂ひをするものである。色々な菓子類、米にて作つた食料品、飲料、花、香料、是等の支拂ひに對しては、情人が必ず支拂ふと言ひ出すものである。

男の金持であることを賞めねばならない。又色々な慈善行爲に託して、即ち斷食の誓約、街路樹等を植へるとか、花園や或は殿堂を建てるとか、貯水池を掘るとか、祭禮を準備するとか或は貴き聖者に喜捨する等の慈善行爲に託つて、情人より金を支拂はしむる場合もあるのである。

男を訪ねた時、盗人や守衛等に自分の裝飾や着物等を取られたことを物語り、又火災や壁の墜落、其他の事故の爲に家の財産の損害を訴へること。同様の原因で情人に借りたり



或は與へられた裝飾の紛失、男に自分の召使等を仲介として、彼を迎へる準備に要する用等のかゝることを告げるのである。又男の爲に支拂ふ金を借りて、それに關して母親と爭論をする。金のないため、友人の家の結婚式などに贈物をする事が出来ないから、列席するのがいやだと云ふやうなことを言ふ。又男には會つてその友人から色々な貴い贈物を貰つたことなどを、前以て告げて置くのも一つの方法である。

日々の必要な物すら、之を支拂ふことが出来ないことを見せるやうに、總てのものを買ふことを停止するのである。又彼女が困難、不安を感じて居た時、會つて彼女に助力を與へて呉れた友人の返禮に就て、情人に物語るも宜からう。家の修繕や、友人の子供の誕生の祝ひや、懐妊した友人へ、その欲する品物を贈らうとしたり、又友人の病氣及びそれを助力する義務、或は他の友人が何か災難に罹つて、今之を慰問し、助力する女の義務等に就いて語るも宜からう。

男の面前にて、その爲の或る費用を拂ふ爲に、女の装身具を賣らんと見せかけるのであ

る。女自身に刺繍等にて糺つた衣服、器物などを或る費用を支辨する爲に、商人に示して賣却せんとする。之を以て男は斯かる品物をすら賣る必要に迫られたことを知らせるが宜し。

女が自分の持つて居る或る器物が、或る娼妓のものと同じ大きさや價值共に、それが同じである故、貸した時などに奪ひ去られる惧れがあるから、それを賣つて少し異つた最も大きい高價なものと取代へやうとする意圖を示す場合もよからう。

前に男の助力を與へて貰つたことを常に屢々繰返して、それを想ひ出しながら彼に對することである。又仲介者に依つて、他の娼妓の一層澤山な収入のあることを話させるのも一法である。

他の娼妓に對して、男の面前で恥しげに、これ迄受けた男からの大きな利益、將進も彼から一層多く期待されることを話するのも宜しい。前の情人から、會つて約定せしより以上の額を以て申出でたるを、言下に拒絶し、同時に斯かる拒絶の事實が今の情人に知ら



れるやうに注意すべきである。

仲介者に依つて、男の面前にその競争者が金銭に寛大の性質なることを言はしめる。男が去つて、女の家に戻り来る見込みのない時には子供を遣つて、心付けを乞はしめたが宜し

5。以上は大體情人から金銭を引出す巧妙な方法に就てある。

次に女に対する冷淡と情人に向つてなすべき態度に就て、記述して見やう。

女は毎日男がなすことに關して、その通常の状態に變化を生じたのを見、又顔色の變化から推して、男の冷淡になつたことを知らねばならない。次の如きものが、その表示である。

承諾した金額よりも、その少量を與へ、若くは請求したものより異なつたものを與へること、それから女の敵と交ること、女がなさむことを求めた所のものより他の事をなす。例へば沐浴せむことを乞ひしに、男が食事等をする場合、日々の家事の費途に要する金銭

さへも呉れないこと、男が約束せしことを忘れ、若くは別な方に、それを説明すること。

女の面前にて暗號で友人と語ること、斯くて女が何の意味なりやを了解しないやうにした場合、友人と或る事務の都合ありしと偽つて、他の場處へ眠る。男の前の妾等の侍女と、その女に關する過去の出來事や將來の計劃等に就て語る。

以上の表示によつて冷淡となつたことを知つた時には女は次のやうに振る舞ふべきである。

冷淡になつたことに女が氣付いて居ると、男が未だ知らぬ先に女は試驗的に男から指輪のやうな何か高價な品物を取つて、女の手保存せんと企劃することである。

前以て相談した上、その女がその男から金を借りたことにし、その男即ち債主が其處へやつて来て、今の品物即ち彼の指輪などを持つて行く。すると男は是が自分のものだと思つて、争論をなし始めたならば、その債主即ちその情人と此の事件の解決をするが爲に、法廷へ行く。



斯の如く冷淡になつた情人に對する行動は述べ終つたと思ふ。

尙ほ女に戀着して居て、會つて助力をしたことのある男に就いては假令愛に假託しても彼との關係を續けねばならぬ。今此の男が貧乏になる。従つて女に前のやうに入り上げる事が出来ないとしても、……

全く無價値となり、同時に女に對しても不忠實となつた男に就ては、他に情人を安全に作つた上で巧妙な方法で之を退けねばならない。

又面白くない情人に對しては、次のやうにして退けたら宜いであらう。

第一には表面に現はれた愛情の上で、謂はゞ男の敵と相交ること、禁ぜられたことをなすこと、輕蔑を示す爲に下唇を突出して見せること、男に對する不愉快を示して足で地底を叩くこと、男の知らない問題に就て、論議を起すこと、男の知つて居る事柄、例へば技術に對する彼の優秀などに關しては、左程賞讃せぬこと、而も之を輕蔑して物語ること、又男に對して全く無關心、又女の要する所、要せぬ所、總て物語らない事。男の缺點と類

似の缺點に對して、他を非難すること。斯くして男に彼が非難の中心であることを知らせるのである。他の男と愛の爲に、若くは隔てなく打ち語らふため、或る秘密の場處に行くこと等である。

第二には表面に現れない所の愛の秘密の動作に關して述べて見やう。

男の情事に對し野卑であると云つて嫌惡の情を現すことである。接吻の爲に、口を許さず、を保護し、爪齒の動作に嫌惡の情を現はす事、男が抱擁せんとするならば、男が胸に觸れざるやうに、間に手を置くこと、身體を硬くすること、さうして抱擁を許さざるやうにする。ことを得ざらしめざること。をなさんとす

る時には眠つて見せること。男の疲勞せるを見て、めること。若し男がなし能はざる時には、之を嘲笑すること。ふ時には、男が立派に満足に之をなすに

も拘らず、女は自分から進まず、又之を補助しない。希望するならば、

他の人々と伍して彼をしてなさざらしめるやうに努めること等の方法である。



次に男がなす技藝や、面會に對する無關心に就て述べて見やう。

男の言葉を間違つた意味に解釋し、男の言つた所に何等滑稽なこともないのに打ち笑つたりし、男が滑稽なことを言ふ場合には笑はず、若し女が何か他のことのために、笑ふ如く粧ふ風にする。又男が話す間、自分の下女に流し目を呉れたり、彼女と打ち叩いたり、さうして彼の言ふ所を蔑視するやうに努めるのである。下女等と他の問題に關して語つたりして、彼の話す所のものを中斷せしめたりするのである。再三再四何か彼の或る改まらない過失や、缺け事等のことを繰返して語り、下女に對して彼の秘密を暴露する等である。

男が女の家に来る時に、妾を見せないことである。又男が前述の如く、男に對する不愉快の表示を氣付いても、女から去らざる時には、請求すべからざる品物を、男にねだつたり、それでも肯んぜざるならば、自分の意思通りに彼を捨てるが宜い。

以上で、「ダツタカ」の教へる娼妓の情人に對する取扱ひの章は終るのである。

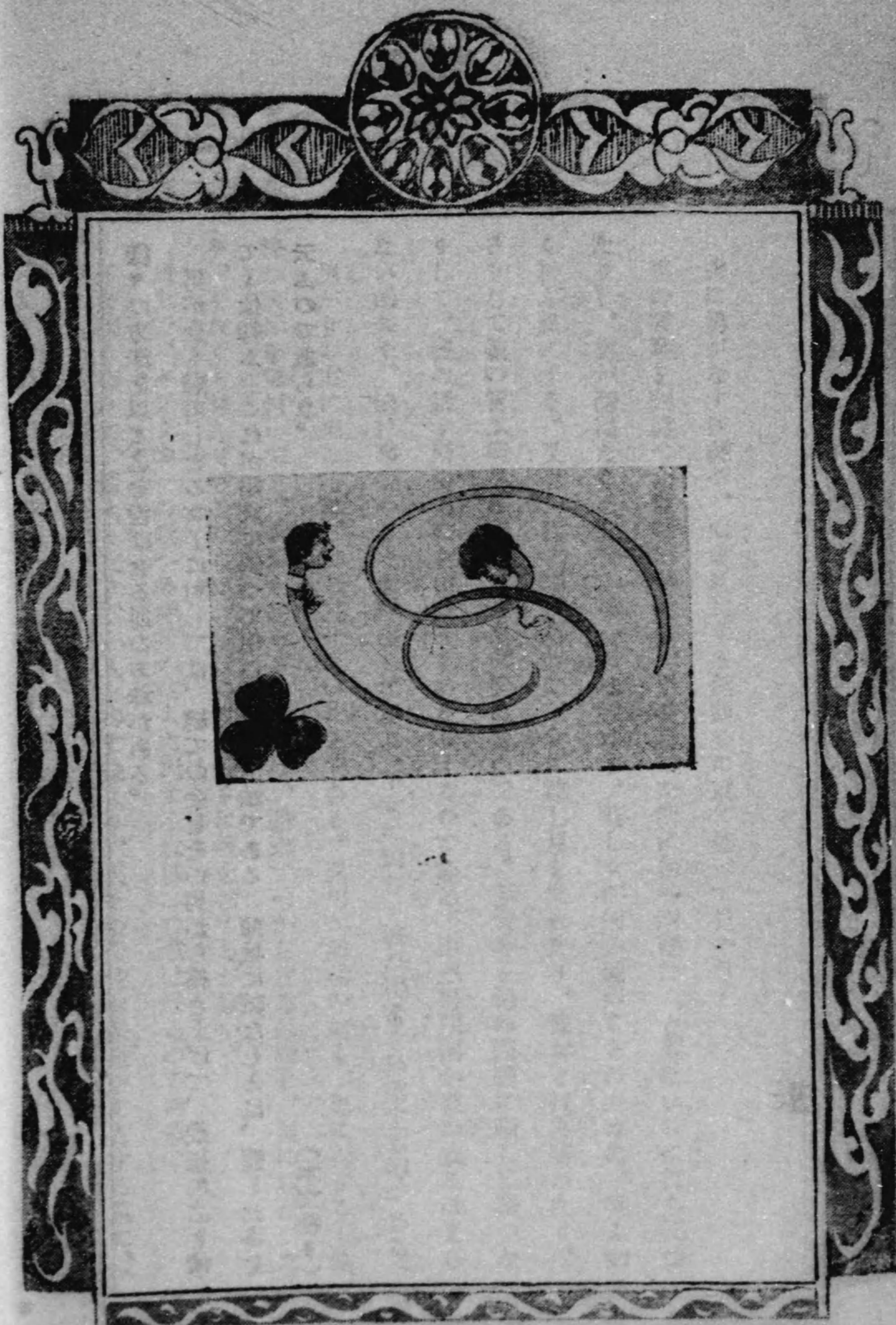
注意深く顧みて、情人と交り、一人を得て後より、又その愛情を保全せんとする爲に、

様々の方法を以て之を悦ばせる所の方法がある。

男が全く戀着したる女子に對しては、總ての金をその男から捲き上げて、最後に之を捨て、仕舞ふ。これが娼妓に依つて用ひられる方法である。傾城に誠なしとは、蓋し此事を云ふのであらう。

(本文終)





# 性及び性崇拜

(第一部) 男根崇拜史

(第二部) 女陰崇拜史

(附録) 日本性的神分布表

(第一部及び第二部)は世界に於ける第一人者たるウォール氏の *Sex and Sex Worship* を譯せしもの。

(附録)は日本に於ける第一人者たる齋藤昌四氏より稿を頂戴せしもの。



大英百科辭典の「キリスト教」の條りに、次の様な一節が書かれてある。

### （第一部）男根崇拜史

|| リンガムに關する一般的考察 ||

#### 一、性の神格化

大英百科辭典の「キリスト教」の條りに、次の様な一節が書かれてある。

「キリスト教以外の凡ゆる宗教は、其根本を洗つて見るならば、何等かの形式をもつた自然崇拜教と云ふことが出来る。而して夫等の異教に於て、最も深く最も強く畏怖心を刺戟する自然作用は、實に生殖作用なのである。「生れること」そして「育つこと」——此の不可思議は自然作用中最も深奥な神祕である。此神祕は凡ての思慮深い異教徒を包み、さまさまの形で表現されてゐる。或るものは稍々清淨なる形式で、又或るものは稍々卑猥なる形式で。」





第一



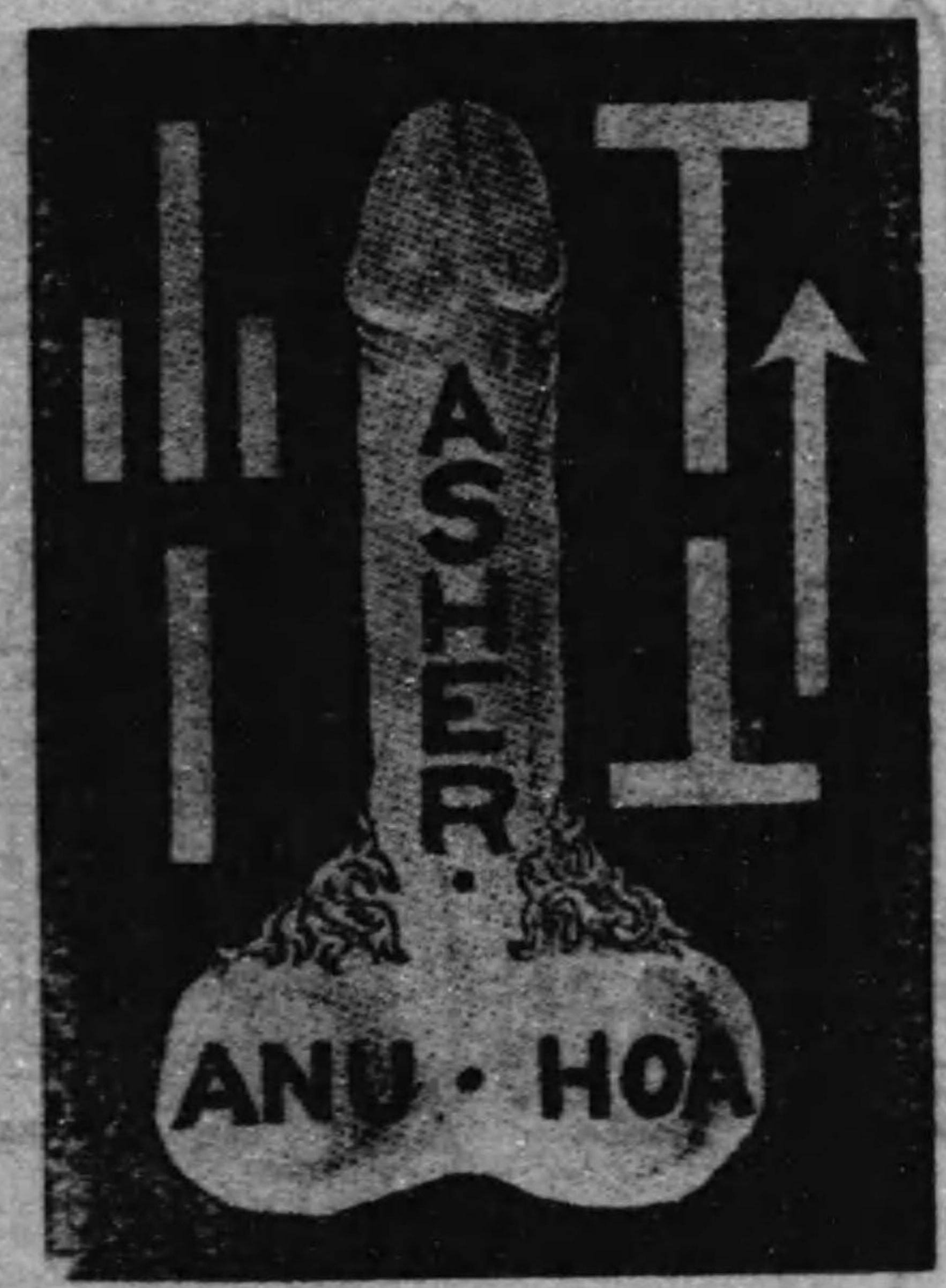
「宗教的感情の起原」獨逸カウフマンの作畫

「邪教を奉じた古代の思想家たちは、今日の科學者と同様、宇宙の起源と保全との隠れた秘密を發く鍵は、實に「性の神祕」の中に藏んであるものと信じてゐたのである。

「二つのエネルギーと云はうか、又は二つの原動力と云はうか、兎に角能動的な或る力(男性)と受動的な他の力(女性)とは、常に或物(又は者)を創造する目的を以て結合されるのであると考へられてゐた。そして天と地太陽と月、晝と夜は生物の創造の爲めに常に共力して働きかけてゐるものであると信ぜられてゐた。古代文明を飾る多くの多神教的崇

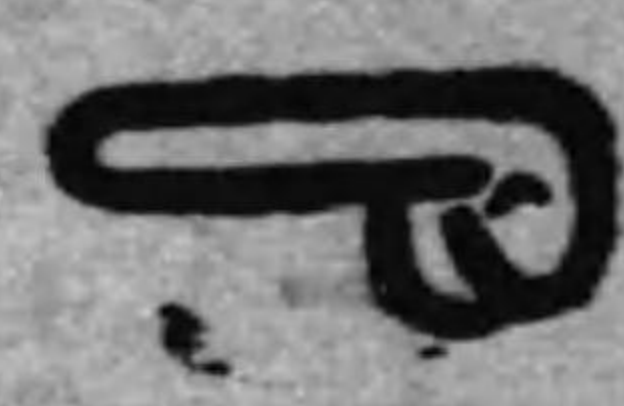


第二



男根とそのシムホル

第三



上

拜の殆ど總ては、斯くの如き基礎の上に立つたものであつて、現象となつて現はれる多くの自然力は、いづれも男女の性を與へられて神格化されたのである。そして人間のもつ諸機能の理想化されたもの、即ち多くの欲望や肉慾と云ふやうなものが、崇拜の目的物として神格を附與せられ人間自らの意志の中に秘む本能は、纏て神格的權化として祀られるに至つたのである。

「で我々が今日、如何なる多神教を調べて見ても性の神格化されてゐないも